



実践報告書

「教育に新聞を」実践 小学校編

- ◇新聞を通して学ぶ (神戸市立鶴甲小学校)
- ◇NIE 活動を通じた主体的な学び (甲南学園甲南小学校)
- ◇情報を活用し、自分の考えをつくる (養父市立宿南小学校)
- ◇NIE で子供の学びの第一歩を支える (西宮市立浜脇小学校)
- ◇新聞に親しみ、読み、発見する活動の実践 (猪名川町立楊津小学校)

「教育に新聞を」実践 中学校編

- ◇NIE から未来を描く (西宮市立浜脇中学校)
- ◇夜間中学での学び (姫路市立あかつき中学校)
- ◇だれもが気軽に取り組むことができる新聞の活用 (神戸市立雲雀丘中学校)
- ◇NIE で特別支援学級小中交流会 (明石市立大蔵中学校)
- ◇NIE 全国大会神戸大会にむけてさらなる NIE 学習の充実へ (姫路市立飾磨中部中学校)
- ◇自分ごととして捉える市民性の向上を目指して (神戸龍谷中学校高等学校)

はじめに

兵庫県NIE推進協議会
会長 竹内 弘明

2025（令和7）年度の実践報告集をお届けいたします。

各実践校の皆様にはお忙しい中、1年間の取り組み、そして貴重なご実践をまとめて頂き、誠にありがとうございました。この実践報告書は実践校の貴重な実践の記録です。どうぞ今後の取り組みの参考にしていただければと思います。

2025年は兵庫県で第30回NIE全国大会神戸大会が開催されました。全国から1800人を超える方々にご参加いただき、「時代を読み解き、いのちを守るNIE」をスローガンに盛大に開催することができました。

実践校の皆様には事前の準備から当日の公開授業や実践発表、ポスター発表等、大変ご尽力を賜り誠にありがとうございました。

初日の小川洋子さんの講演や池上彰さんをコーディネーターとするパネル討議は大変好評でした。2日目の公開授業や実践発表では各分科会で活発な協議が展開されましたし、ポスター発表では全国各地からNIEの実践を発表してくださいました。

2025年は阪神・淡路大震災から30年、戦後80年、インターネット普及から30年という節目の年でした。大会ではこうしたキーワードを取り上げながら活発に議論しました。

SNS上に偽・誤情報が氾濫し、災害が多発する中、命を守るためには、子どもたちが正しい情報を取捨選択し活用する力、すなわちメディアリテラシーを育む重要性を改めて確認し、その手段として、新聞を活用するNIE活動が極めて有効であることを共有しました。

ところで全国学力学習状況調査においては、毎回新聞について聞いており、新聞をよく読む児童生徒ほど正答率が高くなっているという調査結果が出ています。

2025年度の調査において、小学校では「ほぼ毎日読んでいる」児童は3.6%で「ほとんど、または全く読まない」児童は77.5%にもなりますが、両者の正答率には、国語で9.6ポイント、算数15.3ポイント、理科11.1ポイントの差がありました。中学校では「ほぼ毎日読んでいる」生徒は1.7%、「ほとんど、または全く読まない」生徒は81.9%で両者の正答率には、国語で8.1ポイント、数学13.7ポイントの差がありました。（国立教育政策研究所令和7年度全国学力・学習状況調査結果）

また、PISAの調査においても新聞をよく読む生徒の読解力の得点が高いという結果が出ています。（PISA2018）

NIEの取り組みは様々です。小・中・高等学校や特別支援学校など、子どもたちの状況によっても多種多様なアプローチがあり、各校では新聞を材料に、様々な切り口で授業を展開しています。

新聞は子どもたちと社会をつなぐツールです。広い世界への窓です。新聞をうまく活用することで読解力や社会的洞察力、社会的思考力や批判的思考力、メディアリテラシーなど、変化の激しい時代を生きていく子どもたちに求められる力を育成していくことができます。先行き不透明な時代だからこそ新聞の価値を再認識し、新聞という視点から教育に取り組むことは大きな意義があります。

最後になりましたが、NIE活動を推進してくださっています皆様には深く敬意を表しますとともに、心より感謝を申し上げます。今後とも引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。

<目 次>

巻頭言 「はじめに」	兵庫県 NIE 推進協議会会長 竹内 弘明…………… 1
2025年度兵庫県 NIE 実践指定校	…………… 4
【小学校】	
新聞を通して学ぶ ～インタビューと文章の記述～	神戸市立鶴甲小学校…………… 6
NIE 活動を通じた主体的な学び	甲南学園甲南小学校……………10
情報を活用し、自分の考えをつくる ～自分らしく、豊かに生きるために～	
	養父市立宿南小学校……………14
NIE で子供の学びの第一歩を支える	西宮市立浜脇小学校……………18
新聞に親しみ、読み、発見する活動の実践 ～自己の考えを深め、発信する力の育成～	
	猪名川町立楊津小学校……………22
【小・中学校等】	
「新聞が当たり前にある風景」のその先へ ～主体的な学びへと進化した NIE の集大成～	
	姫路市立豊富小中学校……………27
小中一貫として取り組む NIE 教育 ～ふるさと沼島を発信～	
	南あわじ市立沼島小学校・南あわじ市立沼島中学校……………31
【小・中・高等学校】	
新聞を通して伝え合う平和	愛徳学園小・中・高等学校……………36
【中学校】	
NIE から未来を描く ～すべてのいのち輝くまちづくり～	西宮市立浜脇中学校……………41
夜間中学での学び ～新聞記事から生活につながる学びを～	
	姫路市立あかつき中学校……………45

だれもが気軽に取り組むことができる新聞の活用	神戸市立雲雀丘中学校……………49
NIE で特別支援学級小中交流会	明石市立大蔵中学校……………53
NIE 全国大会神戸大会にむけてさらなる NIE 学習の充実へ	姫路市立飾磨中部中学校……………57
自分ごととして捉える市民性の向上を目指して	神戸龍谷中学校高等学校……………61

【高等学校】

「はがき新聞」の活用実践 ～高等学校における効果的な「はがき新聞」活用法について～	
	兵庫県立伊川谷高等学校……………66
探究活動に向けた新聞活用	兵庫県立有馬高等学校……………70
新聞を活用して社会の諸問題について考える	兵庫県立西宮高等学校……………74
新聞を共通言語とする学習共同体の形成 ～NIE を起点とした対話と探 Cue の設計～	
	兵庫県立神戸甲北高等学校……………78
新聞・地図・数字・生成AIを活用して、NIE の未来を開く	兵庫県立網干高等学校……………82
新聞で広げる視野と自ら考える力の獲得へ	兵庫県立山崎高等学校……………86
地域デザイン類型と NIE 活動の取り組み	兵庫県立播磨南高等学校……………90
新聞を活用した異世代・異文化交流	兵庫県立洲本高等学校……………94
定時制高校での NIE 活動	兵庫県立湊川高等学校……………98
新聞を多くの人に読んでもらうために	
	クラーク記念国際高等学校クラークスマート芦屋……………102

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

ライフデザインをすることができる	神戸大学附属中等教育学校……………107
------------------	----------------------

【2025 年度兵庫県N I E 実践指定校】

通常枠 25 校（◆は継続校 ◇は新規校）

兵庫県N I E 推進協議会独自認定校 1 校

〈通常枠〉小学校 6 校

- ◆神戸市立鶴甲小学校
- ◆甲南学園甲南小学校
- ◆養父市立宿南小学校
- ◇西宮市立浜脇小学校
- ◇猪名川町立楊津小学校
- ◇南あわじ市立沼島小学校

神戸市灘区鶴甲
神戸市東灘区住吉本町
養父市八鹿町宿南
西宮市浜脇町
猪名川町木津
南あわじ市沼島

〈通常枠〉小・中学校 1 校

- ◆姫路市立豊富小中学校

姫路市豊富町御蔭

〈通常枠〉小・中・高等学校 1 校

- ◆愛徳学園小・中・高等学校

神戸市垂水区歌敷山

〈通常枠〉中学校 7 校

- ◆西宮市立浜脇中学校
- ◆南あわじ市立沼島中学校
- ◆姫路市立あかつき中学校
- ◇神戸市立雲雀丘中学校
- ◇明石市立大蔵中学校
- ◇姫路市立飾磨中部中学校
- ◇神戸龍谷中学校高等学校

西宮市宮前町
南あわじ市沼島
姫路市市之郷町
神戸市長田区雲雀ヶ丘
明石市西朝霧丘
姫路市飾磨区細江
神戸市中央区神仙寺通

〈通常枠〉高等学校 10 校

- ◆兵庫県立伊川谷高等学校
- ◆兵庫県立有馬高等学校
- ◆兵庫県立西宮高等学校
- ◆兵庫県立神戸甲北高等学校
- ◆兵庫県立網干高等学校
- ◆兵庫県立山崎高等学校
- ◆兵庫県立播磨南高等学校
- ◆兵庫県立洲本高等学校
- ◆兵庫県立湊川高等学校

神戸市西区伊川谷町長坂
三田市天神
西宮市上甲東園
神戸市北区大脇台
姫路市網干区新在家
宍粟市山崎町加生
加古郡播磨町古宮
洲本市上物部
神戸市長田区寺池町

◇クラーク記念国際高等学校クラークスマート芦屋 芦屋市上宮川町

〈兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校〉 1 校

- ◆神戸大学附属中等教育学校

神戸市東灘区住吉山手

【 小 学 校 】

新聞を通して学ぶ

～インタビューと文章の記述～

神戸市立鶴甲小学校 校長 酒井 秀幸
教諭 藤岡 敦洋

1 はじめに

本校は、NIE 実践指定校として新聞を活用した教育実践を始めて、3年目を迎える。所在地は今から 57 年前に神戸市灘区の六甲山の麓にニュータウンとして開発された場所にあり、各年 2 学級、特別支援学級 3 学級に 360 人が学び集う学校である。

2025 年度は、6 年生を中心に、新聞を身近な情報源として、日常生活の中から各教科を通してインタビューと結び付けた取り組みを 1 年間進めてきた。

2 実践の内容

インタビューを通した新聞づくりでは、様々なシーンでインタビュー活動を行い、その内容を用いて新聞づくりに取り組んだ。

① 友達にインタビューしてまとめよう

国語「聞いて、考えを深めよう」の学習を通して、人にインタビューする際の注意点や質問内容について考えるきっかけをもちたいと考えた。そこで、インタビューの仕方や内容、記事の作成方法を、神戸新聞社の方を講師にお招きし、子供たちは記事の書き方や情報の集め方について学んだ。



記事に起こす際、「一つの段落に一つのテーマ」「テーマから目を離さない」「同じ話題は同じ段落に」など注意する観点を教えていただいた。その後、隣の友達に尋ねたいことを絞ってインタビュー活動を行い、これまで知らなかった友達の良さにも気付くこともでき、和やかな雰囲気にも包まれた。



また、インタビュー内容を新聞に起こすという活動を行ったことで、個人でテーマを設定して新聞作成をするよりも、他者を意識した内容となり、意欲的に活動することができた。

② 教科横断的な活動で新聞にまとめよう

家庭科「快適な生活を目指して」では、他教科と組み合わせることで教科横断的な取り組みにつなげることができた。保護者の方に協力いただいて、「家事で楽しいと感じること、工夫していること」を子供たちがインタビューし、新聞記事にまとめた。記事にまとめる際は、PCのデジタル共有ノートを活用した。紙媒体だけではなく、ICTを活用することにも今回は注力した。また、PCのカメラを使用し、家事の様子やインタビューを行った家族を撮影するの

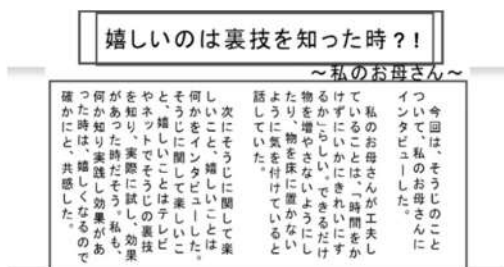


にも使用した。

児童自身が写真撮影の仕方にこだわったことで、伝えたい思いがより具体的となり、新聞の内容が一層深まっていった。



また、記事にまとめる中で、「見出し」のつけ方にも注意を払い、多くの人に読んでもらえるような紙面づくりを考えながら楽しく活動に取り組むことができた。



見出しにこだわることで、読み手の興味を引く言葉を自分で探し、言葉選びに時間をかけるようになった。また、ただ書くだけでなく、「伝わりやすい言葉とは何か」「インタビューした方の思いを正確に伝えるにはどうすればいいか」と熟考し、読み手を意識するきっかけとなった。さらに、作成した新聞を学級内で紹介し、新聞コン

クールを行った。「見出し」「本文の内容（言葉選び、印象的だった文章）」などもポイントとして紹介し、友達の名前で選ぶのではなく、しっかりと学んだことが活かされているかといった観点をもって取り組むことができた。評価される場所をつくったことで、意欲が向上した子供もいた。

③ 鶴甲小学校の良いところを知ろう

本校の教職員にインタビューを行い、その先生の紹介や鶴甲小学校の素敵などところを広める新聞をつくることで自分たちが通う小学校の良さを外部に伝える活動を行った。



インタビューの手法については、これまでの活動と同じだが、今回はこれまでの「友達」や「保護者」と少し違った意識を持ち、身近な他人という面で、インタビュー内容をさらに吟味する姿が見られた。また、「礼儀」「話し方」など、コミュニケーションに必要なスキルにも注意して行うことができた。インタビューは複数人で行い、持ち帰った内容を精査する時間、「編集タイム」を設けた。



そうすることで、記事作成が苦手な子供も一緒に活動しながら思考が整理され、書

くべき内容がより明確になった。編集作業後は、実際の新聞を参考に「句読点のつけ方」「見出しの文字の工夫」「レイアウト」等に注意し、新聞を作成した。



さらに、校内向けに完成した新聞を教室で新聞コンクールを開催して他者参照したり、階段の踊り場に掲示して他の学年の子供たちに見てもらおう機会をつくったりした。



④ 鹿児島県の小学校との NIE 交流

夏休みに行われた NIE 全国大会発表で活動を知ってくださった、鹿児島県南さつま市立川畑小学校の先生と知り合ったことで、9月下旬に NIE の取り組みに関する交流を行った。川畑小学校は5年生が対象で、同じように新聞づくりに取り組んでいた。両校の小学校紹介などの時間を設けながら、本校の新聞づくりに関する取り組みを伝え、川畑小学校での今後の新聞づくりに活かしてもらおう交流となった。本校にとっても、他校との交流は大変有意義なものとなり、より一層新聞づくりに対する意欲が向上した。さらに2月には、2回目の両校の交流会が行われ、川畑小学校で作られた新聞を見て感想を述べるといった交流が見られ、両校の実践を称え合えることができた。こ

うした交流は、NIE 活動を進めるうえで、児童の意欲も向上し、刺激を受けるものとなった。

⑤ 総合「地域の良さを伝えよう」

家庭・学校に続き、最後に地域へと目を向ける活動に取り組んだ。地域の方に自分たちの街の素敵な点・課題点をインタビューする活動を行い、鶴甲地域に暮らす人々が、地域をどのように思っているのかを知ることが目的とした。また、そのインタビュー内容をもとに、さらによりよい地域にするために自分たちにできることを考え、地域の一員として良さを伝えたり改善策を考えたりすることに取り組もうと考えた。インタビューは、地域に長く住まれる自治会の方や校区内にある老人ホームで働かれ



ている方にさせていただいた。「素敵なところ」「良いところ」だけではなく、「困っているところ」を聞くことで、これから考える改善点につなげていった。今回はグループで新聞作成を行い、編集作業後もグループで1枚の新聞を作り上げた。話し合うことで、見やすいレイアウトにもこだわることができた。

さらに今回は字数を制限し、記事内容を



精選することにも試みた。児童は「短く言い表せる言葉はないか」「削れるところはないか」など、文章を推敲する時間を多くとることで、話し手の気持ちにぴったりの言葉を探す経験を行い、改めて文章を作ることの難しさと面白さを感じることができた。



3 成果と課題

○成果

一つ目は、インタビュー活動を繰り返すことで「聞く力」「考える力」が大きく育ったことである。相手の話をより深く聞き出そうとする姿勢や、5W1Hを意識した具体的な質問、段取りに縛られず柔軟に聞こうとする力が伸びた。また、話題の分類や段落構成を意識した編集作業により、必要な情報を選び取る力や推敲の意識も高まった。

二つ目は、新聞の構成や表現を意識しながら記事を書くことで、「伝える力」「書く力」が向上したことである。見出しの工夫、写真撮影の仕方、言葉の使い方にこだわる姿が多く見られ、「読み手を意識する」姿勢が確実に育っていった。さらに、新聞コンクールによる他者評価や友達の作品から学ぶ機会が、自己表現を見直すきっかけや学びに向かう意欲の向上につながった。これらの積み重ねにより、主体的に学ぶ態度が顕著に表れたことは、今後の子供たちの学びに大きな影響を与えたはずである。

○課題

一つ目は、インタビューや新聞づくりに

熱心に取り組むあまり、「決められた時数より多くの時間をとってしまった」ということである。特に質問内容の精査や編集作業、見出しの工夫など、深めれば深めるほど時間がかかり、単元計画の調整が必要だと強く感じた。

二つ目は、インタビュー内容の質にばらつきが出たことである。同じ人にインタビューする際、「なぜ」「どうして」に踏み込めない児童も多く、具体性が不足したために、出来上がった記事が単調なものになってしまう場面が見られた。また、言っていないことを書いてしまいそうになったり、聞き漏らしによってつじつまが合わなくなってしまうたりするケースが見られ、必要な情報の取捨選択が難しいと感じた子供たちがいた。さらに、写真の扱い方や文章のまとめ方など、実際の新聞表現に近づけるためには、より継続的な指導とモデル提示が求められ、指導の難しさを痛感した。今後、このような活動を行う際は、時間配分の工夫と質問づくり・編集に向けた指導者としてのスキルアップが必要だと感じた。

4 おわりに

2025年度、初めてこのNIEに取り組み、まとめを作成している今、私自身が様々なことを考え、経験できたことが一番の収穫であった。本実践で、新聞づくりを通してインタビュー活動や記事作成に取り組む中で、子供たちの「聞く力」「考える力」、そして読み手を意識した「伝える力」が着実に育ったことは言うまでもない。相手の思いを引き出そうとする姿勢や、情報を整理して分かりやすく表現しようとする姿から、主体的に学ぶ態度の高まりも見られた。多くの課題も見つけたが、活字離れが進む中で子供たちが新聞というツールを使って学び続ける姿を見届けられたことが、何にも代えがたい喜びである。

NIE 活動を通じた主体的な学び

甲南学園甲南小学校

学園長兼校長

祢津 芳信

School Librarian

田代 弘子

1 はじめに

甲南小学校・幼稚園は、創立者・平生鈇三郎が掲げた「健全な常識を持った、世界に通用する紳士・淑女たれ」という建学の精神のもと、徳・体・知のバランスがとれた教育を実践している。現在、研究テーマに「個別最適な学び・協働的な学び」を掲げ、児童が主体的に学べる学習環境の充実を図っている。

児童一人ひとりが、自らの興味・関心に基づいて問いを立て、他者と対話しながら納得解を見出していく。そのような「主体的な学び」を実現するための強力なツールとして、私たちは「NIE (Newspaper in Education: 教育に新聞を)」に着目した。新聞は、社会の「今」が凝縮された情報の宝庫であり、教科書と現実社会を繋ぐ架け橋である。本報告では、NIE 導入2年目における具体的な実践と、そこから見てきた児童の変容について詳述する。

2 「平生鈇三郎 没後 80 年」展示会

～歴史と社会をつなぐ～

本校評議員であり、元 NIE 推進協議会会長の秋田久子氏より寄贈された神戸新聞の「一面コレクション」は、本校にとってかけがえない教育資源となった。これを用い、学校の歩みと社会の変遷を重ね合わせた「未来に伝えたいニュース」展を校内で開催した。

児童たちは、自分たちが毎日通う学校の歴史が、日本、そして世界の歴史と地続きであることを目の当たりにした。展示を見た児童から、「平生先生は、戦後、疎開先から帰ってきた子どもたちの無事を見届けてから亡くなったんだ」という声が上がった。これは、単なる知識としての歴史ではなく、時代背景を伴っ

た「生きた実感」としての学びが生まれた瞬間であった。

展示をより身近なものにするため、図書委員会が中心となり、平生先生の言葉を引用したオリジナルしおりや、平生先生の肖像をデザインした缶バッジを配布するイベントを併催した。全校生が楽しみながら建学の理念に触れる仕掛けを作ったことで、低学年から高学年までが、新聞というメディアを通じて自校のルーツを再確認する機会となった。



〔「平生鈇三郎 没後 80 年」展示会〕

3 NIE 全国大会神戸大会での公開授業

さらに、NIE の核となる活動として、書評合戦「ビブリオバトル」を新聞に応用した独自の探究学習「シンプリオバトル・プログラム」を開発した。これを総合的な学習の時間に系統立てて組み込み、第 30 回 NIE 全国大会神戸大会において4年生が公開授業を行った。



〔NIE 全国大会神戸大会公開授業の様子〕

① プログラムの構成 (5 つの STEP)

シンブリオバトル (SB) は、記事を紹介するだけでなく以下の5段階を経て学びを深めた。

STEP 1: 自分で作った新聞で SB

自ら記者となり、身近な出来事を新聞にする。

「送り手」の立場を経験することで、見出し・リード・写真といった記事構成の重要性を理解する。



STEP 2: こども新聞の記事を読んで SB

複数のこども新聞から、「面白い」「伝えたい」と思う記事を選択する。情報の取捨選択という、主体的な学びの第一歩である。

STEP 3: 友達の選んだ記事で SB

本プログラムの独自の試みとして、あえて「友達が選んだ記事」を担当して、プレゼンを行う。他者の視点を自分なりに解釈して伝えるプロセスを通じ、多角的な視点を養う。

STEP 4: チャンプ記事で討論

最も読みたくなった「チャンプ記事」を決定する過程で、なぜその記事が心に響いたのかを言語化し、集団で思考を深める。

STEP 5：課題発見と解決策の立案

記事の内容を「事実」として受け取るだけでなく、そこにある社会課題に対し、「自分ならどう解決するか」を考える。

② 公開授業の様子（4年生 28名）

4年生の公開授業では、児童たちが「今、もっとも伝えたい記事」を手に、熱気あふれるプレゼンテーションを展開した。

例えば、社会人野球（都市対抗野球）を取り上げた記事を選んだ児童は、「なぜ東京ドームで行うのに『大人の甲子園』と呼ぶのか」という疑問を呈した。ここで重要なのは、本校のNIE活動において導入している「NIEノート」の三段階思考（感動・疑問・意見）である。この児童は、疑問に対して「社会人であっても、甲子園を目指す高校生と同じくらいの熱量と喜びがあるからではないか」という自分なりの仮説（意見）を堂々と発表した。

また、チャンプ記事に選ばれた「原爆で体験した言葉を本に（朝日小学生新聞）」をプレゼンした児童の姿も印象的であった。授業後、新聞記者の取材に対し、その児童は「選ばれたのは嬉しいけれど、みんなの記事も良かった。記事を通じて戦争について知ってもらえて良かった」と答えた。勝敗というゲーム性を入り口にしつつ、最終的には「情報の価値を共有し、共に社会を考える」という高次の目的に到達していた。

予選通過の記事

1. ペンギンの捕食世界初撮影
毎日小学生新聞 7/2
2. 社会人の頂点を目指す大人の甲子園
毎日小学生新聞 7/31
3. 「はやぶさ2」サンプルリターン
毎日小学生新聞 7/26
4. 日本人が乗った「ソユーズ」
毎日小学生新聞 7/12
5. 暑さに強い体を作ろう
読売 KODOMO 新聞 6/12
6. 日本一の産地を守ろう(サクランボ)
毎日小学生新聞 7/7
7. トカラ列島地震 4.2cm 動く
毎日小学生新聞 7/12
8. 原爆で体験した言葉を本に
朝日小学生新聞 7/24



ある日、鬼屋敷の「新聞」のノートに「新聞だいすき」と書かれていた。

「新聞♡NIE」の文字も思いつけた。だから、NIEの授業で気合を入れてるときは「NIEさん♡ダイスくん」とみんなで叫ぶようにしたのだという。

（車松充恵）

民主主義の大切さを次世代に 東京新聞のNIE

N I E 神戸大会㊤

元気にシンブリオバトル

ぱらぱら
じっくり
NIE 教育に新聞を

〔東京新聞 9月2日〕

授業後の講評では、「子どもたちが新聞の中に自ら価値を見出し、主体的・対話的に学びを深めていた」「学校図書館がうまく機能している」と評価をいただいた。

当日の様子は、神戸大会を通して大活躍をされていた「グラフィックレコーディング(グラレコ)」として、その日の学びが1枚の美しい図にまとめられた。内容を振り返る貴重な資料となったことに、改めて感謝申し上げたい。



〔らくがきレコーダーズ神戸〕

項目	実践前 (%)	実践後 (%)	変動値
新聞を読む頻度 (毎日・ときどき)	38.40%	81.50%	+43.1pt
記事について対話 (よく・ときどき)	50.00%	74.10%	+24.1pt

〔児童の新聞意識調査〕

事後アンケートでは、「新聞を読む頻度」が38.4%から81.5%(+43.1pt)へ、「記事について対話する頻度」が50.0%から74.1%(+24.1pt)へと大幅な増加を示した。これは、本プログラムが学校内の学習に留まらず、社会的なテーマを巡る対話の機会を日常生活(家庭等)にまで拡張させたことを意味している。児童が「押し記事」という共有可能な発信源を持つことで、他者とコミュニケーションを図りたいという内発的な欲求が喚起された結果と言える。

今後も、新聞を通したコミュニケーションの在り方を探っていきたい。

4 パネル展示と地域・全国への広がり

NIE 全国大会のロビー展示では、本校の2年間の歩みを「ふれる・つくる・かんがえる」の視点で紹介した。また「伝統文化の継承(6年生)」と題し、地元・神戸市東灘区のだんじり曳行体験を通じた地域交流の記録を号外として展示した。

当日は6年生9名が参加し、自らの言葉で号外の内容について「30秒プレゼン」を行った。だんじりの上から見える景色やお囃子の音、統率のとれた踊りなど、実体験に基づいた発表に対し、来場者から温かい拍手と質問をいただいた。ホールで着席して話すのとは異なる、ポスターセッション形式での発信は、児童にとって極めて貴重な経験となった。

これらのポスターは、メディアフェス横浜2026(ニュースパーク日本新聞博物館)や、東灘区の「住吉だんじり資料館」でも順次展示され、校外への発信を継続している。



〔だんじり曳行体験での児童〕

さらに、メディアフェスでのご縁から「しまんと新聞ばっぐ」の高村さんと繋がり、児童と共に神戸新聞の連載『かなしきデブ猫ちゃん』の絵柄を用いた新聞ばっぐを作成し、SDGsについて思考を深める契機となった。



〔しまんと新聞ばっぐ〕

5 公開授業後の展開 STEP5

ステップ5において、児童は「大阪・関西万博」に強い関心を持ち、自主的に関連記事を収集し始めた。新聞や図書館資料を活用し、万博のテーマに対する自身の意見を「パビリオン」として構想・発表する活動へと発展させた。

ここでも「NIE ノート」の三段階思考が、単なる事実の受容を、批判的・創造的な思考へと結びつけるメタ認知ツールとして機能した。特に「疑問に対して必ず自分なりの答えを用意する」という指導を徹底したことで、自ら課題解決の視点を持つ姿が見られた。

発表会では、互いのパビリオンを巡り、その国の特徴を反映したシールを集める工夫を取り入れたことで、楽しみながら学び合う意欲に繋がった。



〔甲南万博パビリオン巡り〕

6 新たな展開

未来へのシンブリオバトルと未来新聞

活動中、ある児童から「新聞は未来のことを書いていないのか？」という問いが出た。これに対し「新聞には今の課題と地続きの未来が書かれている」という気づきが生まれ、全員で「2050年3月6日の未来新聞」を作成することとなった。

はじめに、現在の課題であるトピックを切り抜き、三段階思考で未来の解決策を構想。理想教育財団の「はがき新聞」や「壁新聞」を用いて形にした。

「はがき新聞」を用いたシンブリオバトル

形式の発表を行ったが、児童の意識は次第にチームの壁新聞で自分達の考えをどう表現するかという点に注がれていった。

作成過程では、児童自ら「だれにでも読みやすい、やさしい日本語の新聞にしよう」と提案があり、ルビ振りや大きな文字、読み上げ機能付きQRコードを配置するなど、ユニバーサルデザインを意識した工夫が見られた。



〔未来新聞発表会〕

完成後の壁新聞発表会を終えると、以下のような議題で討論が行われた。

- 1組：「地球は絶滅すると思う？」
「子どもに選挙権、ほしい？」
- 2組：「家事を全部ロボットがしてくれる未来は幸せ？」
「すべての人が過ごしやすい街を作るための工夫は？」

討論は白熱し、特に家事ロボットの議論では「人間がわがままになるのでは？」「人間がやることは家事だけではない」といった意見から、最終的に「愛とは何か」という本質的な問いにまで発展した。

事後のノートには、自分の考えがびっしりと綴られており、児童の著しい成長を実感した。今後も新聞を通じ、自らの頭で考え、自分の言葉で表現できる力を育てていきたい。



〔児童の事後ノート〕

情報を活用し、自分の考えをつくる

～自分らしく、豊かに生きるために～

養父市立宿南小学校

校長 中村 雅志

教諭 西岡ひかる 福井 克宏

安本 由香 菅原 幹生

1 はじめに

本校は、養父市北部に位置する、全校児童 26 人の小規模校である。地域の先人である江戸時代の儒学者「池田草庵」先生の教えをもとに、家庭・地域とのつながりを大切にしながら学校教育を推進している。

2024 年、同和問題を取り上げ、差別解消のために学校教育において、子どもたちにどのような力を身につけさせるべきかという校内研修を行った。科学的根拠のないこと（迷信や噂等）によって様々な不合理が生じることに気づき、これらに惑わされず正しく判断し行動する態度を養うことが肝要であることを共通理解した。それを基本として、2024 年度 NIE のテーマを「情報を活用し、自分の考えをつくる」ことができる児童の育成とした。さらに、NIE の年間カリキュラムを作成し、2025 年度は、低学年部（新聞に慣れ親しもう）・中学年部（自分が体験したことを発信しよう）・高学年部（情報を活用し、自分の体験をもとに表現しよう）と NIE の実践を系統的に取り組むこととした。

また、6 月 25 日には、神戸新聞社 NIE・NIB 推進部シニアアドバイザー三好正文氏を招聘し、NIE の研修を行った。そこで、学年に応じた取り組みやすい NIE 実践（※1）をワークショップ形式で紹介していただいた。また、新聞の特長から読み方、NIE で育むことができる力やフェイクニュースの見つけ方など新聞のいろはを楽しく学び、教師も児童と共に主体的かつ多角的に情報を扱う醍醐味を再確認する機会となった。

※1 ○新聞に載っている大きな数を探そう。○まわしよみ新聞・新聞から癒やしを見つけよう。

○新聞から夏を見つけよう。○バラバラ四コマ漫画を完成させよう。○新聞紙でファッションショー○新聞から知ってるカタカナを探そう。○新聞からクイズの答えを探そう。○新聞からいろいろ集め（動物、食べ物、スポーツ、乗り物、気になる記事）



2 実践の概要

（1）新聞閲覧コーナーの設置

配達された新聞を全校生が読めるように、こども新聞を含む一般紙を 1～4 年生のワークスペース（2 階）、5・6 年生のワークスペース（3 階）に置いた。また、神戸新聞社より寄贈された閲覧台を設置したことによって、児童は、より見やすく手に取りやすくなり、興味・関心のある記事に目を通すようになった。



（２）各学年の取り組み

① １・２年生

○図工 新聞を切ったり、つなげたりして好きな世界を作った。

「しんぶんと なかよし」「くしゃくしゃ ギゅっ」「つないで つるして」

○幼小連携「無限しっぽとり」

新聞紙を細長く切り、しっぽとりをした。しっぽを全て取られても、新しいしっぽをつけて参戦できるのが利点である。最後はしっぽを丸めてダンボールの中に投げて入れるゲームにして、新聞に慣れ親しみながら活動した。



○国語「習った字をみつけよう」新聞記事の中からこれまでに習ったカタカナや漢字をみつけた。

○生活「冬となかよし」新聞記事の中から冬だと感じるものを見つけて発表した。

○学活「学級での出来事を新聞にまとめよう」では、実際の新聞を参考に、文字の大きさや目次の配置が読みやすさに繋がっていることに気づき、構成を工夫して記事を書くことができた。学級で収穫した野菜のことや、友だちの頑張りを題材に選ぶなど、終始意欲的に取り組む姿が見られた。

② ３・４年生

環境体験学習「里山体験」の新聞作り

７月１日、神戸新聞社 NIE・NIB 推進部シニアアドバイザーの三好正文氏に来校していただき、新聞の書き方について講習をしていただいた。

新聞記事（以下、記事）は、その内容が読み手に速やかに伝わるよう可能な限り簡潔にまとめられている。自分が「何を」「どのように伝えるか」、そして読みやすいものにするにはどうしたら良いか考えさせる良い機会となった。

今回は、新聞作成アプリ「ことまど」を使い「里山新聞」作りを行った。実体験に基づく記事が書けると考えこの題材にした。

アプリを起動すると、テンプレート画面に移動し、指示に従って入力するだけで新聞ができあがる。３・４年生の児童にとってやや難しい面もあるが、新聞に慣れ親しみ情報活用能力を身につけていくために大事な一歩となりうると考える。



三好氏から「５Ｗ１Ｈ」が示され、それに答える形で言葉を当てはめていくと自然と記事になっていった。こうすることで文章作成に対する抵抗感も緩和されていった。また三好氏からは、

逆三角形論・・・伝えたいことを見出しで大きく表示

- ・どんな記事を書きたいか（伝えたいか）
- ・効果的に 視覚的に・・・一覧性（一目見て記事の内容が分かる）
- ・はじめに 結論を書く
- ・人とちがう 記事（独自性）

以上が大切であると教えていただいた。

毎日のように記事を書いておられた方の言葉は重く説得力があった。講習を受けた児童にとって、「自分の体験を文章化できたこと」や、「文章の組み立てを考え、書くコツがわかったこと」が大変意義深い授業であった。

里山体験を新聞記事に

児童9人が出前授業参加

宿南小



里山での体験を新聞記事としてまとめる児童たち＝宿南小学校

父 養 養父市八鹿町宿南の宿南小学校で、児童らが校区の里山を探索した体験を本紙記者の指導で記事にまとめる出前授業があり、3、4年生の9人が参加した。同校は日本新聞協会のNIE（教育に新聞を）実践指定校で、神戸新聞NIE・NIB推進部の三好正文・シニアアドバイザーが講師を務めた。

里山体験は5月、奥三谷地区で実施し、子どもたちは「山のにおいや鳥の鳴き声、川の音を具体的に表現しよう」と呼びかけた。児童らは「木を切ったのはのこぎりで木を伐採したり、植物を探して名前を書き込むネーチャーピングを楽しんだり、まき割りを行いました。三好アドバイザーは、人家のそばにある里山の自然の大切さを伝えて「イチオシニュースを詳しく書こう」「山のおいしや鳥の鳴き声、川の音を具体的に表現しよう」と呼びかけた。児童らは「木を切ったの



が一番楽しかった」「川でサワガニを捕ったよ」「みんなで食べた弁当がおいしかった」「グミの実を食べた」などと発表。楽しかった記憶をたどり、5W1Hに沿って記事を書き、見出しを付けた。4年の小川煌琥さん（10）は「新聞の作り方や見出しの付け方が分かった。サワガニの卵を見つけたことを記事にした」と話した。

③5・6年生

朝のスピーチでの活用

5・6年生は、朝のスピーチで新聞記事を活用している。新聞から関心を持った記事を選び、その内容について概要を説明し感想を伝える。聞いている児童は、気になったことを発表の後に質問をしたり感想を伝えたりする。

このやりとりの積み重ねにより、毎日のニュースにあまり関心を持たなかった児童が、社会の様子に少しずつ関心を示すようになった。また、新聞記事を切り抜き、そこで使われている漢字の練習をするなど、自主学習に新聞を活用する児童の姿も見られた。

＜児童の感想＞

- ・社会の出来事がたくさんわかったし、新聞の構成もよくわかりました。これからは新聞を読むようにしていきたいです。
- ・新聞の発表は難しいけど、自分で新聞記事の発表をしていろいろなことが知れたし、友だちの発表を聞いて「上手だな。」と思いました。世界で何が起きているかが分かり、みんなの伝えたいことも分かりました。
- ・いろいろな記事を読んで世の中のいろいろな情報を知ることができました。それによって、いろいろな情報を読み解くことができるようになりました。新聞を読むことが楽しくなって、新聞の面白さが分かりました。これからは、時間があつたら新聞を読んでみたいです。



2025年7月9日神戸新聞朝刊

④新聞づくりアプリ「ことまど」の活用

2024 年度、神戸新聞社教育 ICT 部ことまど普及委員会事務局の武藤邦生氏とオンラインにて新聞作りにおけるアドバイスをいただいた。それを参考に、2025 年度も「ことまど」を活用して新聞作りに取り組んだ。

○5 年「社会をよくするための課題」を新聞に
国語の単元『子ども未来科』で何をする」の学習で、社会をよくするためにどんな課題があるかを考え、「ことまど」を使って新聞作りをした。課題と思うことについての情報を集め、資料を活用しながら文の構成を考えた。「食品ロス」「海洋プラスチックごみ」「いじめ」など、それぞれ自分が課題に思うテーマを設定し、調べたことを、伝わりやすいよう考えて新聞の作成を進めた。新聞を作るにあたり、もう一度新聞を手に取り、構成などを確認しながら作っていった。試行錯誤しながらも本格的な新聞を簡単に作ることができ、自分の考えを友だちに伝えることができたことに達成感を感じられた取り組みとなった。

○6 年「おすすめパンフレットを作ろう」

「ことまど」を活用し、国語科の単元「おすすめパンフレットを作ろう」に取り組んだ。今回は「2 記事・2 写真」のテンプレートを使用し、課題は「相手や目的を明確にして、推薦する文章を書こう」と設定した。

ある児童は、新しくタブレットが導入されたことを受け、「誰でも気軽に楽しめ、勉強の合間に息抜きができるブラウザゲーム」を紹介することにした。目的が明確だったため、構成から編集までスムーズに進めることができ、「ことまど」の直感的に編集できるという特長が非常に有効に働いた。完成した新聞を印刷してワークスペースに掲示すると、他学年の児童も興味深く読んでくれた。作成した児童も、自分の表現が他者に届く喜びを感じ、大きな達成感を得ることができたようだ。

3 成果と課題

2025 年度は年間カリキュラムをもとに、

低学年の「親和」

中学年の「発信」

高学年の「活用・表現」

と、発達段階に合わせたステップで NIE の実践を重ねてきた。各教科に少しずつ新聞を取り入れたことで、子どもたちがより主体的に、楽しみながら学びを深める姿が見られるようになった。系統的な取り組みによって高学年でできることが増え、学びの幅もぐんと広がっている。

少しずつではあるが、社会の動きに関心を持ち、自分の体験を通して考えを持てるようになってきた。「伝えるのが楽しい」と感じる子や、友だちの考えを大切に受け止める子が増えてきたことは、大きな喜びである。

講師の三好氏からは魅力的な実践を数多く紹介していただいたが、日々の活動に追われ、十分に取り組みなかった場面もあった。しかし、NIE の実践で育まれる「社会の課題を見つけ、解決のために行動する力」は、現代の学校教育が目指す資質・能力そのものである。これからも、一人一人が未来を生き抜く力を育みながら、その学びを地域や自らの夢へとつなげていけるよう、温かな土台づくりを推進していきたい。



NIE で子供の学びの第一歩を支える

西宮市立浜脇小学校 校長 有元 宏次
主幹教諭 小園井 大樹

1 はじめに

隣接する浜脇中学校で、実践されている NIE について、2025 年度より浜脇小学校でも取り組むことにした。小学校と中学校の連携を深め、進学にあたってのギャップを小さくすることは、ねらいのひとつである。

一方、浜脇小学校として NIE に取り組みが必要と考えた背景を述べる。子供のおかれた生活環境面からは、①インターネットを介したメディアに触れる機会の増加、②伴ってそれらを視聴する時間の増加、③共働き家庭の増加による家庭での学習機会・学習時間が減少、④サブスクリプションの普及によるサービスの個別化と児童が得る情報リソースの偏りが挙げられる。そうした環境にある児童が見せる学校での学びの姿の面からは、①読んだり、手順を理解したり、意味を考えたり、問いをもったりする活動の忌避傾向、②パワーポイントや動画など、直感的に示されたものから得る情報をそのまま結論であったり、正解としたりする傾向、③相対的に日本や世界的情勢についての関心の低さ、が挙げられる。

これら背景について、現代の子供たちの情報の取得から理解に至るプロセスも大切にしながらも、小学生が幅広い情報にふれ、より多面的に思考し、多様な考えや行動を生み出す原動力をつけることに NIE の取り組みは適していると考えます。また、中学校での実践に向けて連携の観点から素地を養うことは、本中学校区の取り組みとして意味のあるものである。

本校の児童の良さを、より多面的に価値づけ、児童の発達に沿った育ちを促したい。浜脇小学校での取り組みのスタートのねっここにある。

2 実践の概要、研究テーマ

(1) 2025 年度の実践の概要

- ① 1 から 6 年生まで、各社の NIE のサイトなどから、ワークシートを年 3 回~6 回程度取り組むこととした。
- ② 浜脇タイム (朝の帯タイム) の学習時間や教科の学習と関連付けられるものがあれば教科として取り組むことも可能とした。
- ③ 初年度で、児童も教師も初めて経験するケースが多いことが想定されたので、児童の実態や学習の目的に応じて、高学年であっても、低学年用の易しいワークシートの活用も可能とした。
- ④ 5・6 年生は、まとめ新聞や掲示物を学習成果として作成する機会もあるので、記者の派遣を通し、新聞の構成などを学び、学習に活かすこととした。

(2) 研究推進との連携

自ら学び続ける子の育成を目指して

～自己調整学習ができるようになる～

のテーマのもとに、様々な教科や領域で研究を推進していく。それらの研究活動の一環として、次の 2 点を NIE と関連する事項として取り上げた。

① 作文指導

本校の学力調査・児童アンケートの実態から、自分の考えを記述で表現することに苦手意識をもっている児童は多い。そこで、低学年から書くことの楽しさ・面白さ、相手に考えを伝える文章構成 (はじめ・なか・終わり) の良さに気づかせる機会として作文指導を実施する。具体的には、各学年でノートを準備し、主に毎週末テーマに沿った作文を書かせていく。意欲的に取り組ませる

ためにも、テーマ設定は大きなポイントになる。

② NIE (Newspaper in Education)

膨大な情報が行き交う情報化社会で、正しい情報を取捨選択し、読み解く情報活用能力が必要である。そこで、新聞を学校での学習に活用することで、社会への関心を高め、自分ごととして考えを深めることにつながることをねらいとする。また、語彙力を増やす機会とする。

(3) 研究テーマ

NIE で子供の学びの第一歩を支える

NIE を手段としてとらえ、浜脇小学校の児童がより学習への自主性や自発性、ひいては主体性につながるように、様々な教育活動の一つとして、取り組みをスタートすることとした。

また、浜脇中学校との連携の一環として、あいさつ運動などと併せ、児童や生徒にとってなじみのある活動となるように工夫することとした。

3 新聞の置き場と整理の方法

(1) 新聞の置き場

① 校長室前の保管場所



校長室前に掲示の終わった新聞の保管場所を設けた。ワークシートなども印刷して置き、興味のある記事の切り抜きをしたり、興味をもった記事を探しにきたり、子供新聞を読んだりすることも、自由にできるようにした。

② 5・6年生フロアー（4F）の掲示場所



当日の新聞を含め、数日分の各紙を新聞スタンドで掲示するようにし、置き場を設けた。

また、地域の医院や企業から提供を受けている写真ニュースも併せて掲示している。

新聞の交換は、2025年度は教師で行った。2026年度は、児童の委員会活動の常時活動にも取り入れる予定である。



③ 4Fの掲示場所の全体

本校は教室前の廊下が広く、学年集会などでも使用するスペースとして機能している。新聞は子供新聞中心に6年生が読んでいる姿が見られた。令和8年度にはこの周辺に読むための机などの配置を検討している。

4 実践の内容

(1) 朝の帯タイムにワークシートを活用

浜脇タイム（8：30～45）に、回数を決めてワークシートに取り組んだ。特に高学年の児童は時事問題を取り上げることによって、

世界情勢が、共通の話題になる場面があった。



【6年生での取り組みの様子】



【2年生での取り組みの様子】

（2）新聞スクラップの実践

3年生が国語と関連付け、新聞のスクラップを単元内に取入れた。個人やグループで紙面を俯瞰したり、記事を選んだりする場面が見られた。



【3年生の授業の様子】

記事の内容について、簡単にまとめる作業など、必要な言葉を選び出す作業を個人やグループで進めていた。

（3）各教科の発展的な内容としての掲示物



社会や外国語教室（浜脇小では外国語教室を設けている）に、発展的な内容に関する記事を掲示した。

（4）推進協議会からの派遣による授業



6年生を対象に新聞についての理解と正しい情報の発信と理解について、総合的な学習の時間として取り組んだ。児童からは、新聞にもっと触れてみたいとの感想やキャリアの視点から情報を取り扱う仕事についての感想などが寄せられた。

5 成果と今後の課題

【成果】

（1）環境としての新聞の価値

保管場所（校長室前）や4階フロアで、子供新聞を中心に紙面に親しむ児童が増えた。各教科の掲示物や児童玄関の写真ニュースに足を止める姿も見られるようになった。



【昼休みに校長室前で新聞を読む児童】

(2) 児童の学習成果を支える新聞の価値

① 6年生の平和学習の学習成果

広島への修学旅行や西宮市の空襲被害や当時の本校での様子などが平和学習の核である。児童が平和についての考えをポスターとして掲示物を作る中で、いくつかの事実を関連させた(例: 広島と西宮の比較、西宮空襲の時の子供の様子と6年児童の曾祖母の出身地での様子を比較する自由研究等)ポスターが見られた。児童の思考の深まりや自身のルーツを探ろうとする主体性が発揮された成果物であった。資料を読み解く力に注目した学習構成に工夫があったことが、児童の豊かな表現につながった。

同様の掲示物の例

- ・3年生の郷土学習の模造紙の資料
- ・5年生の自然学校の魅力を伝える資料
- ・6年生の「12歳の主張」のプレゼン資料

② 低学年での生活科学学習での説明書



2年生が1年生をおもちゃランドに招待した時の説明書では、例年以上にレイアウトが整い、わかりやすい説明書が増えていた。前述の環境としての新聞を目にすることやワークシートなどの取り組みが児童にトピックを表現する場合のイメージや相手意識を少しずつではあるが、滋養していると感じられる。

③ 中学校との連携の深化

あいさつ運動などの連携も含め、地域(社会)に向けて表現する機運が小学校で高まった。学習成果と併せ、義務教育9年間を通した、こ

の地域に根差した社会性の伸長について今後も追究することは、児童の人格形成によい影響をもたらすと考えられる。

【課題】

(1) 取り組みの構造を明確にすること

新聞を置いてみる、環境として捉える(朝学習でのワークシートの取り組み)ことから、具体的な児童の姿や記述などに成果を求める帰納的な展開の取り組み、一方で研究推進での、児童の実態に基づく課題を前提とした演繹的な展開の取り組み。2面からの取り組みを2025年度は展開したが、実践者が構造を十分に理解できていないことで、「新聞を学ぶ」という認識での取り組みになっている部分があった。これは年度当初の共通理解が重要であることを示している。

(2) (1)に基づく取り組みの停滞

1年を振り返ってみれば、児童が新聞やトピックを通して多くの情報を得ることができ、児童の学習成果物にも進歩が見られたと考えられる。本校の児童の学習課題の改善に向けた時に、継続性が重要であると見られる。その点で2025年度の取り組みが継続的なものとして、指導者に理解されたとは言い難い。取り組みが停滞する時期を生み出したと理由と考えられる。これは、帰納的な展開の取り組みが継続して行われることの重要性を示している。

(3) 取り組みの価値を学校文化とすること

帰納的な展開の取り組みを日常化し、演繹的な展開の取り組みを教科や領域教育で、指導者が工夫を凝らすこと。この2点が充実すれば、本校の児童の学習課題の改善につながるとともに、浜脇小の取り組みの大きな柱として据えることができると考えられる。また、成果でも述べた義務教育の9年間での児童生徒の人格形成が促される。2026年度の研究推進の取り組みでも、①作文指導と②NIEを位置づけて、取り組みの価値を指導者が実感していくことが大きな進歩につながるだろう。今後も真摯に取り組みを続けたい。

新聞に親しみ、読み、発見する活動の実践 ～自己の考えを深め、発信する力の育成～

猪名川町立楊津小学校 校長 潮田 真知子
主幹教諭 義積 美穂

1 はじめに

本校は、猪名川町中部の山間地域に位置し、自然豊かな環境に恵まれている。2024年6月1日に140周年を迎えた歴史ある学校である。全校児童46名の小規模校であるが、地域資源を活用した体験的な学習や、地域住民との交流を取り入れた教育活動を推進している。

本校の教育目標は、「学び、つながり、互いに高め合う 子どもの育成」である。その実現に向け、「意欲をもって自己の考えや思いを表現する児童の育成～書く・話す（演じる）活動を通して～」を研究主題として校内研究に取り組んでいる。2025年度は、NIE実践校として、これらの取り組みをさらに深める機会を得ることができた。

本校児童には、話し言葉から書き言葉へと表現を転換することや、適切な言葉を選択することに難しさが見られる。こうした実態から、NIEにおける教育の効果は大きいと考えた。児童の多くは、素直で活動的であり、他者と会話を楽しむ姿もよく見られ読書に親しんでいる。2025年度は、新聞に①親しむ②読む・発見する③考える・深める④発信する、という4つの段階を意識した活動を展開し、児童の表現力の育成を図ることとした。

2 実践の概要

(1) 環境整備

○新聞コーナーの設置

児童が日常的に新聞に各々触れることができるよう、校内に「新聞コーナー」を設置した。1階と2階の2か所に配置し、特に2階には高学年向けとして一般紙を中心に配置した。児童が登校後や休み時間などに自由に新聞に

触れることができる環境を整備した。



○作品掲示

新聞を活用して作成した作品や、児童が作成した新聞などを掲示するコーナーを設けた。作品を掲示し、新聞への関心を集める場づくりをした。また、児童が互いの活動を見合い、高めることにもつながった。



(2) 1・2・3年生の取り組み

○1年生

新聞に親しむ活動として、学校行事「お店めぐり」の準備に取り組んだ。新聞紙を使い、「魚釣り」の店で釣った魚を入れる籠づくりを楽しんだ。

また、学級活動「みんなでたのしもう」の時間には、新聞を使った2種類のじゃんけんゲームを行った。図工「いっしょにあそぼう」の学習では、新聞を丸めたり形を作ったりして、作品づくりに意欲的に取り組んだ。



○2・3年生

「お店めぐり」で使う輪投げの輪を新聞紙で作り、新聞に親しむことを目的とした活動を行った。



また、「1.17集会」の事後学習では、新聞紙

を使った防災スリッパづくりに取り組んだ。実際に防災スリッパを履いた児童の中には、「これを家のスリッパにしようかな」と話す児童の姿も見られた。新聞紙を折ることで温かく丈夫になり、防災用品として役立つことを体験的に理解することができた。

○3年生

新聞を読み、気になる記事を切り抜き、それらを貼り合わせて作品づくりを行った。また、各教科で学んだ内容を新聞形式にまとめる活動にも取り組み、学びの整理を行った。



夏休みの思い出や環境体験学習での学びや発見を、写真や絵をレイアウトしながらまとめ、完成した新聞を掲示し互いに読み合った。友だちの新聞を読み合うことで、新たな気づきを得る姿が見られ、次時への意欲につながることができた。

○記者派遣事業

2025年10月27日(月)、NIE記者派遣事業を3学年合同で実施した。「新聞をつくろう」をテーマに、効果的な写真の活用方法を学んだ。また、見出しの効果についても低学年にも分かりやすく伝えていただいた。

(3) 4・5・6年生の取り組み

○4年生

国語「新聞をつくろう」の単元学習では、新聞の特徴や工夫について、教科書をもとに学習した。その後、実際に新聞を手取る時間を十分に確保し、写真や図、リード文、見出しなどを紙面で確認する活動を行った。この活動を通して、児童は新聞にはどのような情報が、

どのような形で構成されているかを理解することができた。



学習のまとめとして、クラスで1枚の新聞を作成した。児童は、相談しながら記事の割り付けを行い、それぞれが興味を持った内容について記事を作成した。給食に興味を持った児童は、実際に給食センターに問い合わせを行い、取材した内容を記事にまとめるなど、主体的な学びにつながった。新聞づくりを通して、相手や目的を意識した文章になっているかを確認、文章の構成を意識して表現する力が高まった。



4年生も、2025年10月27日（月）、記者派遣事業を実施した。見出しや割り付けといった新聞の特徴をつかみ、校外学習についての新聞づくりを進めることができるように話をいただいた。神戸新聞ができるまでの流

れについても学ぶことができた。

○5年生

2026年1月30日（金）、記者派遣事業を実施した。神戸新聞元記者の網麻子・兵庫県NIE推進協議会事務局長から「阪神・淡路大震災当



時の神戸新聞社の働きを知る」をテーマに、新聞の書面構成や記事作成の工夫を学んだ。新聞発行に必要な手順や新聞社の仕事についても話を聞いた。震災発生時、地元の新聞記者として誇りをもって取材を続けたことなどを知り、児童にとって貴重な学びの機会となった。

○6年生

2025年11月20日（木）、記者派遣事業を実施した。新聞記者として心がけていること、取材や記事の編集時に気をつけている点について学んだ。この学習を経て、「興味を持った記事を要約し、自分の考えを伝えよう」をめあてに学習に取り組んだ。



児童は、新聞記事の中から、自分が関心をもった記事の一つを選び、ワークシートにその記事の要約を書いた。さらに、その記事を読んで

考えたことや感じたことを書き、それらを発表する時間を設けた。発表を通して、自分の考えを他者に伝える経験を積むことができた。

また、卒業を控え、在校生に向けたメッセージづくりにも取り組んだ。子ども新聞の記事



の中から関心をもった記事やメッセージ性のある記事を選び、その記事に在校生への「ひと言メッセージ」を添えて掲示をした。

(4) 常時活動

朝学習の時間を活用し、2学期から毎月第3火曜日「書く書くタイム」を、全校で「クロヌリハイク」に取り組む日と位置づけた。この活動は、NIE 全国大会で紹介されていた「クロヌリハイク コンテスト」の実践を参考に始めたものである。

★『かくかくタイム』でのチャレンジしよう!!★

クロヌリハイクを たのしもう!

- ①記事から季語をさがす。
- ②季語をもとに俳句になりそうなフレーズをさがす。
- ③俳句になる文字を選ぶ。
- ④俳句以外の文字をぬりつぶす。

まずは『季語』をみつけただけでO.K!!
1回であげようと思わず、ゆったり取り組んでみましょう。

くろぬりわーどを たのしもう!

- ①テーマをさめる。
(ひらがな・スポーツ・くだものなど)
- ②新聞記事からテーマの文字をさがす。
- ③さがした文字以外をぬりつぶす。

『くろぬりわーど』から始めてもO.K!!

製作とちゅうのものは、ファイルに入れます。できあがったものは、NIEコーナーに掲示します!

低学年は、新聞記事の中から「あいうえお」や自分の名前などの文字を探す活動から始めた。中学年以上は、記事の中から気になる言葉を見つけ、ことわざ作りなどを行ったが、俳句づくりにはまだ至ってはいない。しかし、児童

が、新聞をじっくり読む時間を確保することにつながった。



3 成果と課題

本校では、NIE の推進にあたり校内研修会において推進案やカリキュラムの検討を行い、新聞に親しむ活動を教育活動全体に位置づけて実践を進めてきた。児童にとって新聞を手に取りやすい環境を整えたことで、新聞に触れる機会が増えた。低学年においては見出しや写真を手がかりに記事に関心をもつ様子が見られ、中・高学年においては記事を読み取り、自分の考えをもつ姿へとつながってきている。一方で、記事の内容を読み取り、自分の考えを深めて発信する力には個人差が見られた。特に目的に応じて記事を選択する力や、根拠をもとに自分の考えを書く力の育成に課題がある。また、発達段階に応じた指導の系統性についても、さらなる整理が必要である。2026 年度もこれまでの実践を基盤としながら NIE 指定校として取り組みを進めていきたい。「新聞コーナー」の活用を工夫し、「新聞を読む日」の設定や教科横断的な活用を推進する。さらに、新聞づくりや発表活動を充実させることで、児童が主体的に考え、根拠をもって表現する力の育成をめざしていく。今後も NIE の取り組みを通して、主体的に学び、考えを発信できる児童の育成を推進していく。

【 小・中 学 校 等 】

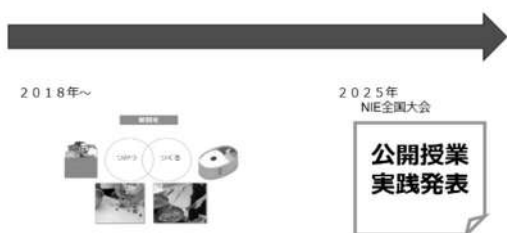
「新聞が当たり前にある風景」のその先へ ～主体的な学びへと進化した NIE の集大成～



姫路市立豊富小中学校 校長 畑本 秀樹
教諭 川村 かおり
教諭 古寺 和子

1 はじめに（本校の NIE の歩み）

豊富小中学校における NIE 推進の歩み



本校では、義務教育学校としての開校以前の 2018 年より NIE の取り組みを継続して行ってきた。その基本方針は、新聞を「つかう」活動と「つくる」活動の両輪を回すことである。これまでの地道な実践の積み重ねにより、各学年での新聞や、委員会による啓発新聞の作成などがすっかり日常の光景となった。作成にあたっては、新聞作成アプリを使ったデジタル新聞と、模造紙や画用紙で作る温かみのあるアナログ新聞とを活動目的に応じて使い分けており、校内の至る所に多様な表現の新聞が掲示されている。現在では、児童生徒にとって「新聞が当たり前にある風景」がしっかりと定着している。



2 NIE 全国大会神戸大会での公開授業および実践発表

2025 年度の大きな成果の一つとして、8 月 1 日に開催された「NIE 全国大会神戸大会」での公開授業および実践発表が挙げられる。本校の長年の取り組みの集大成として、全国の教育関係者に向けて発信を行った。

（1）メディアリテラシーを育む公開授業

公開授業では、「新聞で開くメディアリテラシー～全国の子ども新聞から迫る、情報の向こう側～」をテーマとした授業を 6 年生で展開した。

本授業では、東日本大震災を取り上げた異なる新聞記事を比較・吟味する活動を行った。同一の震災を扱っていても、地域や発行時期によって焦点が異なることに着目し、記事を読み比べることで、情報の背景にある発信者の意図や思いを推し量るプロセスを大切にしました。

さらに、実際に記事を執筆した神戸新聞の記者から、作成の経緯や取材時のリアルな思いを直接聞く場を設けた。この活動を通して、児童は「新聞記事は決して無機的なものではなく、情報の向こう側には人がいる」ということを深く実感することができた。

情報は点と点をつなぎ新しい現実を創り出すものであり、その現実には発信者と受信者の相互作用によって形作られる。本授業は、新聞を「単なる情報媒体」ではなく「人と人をつなぐコミュニケーションの場」として捉え直し、児童が情報から豊かに意味を紡ぐ、知性と責任を持った「主体的な受信者」へと成長するための確かな一歩となった。



(2) 「総合的な学習の時間」における実践発表

実践発表では、「『?』を『!』に 新聞から始まる継続型探究学習～姫路の魅力発見! 未来への夢プラン～」をテーマに報告を行った。

これは、本校（義務教育学校）の特徴を最大限に生かし、前期課程（6年生）から後期課程（7年生）へとまたがる長期的な探究活動である。

① 6年生3学期（記事の収集と課題設定）

過去2年分の新聞3紙やデジタル新聞から「姫路」に関する記事を集め、12のテーマに分類。グループごとに「6色ハット思考法」を用いて記事を多角的に読み解き、話し合った。クラウドでの共同編集を活用しながら、姫路の現状に対する課題を抽出し、次年度に調べていきたいことをGoogleスライドにまとめた。



② 7年生1学期 1サイクル目（情報収集と中間発表）

6年時に設定した課題をもとに、新聞やインターネット、図書資料を用いてさらに深い調べ学習を行った。集めた情報を整理・分析し、グループごとに中間発表を行

うことで、探究の方向性を確かなものにした。



③ 7年生1学期 2サイクル目（現地調査と新聞作成）

事前の情報収集をもとに、実際に姫路城や姫路駅周辺での校外学習（現地調査）を実施した。自らの足と目で確かめた情報や気づきを「ことまど新聞」としてまとめ上げ、班や全体での発表会を行った。友だちの発表や実体験を通して、姫路の魅力や改善点、自分たちにできることについて考えを深め、振り返りを行った。



このように、「記事から地域を見つめる（6年生）」「調べて現地で確かめる（7年生）」「新聞にまとめて発信する（7年生）」という探究のサイクルを回す実践は、児童生徒の課題解決能力と主体性を大きく育むものである。全国大会（神戸大会）では、この探究の集大成として生徒たち自身が登壇し、実際の学習活動の様子や姫路の魅力を全国に向けて力強く発信した。参加した生徒の一人は、「当たり前ではない貴重な経験ができた。6年生の時から仲間と一生懸命に調べ、工夫して発表した。」「発表後には多くの方から『よかったよ!』と声をかけてもらい、とてもうれしかった。」と振り返り、大きな達成感を味わっていた。新聞記事を起点に地域を見つめ、自ら課題を見つけて解決する力を育んだこの経験は、子どもたちにとって大きな一歩となった。今後も、地域に根差した探究活動を継続していきたい。

(3) 全国への波及とメディア掲載

本校の全国大会での取り組みは反響を呼び、マスコミ等を中心とするネットニュースや、全国各地の新聞紙面で高く評価された。

これらの記事は校長が自ら模造紙にまとめて職員室前に掲示し、本校の取り組みの意義を改めて価値づけてくれた。掲示を見た児童生徒からは「自分たちはすごいことをしていたんだ。」「当たり前だと思っていた。」と驚きや喜びの声が上がり、教職員・児童生徒の双方にとって大きな自信と次への意欲につながっている。



3 「新聞が当たり前にある風景」から生まれる主体的な活動

新聞が身近な存在として定着した土壌を活かし、2025年度は児童生徒が主体となって言葉や情報と向き合う、新たな活動へと広がりを見せた。

(1) 言葉の面白さに触れる「コラージュ川柳」

5～8年生の児童生徒が、新聞記事の見出しや本文の言葉を切り貼りして5・7・5の句を作る「コラージュ川柳」に取り組んだ。「ブラジルに 勇気を出して こんにちは」「最速で 運命狂う リサイクル」など、児童生徒の自由で柔軟な発想から数々のユニークな作品が誕生した。この活動は、使いたい言葉（文字）を探すために自然と多様な記事に目を向けるきっかけとなり、楽しみながら活字に親しみ、語彙力や想像力を育む有効な手段となった。

(2) 新聞委員会（5・6年生）とICTの活用

前期課程高学年で構成される「新聞委員会」では、自ら全校生に向けて新聞の魅力を発信する活動が行われている。児童たちはICT端末を駆使し、新聞の構成要素（主見

し、写真、本文など）の役割を問うクイズ形式のスライドを自作した。「伝えたいことを短く伝えるのが見出し」といった新聞の基本を、クイズを通して全校生に分かりやすく伝えており、単なる情報の受け手から、情報を整理し発信するクリエイターへと確かな成長を見せている。



見出し（みだし）
⇒つたえたいことをかんたんにみじかくつたえる
写真（しゃしん）
⇒つたえたいこととおなじようなしゃしん
本文（ほんぶん）
⇒つたえたいことをくわしくつたえる



この中で主見出しはどれ？

✨…東京で楽器博

♥…演奏を気軽に楽しもう♪

👍…70社以上が
出展

4 NIE 学習効果調査から見えたこと

本校における今年度のNIE実践の成果と課題を把握するため、教員対象のアンケート調査を実施した。すべての項目において肯定的な回答が得られ、教員・児童生徒の双方に確かな変容が見られた。

(1) 教員の指導力の変化

多くの教員が「タイムリーな事象を扱い、学ぶ意欲を育むことができた。」「社会情勢と教科の学習を結びつけた指導を意識するようになった。」と回答し、自身の指導力向上を実感している。日頃からアンテナを張り、深い教材研究や創意工夫につなげる姿勢が定着したことがうかがえる。

- ・「教材の選択肢の重要な1つに新聞が加わったことは個人的にはとても大きなことだった。」

- ・「共通の目標に向かってチーム学校が一つになり、会話が増えた。」

(2) 児童生徒の「資質・能力」の変容

NIE を通じた学習活動により、児童生徒の言語能力や主体性に大きな伸びが見られた。

① 話す力・聞く力

他者の発表を踏まえて自分の考えを持ったり、主体的に相手の意見を聞こうとしたりする態度が育っている。

- ・「問題意識を持って聞く力がついた。」
- ・「人前で発表することに抵抗がなくなったように思う。」

② 書く力

書くスピードが上がり、限られた字数や時間で要約する力、情報を取捨選択する力が身についた。

- ・「良い文章を真似する力がついた。」
- ・「何かをまとめる際、レイアウトにこだわりを持つ生徒が多くいた。見やすく内容の整った成果物になっていた。」

③ 読む力

必要な情報を取り出し、要点を押さえる力が向上した。また、文字の多い長い文章への抵抗感が薄れ、粘り強く読む力が育っている。

- ・「楽しんで読んでいた。」
- ・「新聞コラージュ川柳など、文字を探すために記事を読む活動を通して、文章に慣れ親しむことに非常に有効だった。」

④ 主体的な学びへ向かう力

特筆すべき点として、知的好奇心の高まりや、自ら学ぶ意欲の向上が複数の教員から報告された。

- ・「人に聞くことを優先するのではなく、まずは自ら調べようとする意欲を高めることができた。」
- ・「学校での調べ学習の延長を各自、休日に集まって行う様子が見られた。」

(3) 保護者の反応

家庭からの否定的な意見はなく、学校の取り組みに対して好意的な受け止めが多数を占めた。教員のアンケート記述からも、家庭学

習への波及や、親子の会話のきっかけとして NIE が機能していることがわかる。

＜教員から報告されたエピソード＞

- ・「子ども自身が『新聞は大人のもの』と思っていたのが、身近なものになったと言われた。」
- ・「普段ならニュースに関心がなかったにもかかわらず、興味のある分野の新聞に手を伸ばすようになった（という声をいただいた）。」
- ・「ことまどを活用した掲示物は保護者の方もよく見られていて、懇談時に話題になった。」
- ・「学校と社会が結びついていると感じていただけている（と実感した）。」

5 おわりに

2018 年から地道に積み重ねてきた「新聞が当たり前にある風景」は、2025 年度、NIE 全国大会という大きな舞台を経て、確かな結実を迎えた。そして今、本校の NIE は、教員が主導して「新聞に触れさせる」段階から、児童生徒が自ら新聞を活用し、情報を発信する「主体的な活動」へと明確なシフトを遂げている。

今後は、この「当たり前にある風景」のさらなるその先を目指し、以下の 3 つの視点を大切にしていきたい。

・自治

児童生徒が自ら問いを見つけ、新聞を活用して最適解に向かう力を育むこと。

・融合

I C T 端末や他教科、委員会活動など多様な学習ツール・領域と NIE を柔軟に掛け合わせる。

・価値づけ

児童生徒自身が日々の活動の意義を振り返り、自らの成長や社会とのつながりを実感できる場を創出すること。

変化の激しい現代社会において、新聞を通して世の中を広く深く見つめ、自分の頭で考え、他者と協働する経験は、児童生徒の生涯にわたる力となる。これからも全校体制で歩みを止めず、児童生徒が主役となる NIE の実践と研究を深めていきたい。

小中一貫として取り組む NIE 教育～ふるさと沼島を発信～

南あわじ市立沼島小学校	校 長	近藤 友二
	主幹教諭	木田 秀子
南あわじ市立沼島中学校	校 長	佐野 美穂
	教 諭	森 彩夏

1 はじめに

本校は淡路島から海上約 4 k m 離れた離島「沼島」に位置し、県下最南端にある小中一貫教育校である。沼島は『古事記』『日本書紀』に登場する「おのころ島」の最有力候補地とされ、1 億年前の地殻変動によって形成された地球のしわ「鞘状褶曲（さやじょうしゅうきょく）」を有している。古くから伝わる文化や祭りは今なお息づき、多くの伝説とともに受け継がれている。また、鰻・鰯・鯛など、豊かな海の恵みでも広く知られている。

小学校と中学校は併設されており、小中一貫教育校となって 6 年目である。全校児童生徒は小学校 19 名、中学校 20 名である。離島留学や小規模特認制度で通学している児童生徒も多く、島外から転入学してくる児童生徒は全体の約半数である。

本校では、2024 年度に続き 2 年間にわたり、ふるさと教育の発信を軸とした NIE 教育実践を進めてきた。2025 年度はその 2 年目にあたり、NIE 全国大会神戸大会ではふるさと教育を軸とした小中一貫校としての成果を発表した。小中一貫校としての特色を生かし、新聞を活用して読解力・表現力を高めることを小中共通の目標として組織的に研究を推進している。新聞記事を使った学習やスピーチ活動の充実、新聞を手に取りやすい環境づくりに取り組むとともに、総合的な学習の時間では沼島を知る活動や沼島子ども太鼓、魚釣り・魚料理体験などを行い、沼島の自然や文化への理解を深め、ふるさとを大切に思う心の醸成を図った。

また、沼島についての学びをより広く伝えるため、生徒が自ら学びの成果を新聞にまと

め、地域社会に直接届ける活動にも取り組んだ。制作した新聞を瓦版として印刷し、沼島総合センター・郵便局・汽船場などの公共施設に設置したほか、中学生はアポイントメントを取り、地域の方々に説明しながら発信する活動も行った。これらの実践を通して、主体的な情報発信力と地域とのつながりを一層深めることができた。

2 組織づくり

小・中学校が連携し、合同組織を継続して研究を推進した。

（1）研究推進・資料作成部

〈NIE 担当、研修担当〉

- ・研究概要の作成と推進
- ・発表資料の作成

（2）授業実践部

〈特活、担任、社会・国語・理科・総合担当等〉

- ・教科学習での新聞を取り入れた授業の研究
- ・総合的な学習での取り組み（地域学習・沼島を知る活動など）
- ・新聞を活用したスピーチの継続実施
- ・I C T を活用した「ふるさと沼島」を発信する授業づくり

（3）環境整備部

〈学校図書館司書、図書担当、養護教諭、栄養教諭、事務担当等〉

- ・小中合同図書室の整備
- ・新聞を手に取りやすく、調べ学習しやすい環境づくり

3 取り組み実践

(1) 新聞記事を使ったスピーチ実践

2024 年度に引き続き、中学生はこども新聞または一般紙から記事を選び、朝の会や終学活で発表した。興味のある記事を選び、5W1Hを明確にするなど、NIE の視点を取り入れたスピーチを継続的に行った。

【取り組み例】

- ① 国語授業時に新聞の読み方とスピーチの仕方を指導する
- ② 記事を探して写真を撮り、指定の用紙に貼る（NIE ワークシートを活用）
- ③ 5W1Hを抜き出す
- ④ この記事を選んだ理由や意見をメモ程度にまとめる
- ⑤ モニターやホワイトボードに映し出す
- ⑥ スピーチする



(2) 授業実践

【小学校】 国語や社会等の教科での学習のまとめを新聞形式でまとめ、伝える実践に取り組んだ。読み手によく伝わるように意識してまとめることができた。



また、2024 年は神戸新聞社経営企画局 兵庫県 NIE 推進協議会事務局長 三好正文氏に出前授業をしていただいたが、2025 年度も 5・6 年生社会科『情報を作り、伝える』の単元の学習で、兵庫県 NIE 推進協議会事務局長 網麻子氏に出前授業をしていただいた。新聞はどのように作られているのか、新聞はどのように構成されているのかなど、教科書だけでは伝わらないプロからの話をしていただいた。子どもたちからは、活発に質問が出て、新聞について興味を持って学ぶことができた。

◎児童の感想

「今回の授業を受けて、今まで新聞は一から機械などで作成していると思っていました。しかし、実際にお話を聞いてみると、取材や記事の作成は手作業で行われていて、何重にも点検を重ねていることを知り、一枚の新聞を作るのにもたくさんの人の努力があるのだと理解できました。今までは新聞に興味がありませんでしたが、今日少し読んでみただけで自分が好きな記事（政治など）がたくさん見つかって興味が湧いてきたので、今回の授業のおかげで新しい世界を知ることができました。」

(3) 総合的な学習の時間での取り組み

【小学校】 生活科の町たんけんや、総合での地域学習「沼島を知る活動」などで、地域のことを調べ、発表する活動に取り組んでいる。沼島が国生みの島であることを中心に据え、国生み神話、漁業、祭りなどの伝統、小中遠足等を題材に、調べたことをぬしま小新聞、沼島発見！新聞、150 年記念新聞にまとめ、掲示している。





【中学校】 2025年度は、沼島の魅力を地域に発信する活動をさらに強化した。生徒は学年ごとにテーマを設定し、調査・取材・まとめを行ったうえで、新聞を制作した。三好氏の出前授業により、地域の魅力を発信するための新聞記事の書き方について専門的な指導を受けることができた。生徒は、構成や表現を工夫する視点を学び、その後の瓦版づくりにおいて、読み手を意識した発信に生かしていた。

また、それぞれの役割分担を明確にし、瓦版を作る係はデザインや印刷を担当、アポイントメント係は地域施設や関係者に連絡を取り、持参係は実際に訪問して説明するという流れで活動を進めた。完成した瓦版は、沼島総合セ



ンター、郵便局、汽船場などの公共施設に設置し、地域住民や観光客に読んでもらえるようにした。

中学生は自ら作成した瓦版を持参し、地域の方々に直接届けるためにアポイントメントを取り、対面で説明する活動を実施した。この過程で、情報発信の重要性やコミュニケーション力を学ぶ機会となった。

特に、役割分担を通じて責任を果たした経験や、地域の方に直接説明した体験談は、地域と学校のつながりを実感させる内容であった。



◎生徒の感想

「アポイントメントを取るのは緊張したけれど、地域の方が笑顔で迎えてくれてうれしかった。」
「瓦版を作るとき、どうすれば見やすくなるか考えるのが楽しかった。」

4 成果のまとめ

本実践の大きな成果の一つは、新聞の書き方の質的な変化である。中学1年生の時に作成した新聞と、NIE教育を導入してから作成した新聞を比較すると、次のような違いが見られた。

(1) 1年生時の新聞 (NIE教育前)

- ・記事の構成が単純で、事実の羅列が中心
- ・見出しや写真の配置に工夫が少なく、読み手への配慮が不足

(2) 3年生時の新聞 (NIE教育後)

- ・ 5W1Hを意識した記事構成で、情報が整理されている
- ・ 写真や図表の配置に目的意識があり、視覚的にわかりやすい紙面になった
- ・ 記事に自分の意見が加わり、主体性が表れている



▶生徒Aが1年生時の新聞（NIE 教育前）



▶生徒Aが3年生時の新聞（NIE 教育後）

この変化は、生徒が新聞を「情報を伝えるだけのもの」から「読者に伝わるように構成するメディア」へと認識を深めたことを示している。

また、日々のスピーチ活動を継続したことにより、生徒の書く力が着実に向上した。スピーチでは、新聞記事を選び、5W1Hを整理し、意見を簡潔にまとめる過程を繰り返す。この積み重ねが、文章構成力や要約力を育てる基盤となった。実際、スピーチ原稿を書く際に「相手に伝わる言葉を選ぶ」「論理的に順序立

てる」ことを意識するようになり、新聞記事の作成においても、見出しの工夫や情報の整理が格段に向上した。つまり、話すために書くという経験が、書く力を鍛える実践となったのである。

NIE 教育を通じて、書く力・構成力・表現力が向上したことが明確な成果である。

5 2025 年度のまとめと今後

本校が NIE 実践校となったことにより、生徒に継続的な情報提供の場を確保することができ、新聞を生徒の身近な学習資源として位置付けることが可能となった。本取り組みに関わる中で、新聞が「特別な教材」から「日常の入口」へと変化していく過程を間近で見てきたことは、教育観を大きくアップデートする経験であった。新聞をあまり手に取ったことがなかった児童・生徒が、新聞に興味をもち、読むだけでなく、自ら発信したいという思いにまでつなげることができた。

一方で、学年や個人差に応じた読みの支援、記事と教科学習をより体系的に接続する工夫など、今後に向けた課題も明らかになった。誰もが「読めた」「わかった」「伝えられた」を実感できるよう、指導の引き出しを増やし、足場作りをさらに強化していきたい。

また、作成した新聞を瓦版として沼島内の主要な施設に置き、地元の方々や観光客に読んでいただいたり、こどもあんしんネットで配信したりするなど、地域発信の活動を広く展開した。こうした実践を通して、生徒の表現力・発信力の向上や地域理解の深化が図られたと考えている。記者派遣による出前授業の効果も重なり、読み手を意識した構成や見出しづくりに挑戦する生徒が増え、発信者としての自覚が芽生えたことは大きな成果である。今後は、この実践で培われた力や視点を次の学習活動や学校生活へと生かし、新聞を活用した学びや地域と関わる学習を継続・発展させていきたい。

【 小・中・高 等 学 校 】

新聞を通して伝え合う平和

愛徳学園中・高等学校

校長

松浦 直樹

教諭

米田 俊彦

廣畑 彰久

愛徳学園小学校

校長

眞浦 由美子

教諭

彦野 周子

柳生 里子

1 はじめに

本学園の設立母体は、スペインのビックという都市にある「愛徳カルメル修道会」である。

同会は1826年に聖ホアキナ・デ・ベドウルナによって創立された。2026年には創立200年を迎えた。

愛徳学園は愛徳カルメル修道会より6人の修道女が来日して、若い人々のキリスト教教育のために1954年に設立した。以降、神戸市垂水区でカトリック女子教育を行い、2024年には創立70周年を迎えた。

「愛徳坂」と呼ばれる坂の上に校舎が建っている。小・中・高は同じ敷地内にあり、各教室からは瀬戸内海と明石海峡大橋が見渡せ、自然の雄大さを感じることが出来る。



ホアキナが残した、「To do por amor nada por fuerza」（力ではなくすべてを愛によって）という言葉にならって教育活動を行ってきた。

毎日のように大規模な武力行使がニュースで取り上げられる今日、この言葉の重みを子どもたちが受け取り、未来における民主的な社会の担い手としてその資質をのばしていったほしい。

2 NIE 全国大会神戸大会

(1) 全国大会にむけて

夏のNIE 全国大会神戸大会では、ポスターセッションへのポスターの掲示と2つの実践発表をする機会をいただいた。ポスターセッションでは4年生が年間を通して取り組んだはがき新聞についてまとめたものを掲示した。

実践発表では2024年度に取り組んだ「小・中連携の平和学習」と「ICTで拓くNIEの新たな地平」の報告をした。

○ポスターセッション

7 はがき新聞で「1分間スピーチの原稿を書こう」

愛徳学園小学校：柳生里子、5年生

1.実践の目的

朝礼時に児童が順番に1分間スピーチを発表する時間を設けている。発表の内容は宿題で書いてきた日記を発表することが多かったが、身の回りの出来事だけでなく、気になるニュースについても興味を持ち、自分の感想や考えをもとに、自分の意見を明確に伝えられるスピーチ原稿を書く力を育みたいと考えた。そこで、短く要点をまとめつつ、文字とイラストを組み合わせることで伝えることができる「はがき新聞」に取り組んだ。

2.方法

ニュースに興味を持たせるため、子ども新聞の内容を要約し、1分間スピーチの原稿をまとめることにした。

3.実践① 初めて書いた「1分間スピーチのはがき新聞」

実際に書いてみると、自分が書きやすい記事を選択しているが、見出しを書くことや少ない文字数でまとめることが難しく、何度も書き直していた。

4.実践②（学年文集の活用）

1年間の思い出ベスト3を各自がランキングにしてまとめた。また、私の好きな百人一首の句を紹介。

5.実践③（国語の学習で活用）

5年生の国語で学習した、「銀の裏地」の感想をはがき新聞にまとめた。見出しや用紙の使い方に工夫がみられ、わかりやすく書くだけでなく、それぞれが感じたことを文章と絵を用いて表現している。

6.まとめ

4年生から始まった「はがき新聞1分間スピーチ」の取り組みは、5年生でも継続している。児童たちは新聞記事を読み、要点をまとめて発表する経験を積み重ねる中で、時事問題への関心や調べ力、表現する力が伸びてきた。個人差はあるものの、自ら考えて伝える力が育っている。今後は地方紙や全国紙も活用し、より深く幅広い視点から情報をとらえられるよう支援していきたい。

(上 写真)「はがき新聞で『1分間スピーチの原稿を書こう』」のポスター)

○小・中連携平和授業

夏の発表に向けて、以下のポイントについて見つめなおしながら2024年度の実践をまとめていった。

【子どもたちを取り巻く情報環境】

現代に生きる児童・生徒の多くがスマートフォンなどデジタル端末を持っており、フィルターバブルやエコーチェンバーなどのネット上の事象により、自分にとって心地よい情報が次々に流れてくる環境に慣れている。子どもたちは無意識のうちに短時間で手軽に消費できるコンテンツに多くの時間を使っている現状がある。

そのような環境にいる現代の子どもたちが貧困や戦争など解決の答えが簡単には得られないニュースについて、立ち止まって考えるということは難しいと考える。



(上 子どもたちを取り巻く情報環境のイメージ)

【新聞を学習の中で使う意義】

上記のような情報環境にある子どもたちが様々な情報に触れることのできる新聞を学習の中で使う重要性は今までより大きくなっていると考える。情報の多様性と同時に色々な立場の人の考えを知ることができるのも新聞の良さの一つである。2024年度の実践で当時の6年生が8月6日・7日の中国新聞朝刊を授業の中で各自読んだ時に、社説・式典の様子・日本の作家や海外の映画監督へのインタビューなど広島や平和を扱った記事の種類の多さに気付き、興味をもって読み進めていた。

【小・中連携で平和学習を行った意義】

平和学習で太平洋戦争やヒロシマ・ナガサキを学ぶ際、その時代を知らない子どもたちはどうしても単なる受け手になってしまいがちである。このテーマに主体的に向き合うためには、自分の感じたこと、意見を発信することが必要だと考えた。それを新聞で行うことにより、新聞の書き手である中学生は、読み手を意識しながら限られた紙面の中で伝えるべきこと、表現を精査した。

一方で読み手である小学生は、身近な存在である先輩たちが感じたことをもとに、記事の内容を自分たちにも関係の深いこととして受け止めたようである。

このように、戦争を直接経験していない世代が、自分の言葉を通して次の世代に戦争について語るという取り組みは、今後の平和学習のあり方を考えていく上で、重要な視点になってくるのではないだろうか。

(2) 全国大会を通しての深まり

○小・中連携平和授業

実践発表後に広島県呉市立荘山田小学校教諭でNIEアドバイザーの高下千晴先生から「子どもから子どもへの戦争の記憶の継承の在り方」と題してご助言をいただいた。まず、戦争の記憶の継承における現在の課題として戦争を体験した世代の方々が少なくなる中、戦争の記憶は今後、非体験者どうしでつないでいくことになり、非体験者が他者の体験を伝える難しさをあげられた。そこで、戦争の記憶を繋いでいく際、記憶を「伝える場」と「継承する場」の非体験者の受け止め方の違いを整理することが必要だと語られた。

高下先生の助言を聞き、戦争の非体験者である中学3年生と小学6年生が、戦争の記憶を介して対話することで、過去におこった出来事としてだけではなく今を生きる自分たちにもつながる課題であることに気付いていくのだと感じた。

○ICT で拓く NIE の新たな地平

SNS が日常的に使用される一方、新聞の購読数が減り、実際の新聞に触れる機会が従来より大きく減少している。その中で、フィルターバブルやエコーチェンバーなどにより社会の対立や分断が起こり、様々な問題が指摘されるようになった。

また、授業においても新聞でまとめる場面や新聞というスタイルで発表する機会もあるが、新聞に日常的に触れていないからこそ、多くのメディアの中でなぜ新聞かという視点で新聞の性質を捉え直す必要が重要だと感じている。

新聞は、多くの情報について、ファクトチェックをし、編集して紙面が作られている。また、読み手を想定して書かれており、新聞にまとめる際にも読み手にとってのわかりやすさが大切な要素になる。

また書く前には、インタビューなどの取材を行う必要があり、新聞を作る体験から情報やメディアについて多くの学びがあり、メディアリテラシーを学ぶ第一歩になる。

ICT の時代だからこそ、新聞のニュースを共有することで、社会をつなぐことができるのではないか。社会をつなぐ「のりしろ」という古くて新しい役割があるように思う。

(3) 全国大会後の取り組み

○荘山田小学校と愛徳学園小学校との NIE 連携平和学習

NIE 全国大会神戸大会で御縁をいただいた、広島県呉市立荘山田小学校の6年生と、愛徳学園小学校の6年生で3学期に「平和について語り合う会」と題して、オンラインで交流平和学習をおこなった。事前に平和をテーマに各学校で作成したはがき新聞のデータを送り合い、はがき新聞をお互い読みあつたうえで交流を行った。

はがき新聞の感想交流や質疑応答のほか、荘山田小学校の児童は紙芝居「ふうちゃんの

そら」の朗読、愛徳学園小学校はアッシジの聖フランシスコの祈りの聖歌「平和の祈り」の歌唱をそれぞれおこなった。



(上2枚 愛徳学園小学校6年生が作成したはがき新聞)

紙芝居「ふうちゃんの空」は原案者である中峠房江さんが小学校2年生の時に実際に体験した呉空襲の話である。「ふうちゃんのそら」の導入は現代、花火大会に行くために浴衣を着せてもらったみいちゃんがおばあちゃんを花火大会に誘うところから始まる。多くの子どもたちにとって経験のある、「花火大会に行くことを楽しみにしている」という場面からはじまることによって、このお話をぐっと身近に感じる事が出来る。その後、おばあちゃんはみいちゃんに花火が苦手な理由を話し始める。平和な現代から戦争のあった過去へと自然に話は繋がり、最後はまた現代の場面に戻る。この構成により、過去に起こった戦争の悲惨さだけではなく繋がれた命の尊さや戦争の傷が癒えるための時間の長さなど様々な事が描き出される。愛徳学園小学校の児童は、荘山田小学校の児童が画面越しに朗読する「ふうちゃんのそら」を食い入るように聞いていた。



(上「ふうちゃんのそら」の朗読を聞く愛徳学園小学校の6年生 写真提供・新聞情報社)

聞き終わった後には、「防空壕にいれば安心だと思っていたが、狭く大勢が押しつぶし合うなど安全な場所ではないと分かった」「花火は人々を明るくするものなのに、戦争を思い出す人もいると知った」などと感想を伝えていた。

会の最後には、今回の交流を通して、深めた「平和」に対する考えを伝え合った。愛徳学園小の児童の一人は「私たちが今日話し合った

ことは小さなことかもしれないけど、こうした繋がりが増えていけば大きな変化になるかもしれない。繋がっていくことが大切な一步になると思った。」と語った。



(上 意見交換をする様子 写真提供：新聞情報社)

今回、異なる環境にいる6年生どうしが考えを伝え合ったことで、一つの学校の中で行うよりも学びが広く深いものになったと感じた。今後もこのような取り組みを広げていきたい。

3 おわりに

新たに戦争を直接体験する人がいなくなることはいいことである。なぜなら、それは戦争が身近なところになかったということであるからだ。しかし、体験する人が減るとその経験から学んだことを社会に活かしていくことが、ややもすると薄れていく。だから直接体験した人から直接体験していない人へ、さらに直接体験していない人からさらに次のまだ見ぬ世代へとその経験を伝えていくことはとても重要なことだと思う。これは戦争の体験を平和に生かすための取り組みはもちろん、災害の記憶やそれぞれの地域や家庭での文化とその継承をいかに伝えていくかという点でも同じで、とても大切なことである。そのため記録するメディアとしての新聞だけでなく、新聞を作ることを通して、平和のために主体的にかかわり、自分の事としてその営みを支えていくことができると2025年度の実践と全国大会での二つの発表を通して確信した。

【 中 学 校 】

NIE から未来を描く～すべてのいのち輝くまちづくり～ ～住み続けられるまちづくりを目指して 企業と地域との連携～

西宮市立浜脇中学校 校長 佐々木 理
教諭 野上 耕佑 西村 哲
 渋谷 仁崇

○第 30 回 NIE 全国大会・神戸大会

公開授業・実践発表・ポスター掲示で参加

2025 年 7 月 31 日～8 月 1 日



○実践の概要と内容

2025 年度、本校では NIE 活動を「知識習得の手段」から「社会を変えるための思考ツール」へと進化させることに取り組んだ。2019 年度から続く積み上げにより、全校生にとって新聞は日常的な情報源である。2025 年度大阪・関西万博を学びの軸に据え、地域社会や企業と連携し、中学生が「未来の創り手」としての当事者意識を持つことを目指した。2023 年から本校の教育課程・学校教育目標に「NIE 活動」を掲げた。社会とつながる個と集団の育成に向け、NIE の定着を図りたい。社会全体を多面的・多角的に考察し、他者と対話する中で、「い

のち輝くまちづくりを」地域のテーマとして主権者教育へつなげたい。

1 「NIE ノート」

本校の NIE 活動の心臓部は、毎週実施される「NIE ノート（記事スクラップ）」である。生徒は新聞から自分の関心に沿った記事を選び、要約、意見、そして「未来への提案」を記述する。全校生徒 850 名が作成している。授業の最初に、各班の代表が、書画カメラや、個人パソコンを活用して発表をする。お互いに内容のメモをとったり、意見を交流したりすることで「対話的な」学習にも結びつけている。

- ・特別支援学級「大阪関西万博」「大谷翔平選手の活躍」や「阪神タイガース」など、自分の興味のあるものを中心に調べている。

2019年より

教育課程・学校教育目標の1つに

『NIE活動』掲げる

NIEノート



↓

NIEノート作成

週1 全校800名作成

【特別支援学級も活動】

↓

朝NIE活動

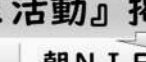
毎週木曜朝10分

新聞ワークシート

(神戸新聞・読売新聞・各紙活用)



神戸新聞 45000部記念号



テストに時事問題として出題。新聞やニュースを見たり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

●『思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』

- ・正しい日本語を読む力。
- ・記事の内容を理解（記事の起承転結）する。
- ・自分の感想を表現する力。
- ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
- ・記事への興味・関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。



2 キャリア教育・探究活動・成果

「ジュニア EXPO 教育プログラム」において、2022 年度から一貫して参加を続けてきた。大阪関西万博 2025 夢洲会場で、NIE 活動を実践発表。また『いのちジュニア EXPO2025 コンクール』における銅賞受賞である。



SDGs11「住み続けられるまちづくりを」について地域課題として企業とのオンライン交流を通じ、プロの視点での課題解決を学んだ。この学びは西宮市立中央図書館でのパネル展示として実を結び、地域住民から「中学生がこれほど具体的に西宮の未来を考えていることに感動した

と感想を得た。



3 みらいチャレンジ EXPO と未来メッセージ

2026 年 2 月に実施した『みらいチャレンジ EXPO』は、株式会社キャリアリンクの開発協力パートナー校としての重要なパイロット実践である。インターネット上に構築されたオンラインパビリオンを活用し、デジタル空間での NIE を展開した。



第 78 期生（3 年生）は、自らの人生と万博のテーマを重ね合わせ、「未来メッセージ」を作成。

【具体的な生徒の事例】

- ・万博の『smart health station』体験に基づき、『身近な健康診断でヘルスチェックを習慣にするために』というタイトルで、鏡を見るだけで健康状態がわかる技術を日常に取り入れ、病気を未然に防ぐ社会を提案した。

- ・『いつでもどこでもきれいな水を』

能登半島地震などの災害時における水確保の重要性を訴え、新聞で読んだ最新の浄水技術と、万博で紹介された持続可能なインフラを提言。

これらの活動は、学年集会において全生徒で共有され、一人ひとりが社会の課題解決に関わる『未来のチャレンジ』を宣言する場となった。

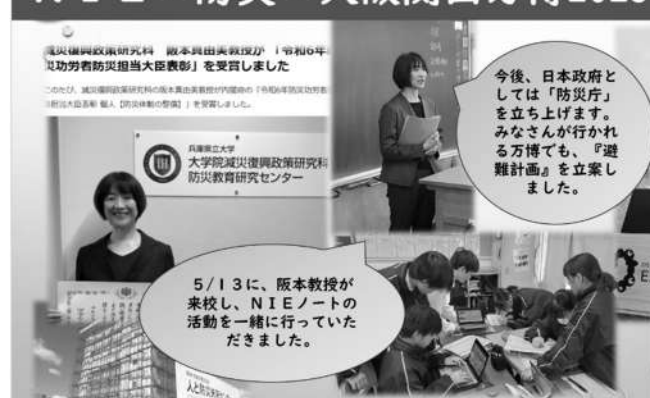
NIE × アイデア × まちづくり × 西宮市立中央図書館



4 主権者教育と防災教育の融合

NIE は本校において、単なる国語や社会の授業の枠を超え、防災教育や主権者教育のプラットフォームとなっている。震災 31 年において、新聞記事から学ぶ震災体験の継承は極めて重要である。

NIE × 防災 × 大阪関西万博2025



5 真庭での実体験をNIEで深化

真庭市での修学旅行では、事前学習で活用したバイオマス産業の学習と現地の体験を照合。NIEでの振り返りを通じたり、大阪関西万博2025の大屋根リングとのつながりを感じたり、地方創生の取り組みを自分事として捉え、持続可能な未来を描く生きた学びへと発展させた。



6 新聞の置き場と整理の方法

新聞は玄関ホールに下の写真のように置いた。

新聞社ごとに、左側にはその日の新聞、右側には過去の新聞と見やすく分けた。そして、NIE担当教職員や社会科係が整理整頓を行った。



7 神戸新聞社員の出前授業

神戸新聞社員の方に来ていただき、「仕事とは」をテーマに出前授業を行っていただいた生徒の感想では、「早く働いてみたい」と今回の出前授業を受けて思ったことや「自分も夢もち、何かに熱中できる人になりたいと思った」や「これからの経済や地球環境を守っていく

のは自分たちであると思った」などが見られた。

働くことを切り口に、現在の国際情勢にも触れながら、様々な角度から話をしていただいたので、生徒にとって将来について考える良い機会となった。

働くことの意義など学ぶ 西宮・浜脇中で神戸新聞社員が出前授業

2026年03月11日



「仕事とは」をテーマにした出前授業が、西宮市宮前町の浜脇中学校であり、1年生290人が参加した。同校は日本新聞協会のNIE実践指定校。神戸新聞NIE・NIB推進部の三好正文シニアアドバイザーが働くことの意義ややりがいについて話した。

授業で三好アドバイザーは、ミラノ・コルデイナ冬季五輪での日本選手の活躍に触れた。フィギュアスケート女子銀メダリストの坂本花織選手（神戸市出身）の「『銀』で悔しい

と思えるのは『金』を目指して頑張ってきた証」という言葉を紹介。夢に向かって努力する大切さを伝えた。

記者の仕事では「問題提起し、社会を良くすることが仕事」と強調。「戦争や災害、事件など、世の中は理不尽なことが起こる。誰も一人にさせない報道を心がけたい」と話した。

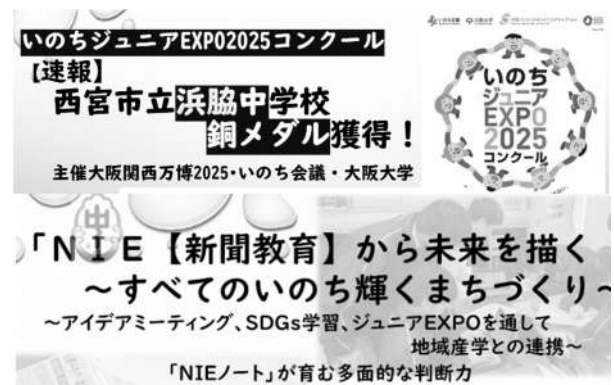
「仕事はよりよい社会をつくるためにある」と話し、「今学んでいることが未来の選択肢の幅を広げる。じっくりと夢を見つけよう」と呼びかけた。

生徒たちは将来の夢を語り合い、サッカー指導者や栄養士、ユーチューバー、声優などが挙げられた。前神大地さん（13）は「陸上に関する仕事や公務員に興味がある。学びを深めたい」と話した。＝3月11日付神戸新聞朝刊版神版

8 成果と今後の課題

新聞やニュースから社会を捉え、自らの言葉やアイデアで未来を彩り始めた生徒たち。3年間の学びの中で、ジュニア EXPO や企業・地域とのつながりは、自分たちが社会的存在へと近づいたことが確信に変わる大きな成果でした。

課題は、この熱量を校内に留めないこと。今後はこの「浜脇の熱」を地域や、他の地区に広げ、すべての「いのちが輝くまちづくり」を共創する挑戦を続けます。NIEを通じて社会問題への関心や理解を深め、多様な学びを深化させ、様々な社会問題に対して、“自分ごと”として捉える活動を継続していきたい。



夜間中学での学び

～新聞記事から生活につながる学びを～

姫路市立あかつき中学校 校長 山下 雅道
教諭 伊達 実

1 はじめに

本校は、2023年4月に開校した播磨地域初の夜間中学校である。

夜間中学校は、さまざまな理由で中学校での学びを十分にできなかった生徒が通う学校である。16歳から92歳までの幅広い年齢や5か国に至るルーツがあり、言語や文化の異なる多様な生徒がいる。それぞれ背景が異なり、年齢・国籍等により、生活経験や学力も一人一人異なることから、その実態に合わせた様々な工夫をこらしている。限られた授業時数による学習内容の精選から、授業内容の自主的な編成を行う本校の利点を生かした取り組みを行い、「生活につながる学び」を日々の授業に活かすように取り組んでいる。

新聞記事の内容は生活につながるものであり、学習内容として好機を逃さずに取り上げることで、生徒の学習意欲をより高めることができる。また、身近な地域の問題を学校において生徒同士で共有することから、生徒自身の経験や知識を交流することにつながり、学習を深めることができる。

2 これまでのNIEの取り組み



A)新聞コーナーの設置

1階廊下に新聞コーナーを開設、生徒が自由に新聞を手にとって読むことができる。教室への持込みも可とする。購読した新聞は、読売・日経・産経・神戸・THE JAPAN NEWS・朝日小学生・毎日小学生である。

B)全教科で、新聞利活用学習の実施

各教科の実践をNIE実践報告の様式でまとめてデータで保存していく。ワークシートやプレゼンテーション資料も合わせて保存する。

C)『あかつき新聞』発行

生徒からの情報提供や学校の様子などを材料として、新聞記事を作る。当初は教員で作成していくが、生徒の自主的な記事提供も呼び掛けていき、生徒の主体的な活動へとつなげていく。生徒の自己表現のよい機会とし、自信や自尊感情を高める活動としていきたい。

3 実践の内容

①好機を逃さず学習

→学習意欲をより高められる

②身近な話題を共有

→経験や知識を交流し、学習を深められる生活につながる学びができるNIE

①好機を逃さず学習

【社会】

テーマ：新紙幣について(単元名：近代国家の歩みと国際社会)

○学習活動

新聞記事の内容に関する質問に答え、新紙

幣に採用された人物について知る。

【第一次】

新紙幣の肖像に採用された人物について知る。神戸新聞(7/3 朝刊)1面を読み、各紙幣の人物が残した功績の質問に答える。

【第二次】

新紙幣に採用された新たな技術について知る。神戸新聞2面を読み、新紙幣に使用されている技術の名前を答える。

【第三次】

お札の肖像になったことがない人を知る。10名の偉人から、今まで紙幣に採用されたことがない人物を答える。有名な政治家、時の政府を支えた人物、文学・医学で功績を残した人物が採用される傾向を伝えた。

○留意点

漢字の難読さを考慮し、教師が範読する。自分が大事だと思う所に線を引かせる。

○生徒の反応

紙幣という日常的に目にするものが題材ということで、興味・関心が高かった。また、3Dホログラムの技術の高さに驚いていた。

○実践の成果と課題

記事を理解しようと何度も読み返し、粘り強く課題に取り組む姿勢が身に付いた。しかし、漢字の理解度の違いで、内容理解に差が出てしまった。



【国語】

テーマ：新聞に触れて・感じて・考えよう

(単元名：新聞を使って)

○学習活動

新聞記事から季節ごとに俳句を作り、身近

な新聞記事に見出しをつける。自分の身の回りの出来事に興味や関心をもって新聞に触れるきっかけとする。



【第一次】

俳句は、17音からなる短い詩で季語があることを知る。食べ物・植物・行事などからどんな季語があるか考える。それを元に新聞から春・夏・秋・冬を感じる記事を見つけ、記事から感じる音やにおい、味、手ざわり、話している言葉を想像し、俳句作りに生かす。作った俳句を発表し良いところを見つけ合う。



○留意点

実際に新聞をめくって季節に合った新聞記事を探す。その際、写真を頼りに探したり、見出しから見つけたりして新聞に触れる。

○生徒の反応

自分が手にした新聞からその季節ならではのものを熱心に探す様子が見られた。初めて新聞を手にする生徒もあり、興味をもって活動できた。

○実践の成果と課題

写真や見出しの言葉を使って俳句を作ることができてきたが、記事の内容まで読み進めて俳句を作る生徒は少なく、写真や見出し以外の補足を個別にする必要があった。

【第二次】

新聞に見出しをつけよう。

身近な秋の風物詩「姫路・灘のけんか祭り」の記事を取り上げ、新聞の内容を5W1Hで読みとる。簡単な言葉で短く書くことを意識して見出しを作り、発表し合う。

○留意点

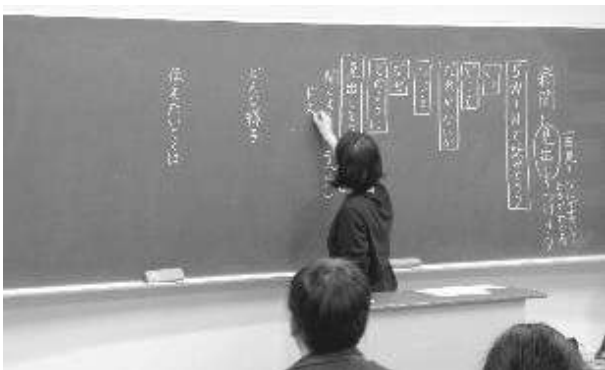
身近な記事を用いることで新聞の内容から5W1Hを見つけやすくする。「灘のけんか祭り」を知らない生徒がいるので、祭りの動画の視聴を行った。

○生徒の反応

知っている生徒にとっては、記事がわかりやすく、記事の内容や写真から知っていることを交流する場面も見られた。

○実際の成果と課題

新聞の内容を5W1Hにして読み取る活動では、記事の中からワークシートの空欄に合う言葉を見つけ、埋めることができた。しかし、どんな記事の内容だったか理解するまでにはかなりの個人差が見られた。見出しは短い言葉で書くことを意識して、記事やワークシートから言葉を選び作ることができた。発表し合うことで、同じ記事でもキーワードとした言葉が違うため、生徒それぞれの思いの詰まったいろんな見出しができ、よい交流となった。また、記事をもとに自分の経験を話したり、質問したりして交流する場面が見られ、実際に祭りに行ってみたいと思う生徒も出てきた。自分たちが住んでいる地域に関心を寄せる取り組みとなった。



【理科】

○テーマ：昨日の雹はどうして降ったのだろ

う（単元名：天気）

○学習活動

新聞記事を見て昨日の雹がどのような原理（発生の仕方）であるか探求する。そのあと前日の大気の情報調べるために、気象庁のHPを活用し、上空の状態やどのような予報だったか、などについても確認した。

○生徒の反応

前日の出来事で記憶に新しく、あまり経験することのない自然現象だったこともあり、興味深く学ぶことができた。

○実際の成果と課題

防災学習としても取り扱い、実際に自分たちが経験したことが今回の学習内容となった。

②身近な話題を共有

【数学】

テーマ：新聞から読み取れる数学の言葉を見

つけよう

単元名：単位や数学に使われる。用語につい

て考えよう

○学習活動

新聞記事から数学用語を見つけたりグラフの特徴や良さを知ったりする学習をした。まず、事前知識として、算数用語の棒グラフや円グラフの見方や考え方の学習を行った。

○生徒の反応

朝日小学生新聞を使った授業では、新聞記事の中から算数数学用語を見つける作業を行った。数字を見るだけでなく、棒グラフや円グラフを使うことで、数値が見やすくなったり、他のデータと比較しやすくなったりすることを知り、グラフの良さに気づくことができた。

○実際の成果と課題

食品の名前や価格の変動などは生活に密接するものであり、生徒にとって関心を深める学習となった。

【総合的な学習の時間】

テーマ：新聞記事を作ろう

○学習活動

学校で保管している新聞から、お気に入りの記事を見つけて、その写真や文章を参考にして新聞大の模造紙に記事を作る。授業計画として、新聞を読んで記事を見つける(2時間)。写真や文章を活用して新聞記事をつくる(2時間)。新聞記事を発表する(2時間)。

【1 新聞を読む】

これまでの学校の新聞を段ボール箱ごと並べて、自由に選ぶ。気になる記事があれば、同じ日付の他社の新聞を比べて読む。日本語が難しい生徒は、翻訳アプリで記事ごと翻訳して理解を図る。近い日付の新聞や他社の記事と比べて、それぞれの特徴や違いを考える。早く見つけた生徒の紹介をして、周りの生徒の意欲を高めたり、参考にしたりする。

【2 写真や記事の文章から活用するものを選ぶ】

写真は配置を決めたり、文章は手書きでまとめたりする。母語と日本語の併記で本校の特徴を表す記事にする。わかりやすい日本語の変換は、まわりの教師が補助する。

【3 見出しを自分で考える】

実際の新聞記事とは異なる見出しを付けるようにする。見出しは、大きく書く。早くできた生徒は、鉛筆の部分をペンでなぞり書きしたり、色や絵、枠線などを工夫したりして、興味深い記事に仕上げていく。

【4 新聞記事を発表しよう】

発表できる生徒は、記事を選んだ根拠、工夫した点、特に読んでほしい・見てほしいところなどを全体の前で、モニターを活用して発表する。発表が難しい生徒は、教室の掲示で紹介する。

4 生徒の変容

新聞コーナーや授業での新聞利活用学習により、これまでよりも大幅に新聞に触れる機

会が増えた生徒がほとんどである。その中で、新聞の特徴である一覧性や新聞に表された多彩な言葉に気づくことができた。また、日頃触れることのない話題や社会の出来事に触れるなど、社会課題への出会いから、社会に目を向けようとする積極的な姿勢も見られるようになっていく。

5 成果と課題

実践の内容①国語の【第二次】新聞に見出しをつけよう「姫路・灘のけんか祭り」の記事の授業では、80代の生徒から、祭りについての詳しい情報を追加で説明する場面があったり、祭りを知らない外国籍の生徒の質問があったりして、それぞれの生徒の興味・関心を広げ、生徒同士の交流を通して学習を深めることができた。

今後は、生活につながる身近な題材の特徴や自分との関わりを見つけ、主体的・自律的に考えて自らの意見を発信していく「意見形成力」を育成していく。そのために、新聞記事から現状を理解して、自分たちが行うべきことを考え、生活につながる身近な題材についての多面的・多角的な視点を持ち、社会課題を自分事として捉えることを大切にしていきたい。また、生徒同士の対話を取り入れた授業をすすめて、多様な考えを生かして豊かな学びへとつなげていきたい。

本校の多様な生徒の実態は、学習をすすめる点で困難さというデメリットと捉えがちだが、本実践のように多様であればあるほど、交流や学び合いの視点からすると豊かな学びにつながる大きなメリットとなる。

本校の学校目標である「学ぶ喜び」につながるよう、今後もNIE実践に取り組んでいきたいと考える。

だれもが気軽に取り組むことができる新聞の活用

神戸市立雲雀丘中学校 校長 前田 卓己
教諭 加治 譲二

1 本校の特徴について

①少子高齢化の最先端

神戸市内の中学校で生徒数が激減している学校です。中学校の南にはかつて雲雀丘小学校が隣接していました。小学校は統廃合され移転し、丸山ひばり小学校になりました。雲雀丘小学校の跡地は、現在は2つの特別養護老人ホームになっています。丸山地区の自治会報でも「丸山地区は少子高齢社会のフロントランナーといわれ、住民の高齢化は進むばかりです。加えて5軒に1軒は空家です。……」と書かれています。何十年後かには、学校だけでなく町がなくなる危機的な状況です。このように少子高齢化が激しくこの20年間で200人以上の生徒減で現在は生徒数が142名です。今後、生徒数は減る一方の見通しです。

②不便さと老朽化

本校に行くためには、バスしかありません。朝夕は道路が混みあってなかなか市街地に出ることができません。買い物に行くのも一苦労です。コンビニエンスストアも2つしか校区にありません。1つは校区のはずれにあり実質1つしかありません。郵便局も交番も1つです。話題のコベカツでも、2025年9月30日の発表では中学校内で実施されるコベカツは最も多い学校で校内実施だけで28。最も少ない学校は校内実施が1つ。本校ともう1校だけです。町の老朽化もひどく、2025年5月には道路の陥没があり、新聞やテレビでも報道されました。このようにインフラや設備も老朽化し、空き地や空き家には雑草が生い茂っています。

2 なぜNIEなのか？

前述の「本校の特徴について」から、NIEの活動に全校をあげて取り組んでいます。それは本校の生徒たちにとって、必要で有効な教育活動であるからです。

①世の中とつながっていない地域

スーパーマーケットはありません。銀行、交番、郵便局がそれぞれ1つだけです。新聞の販売店ももちろんありません。市街地の学校に比べて世の中の動きがわかりにくい地域です。生徒も世の中の動きとつながりをあまり感じることができません。新聞という「窓」を開けると世の中が見え、世の中という風を感じることができます。

②学習の有用性が感じにくい環境

美術館や博物館、映画館や図書館、スポーツ施設、高等学校や大学なども校区内にはありません。塾に行っている生徒も少ないです。自然が多いだけが救いです。学びの機会が少なく、学習する楽しさや学習の有用性を感じることがあまりないのが現状です。新聞という「架け橋」が、生徒と世の中の橋渡しになればと願っています。

③そもそも新聞をとっている家庭が少ない

何よりも、新聞を家庭でとっているという生徒が少ないです。1年生では新聞をとっている家庭は4世帯だけ。3年生でも6世帯です。しかも、ネットでのニュースさえ見ないのが現状です。新聞を通じて、生徒が世の中のことを知り、自分自身を伸ばす「チャンス」になるように取り組んでいます。

3 だれもが気軽に取り組むことができる新聞活用法

NIE の取り組みを食事に例えてみました。
(今年度の全国大会で掲示した壁新聞も最終ページに載せていますのでご覧ください)

①毎日のコーヒー「毎日の学校生活の中で」

3年生になって、やっと生徒が読みにくるようになりました。NIE の取り組みは2025年度の9月からですが、新聞は1年次から毎日置いていました。しかし、過去2年間はだれも自ら読もうとすることはありませんでした。今では1面から読む生徒が意外と多いのでびっくりします。



②季節の料理「季節ごとのテーマに沿って」

・「修学旅行」修学旅行で万博に行きました。事前学習で万博の記事（元旦の新聞は特に特集が多かったです）を毎日貼り続けました。



・「国際女性デー」男女共同参画社会の記事や女性の働き方の記事にかわいいミモザのリー



スを添えて貼りました。

・「交通安全週間」自転車反則金の記事や風見慎吾さんの交通安全週間の以前のポスターを貼りました。

③メイン料理

・「教科の授業の中で」社会の公民では、授業内容に沿ってその都度掲示しました。生徒の関心も膨らみました。国語ではNIE でいただいた大量の新聞の中から一人一紙選び、新聞記事の読み比べを行いました。読み比べる中で「年収の壁ってなに?」「ベネズエラってどこ?」「新潟の原発の電気って使うのは東京では?」など広がりのある授業でした。



・「総合的な学習の中で」平和学習では、戦争に関する記事、戦後80年の記事、広島、長崎の平和祈念式典の記事、沖縄慰霊の日などの記事を貼りました。The Japan Times では沖縄慰霊の日の前日に米兵が慰霊碑をきれいに掃除している新聞記事の写真を見て生徒は考えていました。また、ウクライナの戦争勃発時の6紙の記事を貼りました。本校ではアーカイブスとして毎年活用している記事もあります。



・「防災学習で」1.17や3.11のときは、新聞記事を中心に防災学習ルームをつくって自由に見ることができるようにしました。防災の授業や震災記念行事、避難訓練とタイアップして取り組みました。阪神淡路大震災当時の新聞や本校校区が1967年の大水害で大きな被害を受けた様子の新聞も掲示しました。過去の新聞が語りかける当時の様子や雰囲気から、授業や行事の意味を実感することができました。



④付けあわせに

・「読書の本に添えて」「105度」という佐藤まどか著の椅子のデザインの本と椅子のデザインの記事。「いとはんのボン菓子」という歌川たいじ著の本と実在の主人公を取材した記事。道徳の授業で取り組んだ



「ホセ・ムヒカ」の数冊の本とホセ・ムヒカ死去の記事。本や教材に新聞記事を添えました。

・「数学の教科書」と白銀比、黄金比の記事。大谷翔平の活躍した記事に



時速 160 kmを人は打てるのかという記事など授業の付けあわせに。

・インフルエンザの流行のときと予防法の記事や流行の様子のグラフの載った記事。

など、その都度、新聞記事を利用しています。

・「入試対策に」面接や小論文対策に新聞記事を使用しています。テーマ別に新聞記事を分け、時事問題は掲示板に貼っています。文章を書くことが苦手な生徒の中には、天声人語ノートや正平調ノートに取り組んでいる者もいます。

⑤日本全国の郷土食「全国の新聞を利用して」

夏のNIEの全国大会で、ニュースパーク（日本新聞博物館）に申し込むと同じ日の全国の新聞を送ってくれる（送料はかかります）ということを知って、2学期は3回送ってもらいました。北海道から沖縄の新聞まで見ているだけで勉強になります。中を見ているだけでも地方ごとの特色があり、生徒たちに好評だったので、



2 学期末には図書室に展示しました。



⑥保存食「過去の新聞を用いて」

中学 1 年生のときに「いのちの授業」の締めくくりに、生徒一人一人に誕生日の新聞の 1 面をラミネートしてプレゼントしました。先述の防災学習でも、阪神淡路大震災の当時の新聞、昭和 42 年の水害で本校の校区が大きな被害を受けたときの新聞を展示し、学習教材として使用しました。新聞は中央図書館 2 階の新聞コーナーのマイクロフィルムから複写しました。

4 取り組みの成果と今後の課題

NIE の正式な取り組みは 2025 年の 9 月からの 4 か月間なので、成果についてははっきりしたことを示すことは難しいかもしれません。中学 3 年生については 1 年次から新聞が常に学年フロアにある状態で取り組みました。毎週 1 回初任者の指導に社会科の元校長先生が、いつも授業のあとに「この学校の生徒はおもしろい意見を言いますね！今までいた学校の中でピカイチです」と言われます。ふだんから問題意識が高く、いろんなことに疑問を持ち、提案することができるところが成果かもしれません。

今後の課題は、3 つあります。

1 つ目は、生徒が新聞をみることを日常化することです。それには、小学校とタイアップして小中連携して NIE の取り組みをすることが課題です。ICT を利用して新聞記事について配信し、コメントをやり取りする。新聞委員や新聞

係などつくって多くの生徒が触れる機会をつくる。アイデアを出し合って工夫して新聞をつくることも課題です。

2 つ目は NIE の取り組みを教員が日常化することです。まずは、教員が新聞を読むことです。そして、NIE の取り組みに興味を持ってもらうことです。2025 年度より「学校経営方針」の中にも「NIE 教育」が入りました。校務分掌に「NIE」を入れ、生徒のおすすめの記事を輪番で選ぶなど、教員のシステムを工夫することです。これまでも、教員が、朝や帰りの ST や授業の中で新聞を紹介すると生徒も興味を持ち、読むようになりました。

3 つ目は新聞を通じて学んだことを生かすことです。新聞を通じて問題意識を持ったことや、問題に思っていたことを新聞によって確認し、実際の行動に移すことです。これまでも地域課題を解決するために新聞からも学び、地域に提案して行動することもありました。新聞を通じた活動で自己効力感を持つことができればと思います。学んだことをそれだけで終わらせない取り組みができれば願っています。



NIE で特別支援学級小中交流会

明石市立大蔵中学校

校長

赤堀 幸夫

教諭

三嶋 祐貴子

1 はじめに

本校は1947(昭和22)年に明石市立大蔵中学校として人丸小学校内に開校し、翌年に明石市立新制高等学校(旧高等女子高)に移転、1949(昭和24)年に新校舎が立てられ、現在に至る。明石市の東側に位置し、明石海峡大橋や瀬戸内海が一望でき、神戸にも姫路にもアクセスしやすいところに位置している。

特別支援学級は自情学級1クラス、知的学級1クラスで全6名の生徒が在籍している。実践NIE実践校1年目である2025年度は特別支援学級の生徒を中心に、NIEを通して「見る」「読む」「書く」だけでなく、様々な体験や経験を積み、コミュニケーション力を高めるための活動に取り組んだ。

2 取り組みについて

① 理科の実験活用

特別支援学級の理科の時間に、朝日小学生新聞に掲載されている実験を活用した。新聞を読み、書かれている手順通りにできるか作業の練習としてとても有効に活用できた。

【白菜の染色実験】



【2色のカフェオレ実験】

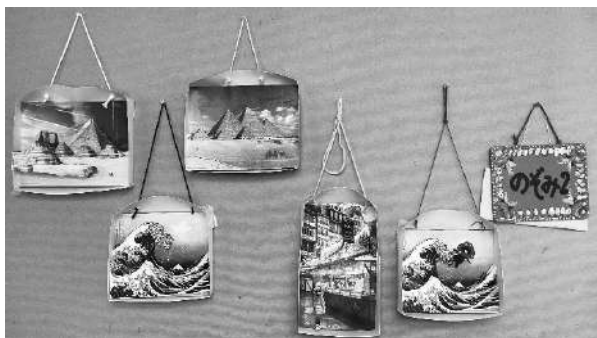


② 自立活動で工作

「建築をもっと身近に」をテーマに、建築士の茶谷亜矢さんが考えた折り紙建築を子どもと一緒に作っている記事を読んだ。記事に掲載されていたQRコードからピラミッドやミコノス島の教会など、折り紙建築をダウンロードし、ハサミやカッターを使う練習として自立活動の教材に使うことができた。



折り紙建築からさらに発展させ、絵画の立体工作にも取り組んだ。どうしたら立体的になるか工夫し、細かい所も丁寧に組み組むことができた。



③ 小中交流会で NIE

本校の校区にある人丸小学校と中崎小学校の特別支援学級 5、6 年生と新聞を使って交流した。朝日小学生新聞にあった、新聞隠れ家をグループに分かれ、中学生がリーダーとなって小学生と一緒に作った。



中学生は事前に新聞隠れ家を一度作成し、作り方を覚えた上で、各グループの小学生に教えた。小学生は新聞を細長く巻く作業が難しそうにしていたが、一緒に協力することができた。

交流会の感想文には、中学校に来て、新聞を使って隠れ家を作って楽しかったこと、中学生と交流して、中学に上がることへの楽しみができたことなどが書かれていた。



④ 新聞づくり

2学期、3学期に1回ずつ神戸新聞 NIE・NIB 推進部シニアアドバイザーの三好 正文氏に出前授業をしていただき、新聞の読み方のポイント、見出しについて、5W1Hを使った文章の書き方を教えていただいた。



【生徒の感想】

今回は新聞の作り方を授業して頂きました。5W1Hというのを基に記事を作るなど、記事に載せる写真の撮り方や新聞記者という職業が何故あるのか？新聞記者をやっている理由など盛りたくさんので、とても楽しかったです。

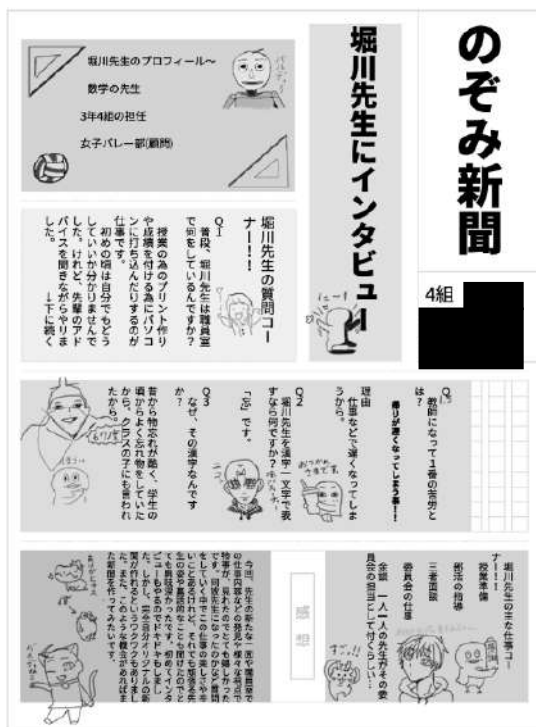
今日の授業で新聞のキーワードも学びました。他にも写真の撮り方を教壇でもらいました。新聞を作る時に写真を綺麗に撮って5W1Hも意識して作りたいと思いました。

ふた、たんと、つておしかりで、つに、毎日を楽しく過ごすことが、

出前授業の内容をもとに、一人が1つテーマを決め、学校に関する新聞づくりに取り組んだ。

はじめてインタビューをするので、事前にインタビュー内容を考え、読む練習をした。

インタビュー時には、録音の許可ももらい、終了後に録音を聞き、文字起こしをして新聞の作成に励んだ。



⑤ 神戸大会より

2025 年に行われた NIE 神戸大会で様々な団体と繋がり、出前授業を実施してもらうことができた。

「株式会社泉平」に依頼し、食育の出前授業を特別支援学級で行った。ちりめんアドベンチャーというテーマで、しらす漁の際一緒に捕れる魚介類を調べ、仕分けをする工程を学んだ。



3 成果と課題

1 年目の成果は、新聞を国語や社会だけでなく、理科、自立活動、小中交流会など幅広く活用し、生徒が多くの経験を積んだことである。

理科、自立活動では小学生新聞を読み、自分で実験や工作をすることができた。

小学生と交流する際に新聞を使うことで、小学生も新聞に慣れることができた。中学生になった時に NIE の活動が受け入れやすくなるであろう。

また、出前授業で学校関係者以外の大人と交流する、自分で新聞を作るときに教師や生徒にインタビューする、といった体験によりコミュニケーション能力を培うことができた。

さらに、全国大会に参加し、指導者が外部の団体と繋がりが増えたことで、授業を通じて生徒に還元することができた。

一方で、生徒の能力に大きな差があるため、小学生新聞の活用もレベルに応じた活用となった。漢字を読むことができない生徒にはルビを振るだけでなく、声に出して読み、内容を教師が補填することで、読解力をつける授業を増やす必要があると感じた。

2026 年度は、生徒自身が新聞を通じて様々な体験をし、活動したことを発信する場を作っていきたい。

NIE 全国大会神戸大会にむけてさらなる NIE 学習の充実へ

姫路市立飾磨中部中学校

校長 堀 晶子

教諭 佐伯 奈津子

1 はじめに

飾磨中部中学校は姫路市の南部に位置している。学校の南側にはかつては「飾磨津」と呼ばれる瀬戸内海を航行するうえで重要な港が昔からあり、姫路藩の外港として重要な役割を担ってきた。様々な物資が集まり、またここから各地へ運ばれて行った場所である。現在、臨海部には大規模工場が並び、産業の面でも大きなショッピングモールが建ち、活気のある街であるとともに、花山院が書写山円教寺の性空上人に会いに行く際、渡ったとされる「御幸橋」があり歴史の薫り高い土地でもある。学校の規模としては、1年生3クラス、2年生2クラス、3年生3クラスで全校生徒281名の小規模校である。

2 NIE 全国大会 神戸大会発表にむけて

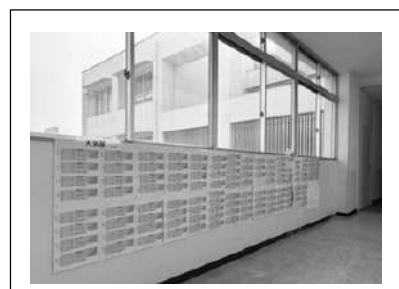
2024年度に本校は兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校となり、2025年度には兵庫県 NIE 実践指定校となった。NIE 全国大会神戸大会をひかえ、NIE 活動のますますの発展を計画すべく、いろいろな単元での活用方法を模索した。

それまでも朝学活を利用して新聞記事を読み、「人権意識を高める学習」や「学習内容を新聞形式でまとめる活動」などは行っていたが、NIE 活動をする上で大切なことは1回限りの学習活動に終わらず、継続的に続けることが大事であると考えている。2025年度もひきつづき新聞コラムの書き写しを朝学習で行った。

図書委員による NIE 活動も継続的に行った。毎日の新聞の交換や新聞資料の整理を学校司書とともに行うのも大事な委員としての仕事

である。

理科の学習において、天気図を学習し、図書委員が継続的に季節ごとの天気図を切り抜き、掲示もした。



さらに、図書室では、今までの新聞が見返せるように整理をして保管してもらうようにした。これにより過去の記事を調べたいとき、この資料を見て探すことが可能となった。今後、この資料を使つての学習活動も考えていきたいと思っている。



また、2025年度も継続して学校司書による記事紹介の掲示物の更新もした。その週にあったニュースのまとめや阪神淡路大震災の特集、読者コラムに掲載された生徒の紹介などたくさんの記事を紹介することができた。



3 出前授業

兵庫県 NIE 実践指定校となることで、新聞社の方に出席授業として複数回にわたり来ていただく貴重な機会を得ることができた。

○広島平和学習について

12 月 18 日、被爆地広島での校外学習の前に、1 年生を対象に神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーと姫路空襲の語り部である黒田権大さんに平和学習について出席授業をしていただいた。

黒田さんからは、1945 年 6 月、7 月の姫路空襲の様子を伺うことができ、自分たちの住んでいる姫路にも戦争被害があったことをくわしく知ることができた。

一方三好さんからは、神戸空襲の様子や現在起こっているウクライナ侵攻の現状も語っていただき、「若い人に戦争の記憶を語り継いでほしい」というメッセージをいただいた。



生徒の感想からは、「姫路空襲について話を聞いたのは初めて。ひいおじいちゃんが戦争体験を話すのを控えているのはとてもつらかったからだろうな」という声や「黒田さんの姫路空襲の体験を聞き、もっと調べてみようと思う。平和な世の中を目指したい」という頼もしい声も聞かれた。

○阪神・淡路大震災 当時の様子を新聞記者に聞く

1 月 16 日に神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好シニアアドバイザーから全学年、当時の様子を直接聞ける貴重な機会を得ることがで

きた。

三好アドバイザーは震災当日、神戸新聞本社で宿直勤務をしていた体験などを語ってくれた。

また、話の中で大規模災害の記憶や教訓は 30 年で風化する「30 年限界説」について語ったり、「南海トラフ巨大地震への対策」についても言及したりした。三好さんは備えにゴールはなく、過去の災害から教訓を得、命を守ろうと生徒たちに呼びかけてくださった。



4 平和学習と新聞活用

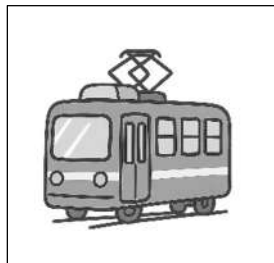
2025 年は戦後 80 年目の節目の年であった。また 1 年生では広島へ平和学習をするために校外学習も予定されていた。それにむけて、平和に関する記事を集め、校内に掲示したのが次の写真である。

新聞は、文章だけでなくグラフや表なども使い、わかりやすく情報を提供してくれる。掲示された記事も分かりやすく原爆の情報をグラフや表でまとめられており、当時のことを理解しやすいよう工夫がなされていた。

校外学習に行くにあたっての調べ学習では広島と長崎に落とされた原爆の特徴や被害を比較する生徒もあり、掲示した新聞記事を活用したり、この記事からヒントをもらったりすることが何えた。また教師側も調べ学習を進める上で、何から調べてよいかわからない生徒に、掲示している記事を元に調べる内容や項目のヒントを提案することができ大変役立った。



さらに、NHK広島の「被爆 80 年プロジェクト」のテーマ曲である「言伝」という曲を取り上げ学習をした。この曲は NHK 広島放送局が広島出身の歌手であるポルノグラフィティに依頼した曲で、当時の様子をわかりやすく一曲の歌にしあげたものである。曲の前半では被爆後わずか 3 日後に広島電鉄が電車を走らせた「一番電車」が取り上げられており、中国新聞の記事と合わせて紹介した。加えて「言伝」の歌詞と新聞記事とを比較しながら詳しい内容を読み取る学習もした。



「一番電車についての記事」には、当時車掌を務めた笹口里子さんのインタビューが載っており、記事を読んだ生徒たちは当時 14 歳だった笹口さんが車掌として働いていたことを知り大変驚いていた。また、原爆投下直前の悲

惨な街の様子を笹口さんのインタビューからありありと感ずることができた。2025 年は戦後 80 年目の節目の年であったので、多くの戦争体験者の当時の話が紙面で紹介されていたが、一人一人、それぞれの戦争の記録を読み進めるうえで、当時のことをより深く知る学習となったことを強く実感した。

広島 of 校外学習から帰ってきて学んだ内容を新聞形式にまとめて、この資料を元にポスターセッションをして発表した。

この学習手法は NIE 全国大会で愛徳学園小学校と中学校の取り組み発表を参考にしたものである。全国大会でこの実践発表を見た職員が「ぜひ飾磨中部中学校でもこの方法でやってみたい」ということで取り組んだものである。

下の写真はその後作成した生徒の作品である。



まず、6 人班の中で班員それぞれが発表をし、班の代表者がクラスの中で一人ずつ話をする形式をとった。その後、クラス代表を一人選び学年全体で学んだことを共有した。

5 NIE 全国発表 神戸大会

8月1日に甲南大学岡本キャンパスにて、飾磨中部中学校のNIEの取り組みについて発表する機会をいただいた。

発表するにあたって、2024年度の10月2日に行った公開授業の内容を中心に話をした。2つの公開授業を行ったがそのうちの1つが「NIE 俳句～記事の写真から豊かにイメージしよう～」という名前のもと、記事の写真をもとに俳句を創作し、句会を行う授業であった。県内各地から教員ら25人が参加し、授業後に意見交換会をした。



公開授業の様子



発表の様子（甲南大学にて）

また愛媛のNIE全国大会で知った「クロヌリハイク」も紹介し、参加者と共にクロヌリハイクにも挑戦してみた。「クロヌリハイク」とは、愛媛新聞販売店の所長である黒田マキさんがアメリカのアーティストのオースティン・クレオンさんの作品をもとに創案した新

聞を塗りつぶして俳句を作るアートである。

愛媛新聞社からクロヌリハイクのワークシートやクロヌリハイクのマジックなども提供いただき、それらを活用しながら俳句づくりに取り組んだ。出来上がった作品をその場で紹介してくれる参加者もあり、充実した時間となった。

さらに、発表する上で、新聞記事の写真の魅力についても参加者と意見交換ができた。参加した学校司書からも、自分の地域の地方紙に美しい写真が載っているの、掲示物や話題提供に役立てたいという意見をもらうことができ、新聞の魅力を再確認することができた。

6 2025年度の活動をふりかえって

大部分の人がまず始めに情報を入手するコンテンツは携帯電話やパソコンであり、新聞はオールドメディアと揶揄されがちである。新聞をとっている家庭も年々減少している。そんな中、「学校教育の課題として『新聞を読む』という学習経験を授業に取り入れていくべきである。」という考えが年々私の中で強まっている。

今後の取り組みとして、学校司書がまとめ整理した図書室の新聞資料の活用や生徒たちにスクラップブックを持たせ、記事集めなどをさせる中で「新聞」が子どもたちにとって、親しみのあるものとなってほしいと思っている。

「新聞」をめくれば発見がある。美しい写真だったり、新しい情報であったり・・・今まで考えもしなかった想いに気づくこともある。新聞はそんな魅力あるメディアであることを今後も子どもたちに伝えていく授業づくりを心掛けたい。

自分ごととして捉える市民性の向上を目指して

神戸龍谷中学校高等学校 校長 山崎 眞一郎
副教頭 黒瀬 大亮

1 はじめに（研究のねらい）

現状の課題：情報の偏りへの危惧

現代の生徒たちは、生まれた時からスマートフォンや SNS が身近にあるデジタルネイティブ世代です。彼らは日々、動画プラットフォームや SNS を通じて膨大な情報に接触していますが、その情報取得の構造には大きな偏りが生じています。アルゴリズムによって最適化された「おすすめ」や、自分と似た価値観を持つコミュニティ内での情報交換により、生徒たちは無意識のうちに自分の興味関心の範囲内に閉じ込められています。その結果、社会の多様な側面や、一見自分とは無関係に思える国際情勢、あるいは地域の切実な課題に対して、当事者意識を持つ機会が著しく減少していることが大きな教育的課題となっています。また、断片的なテキストや動画情報の消費に慣れたことで、長文を読み解く粘り強さや語彙力が低下し、複雑な社会的事象を多角的に捉えて自分の言葉で解釈・表現する力が不足している現状が顕著に見受けられます。

研究目的

自分ごととして捉える市民性の向上

本研究では、新聞という媒体が持つ「一覧性」と「網羅性」、そして「多様な価値観の提示」という特性を活用することで、社会問題や国際情勢といった、自分が求めている情報以外の「予期せぬニュース」に強制的に出会わせ、社会問題や国際情勢を「自分ごと」として捉え直す機会を創出します。記事を読み、他者と感想を交流させる過程を通じて、生徒たちが「自分は社会を構成する一員である」という

当事者意識を持つことを目指します。情報の送り手の意図を読み解き、得た情報をもとに自ら問いを立て、批判的思考力を持って主体的に判断・行動できる資質・能力を涵養することが、本実践の究極の目的です。

2 実践の概要

対象・期間

本校の中学1年生および2年生を対象に実施しました。週1回設定されている「読書の時間」の枠組みを柔軟に運用し、1年間を通じて継続的な指導を行いました。生徒を「新聞活用グループ」と「本活用グループ」の2～3グループに分け、数週間ごとに題材をローテーションさせることで、少人数による密度の高い対話と、年間計12コマの学習時間を確保しました。

活用した新聞

地域紙である神戸新聞をはじめ、朝日、毎日、読売、日経、産経の主要6紙を活用しました。同じニュースでも新聞社によって「見出し」や「取り上げ方」が異なることを視覚的に理解できるように、複数紙を常に比較できる環境を校内に準備しました。

3 実践の具体（指導の実際）

活動の3ステップ

1年間の活動を、生徒の興味の広がりに合わせて以下の3段階で構成しました。

【1学期】

まずは新聞の紙面をめくる感覚を増やすことから始めました。新聞全体にざっと目を通し、自分の興味関心にもとづき「言葉」や「写真」を見つけ出す活動を通じ、情報に触れる機会を多くすることを心がけました。

【2学期】

記事の内容理解から一歩進み、紙面を構成する要素（見出し、リード文、写真、図表、広告の配置）が持つメッセージ性を考察しました。その学びを活かし、B4サイズのオリジナル新聞を各自で作成しました。



情報を取捨選択し、レイアウトを工夫するプロセスを通じて、情報の「編集」という概念を体験的に学びました。

【3学期：比較と多角的な視点】

同一の社会事象について、社説や解説記事を読み比べました。事実（Fact）と意見（Opinion）を切り分け、なぜ新聞によって解釈が分かれるのかを議論することで、社会に対する自分なりの考えや考え方への理解を深めていきました。

具体的なワーク：価値観の衝突と受容

特に生徒の変容が見られたのは、興味を持った紙面を写真に撮り、その選択理由を文章化して共有するワークです。他者の選択理由を知ること、自分とは全く異なる関心事や視点に驚き、共感や反発を伴うリアルな対話

が生まれました。これは単に「自分を認めてもらう」ための多様性ではなく、「理解しがたい他者の視点」をも含めて社会が存在することを認識する、真の多様性理解へと繋がる契機となりました。



生徒の意見の例（見出しにフォーカスした時）

- ・見出しは題名みたいで、大まかに書かれている。

内容は見出しについて詳しく書かれている。内容は長いからそれを読んでもらうためには面白い、興味のわく見出しが大事なんだと思います。もし自分が新聞を作るなら面白いインパクトのある見出しを考えたいと思いました。

- ・可愛い幼稚な見出しに対して、内容はほのぼのしているが、堅苦しい口調で書かれている。

- ・見出しが本文の要約になっていて、ある程度内容を伝えることで興味を引き立たせているのかなと思いました。

- ・タイトルに『北川氏 ノーベル賞』と、少ない文字数ながらインパクトのある単語を用いる事で、読者を惹きつけつつ内容に目を通すように仕向けられている。そして、見出しに『夢の〜』と書くことにより、実現出来た事柄に誉れを持たせ、如何にも素晴らしいのだと読者に思わせている。肝心の本文の最初は、『【ストックホルム共同】スウェーデンの王立科学アカデミーは〜』と仮称から述べる事で、スムーズに名称を述べつつ、読者が読み続け

やすく設計されている。しかも、あえてすぐ下に受賞理由を述べているため、本文の量をより少なくしつつ要約が出来ている。また、そのおかげで受賞理由をより深くする事も可能にしている。この記事はタイトルや見出し、本文、おまけの全てにおいて素晴らしい記事だと言える。

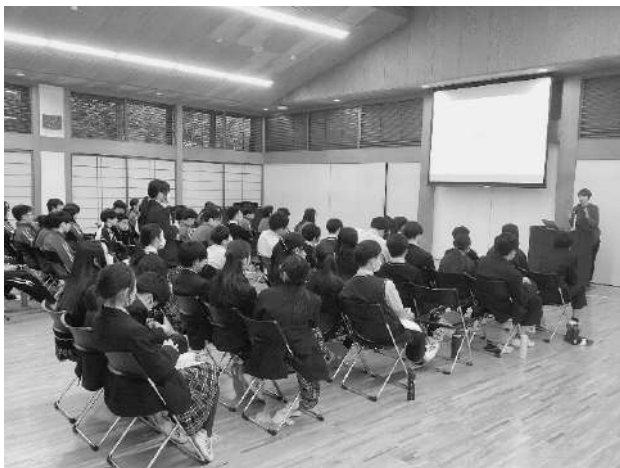
・私はこの見出しと内容を見て大小感覚は見出し＝内容 だと思いました。理由は、見出しでCoCo 壺番屋みたいな正式名称ではなくみんなに呼ばれているココイチという言い方を使って見る人を惹きつけており、内容では要点になるような話題を分かりやすく簡潔に書かれているからです。しかし、私は何故 2 行しかない所に文字を詰め込んでいるのかなと思いました。私の仮説では、印刷するための紙にかかる費用を少しでも抑えることや、他の内容を少しでも多く書き込むためなのかなと推測しました。

4 生徒の変容と成果：記者講演を経て

実践の集大成として朝日新聞神戸総局の中塚久美子記者による講演を実施しました。生徒たちは事前に学んだ新聞の特性を踏まえ、「フェイクニュースからどう情報を守っているか」「事実を伝える際に個人の感情をどう制御しているか」といった、メディアの本質を突く鋭い質問を記者に投げかけました。中塚記者はこれらの問いに対し、現場での取材活動や校閲のプロセスを引き合いに出しながら、多角的な取材によって客観性を確保する姿勢を誠実に語られました。特に「時には批判的な視点で新聞を見つめ、市民社会をつくる一員になってほしい」というメッセージは、新聞を「正しい情報の塊」として受動的に読むのではなく、社会をより良くするための対話のツールとして捉え直すきっかけを生徒に与えました。

講演会前にお送りした生徒たちからの質問例

- ・フェイクニュースが多い中で、新聞社として情報の正しさをどう守っていますか？
- ・事実を伝える時に、個人の感情が入らないようどう工夫していますか？
- ・SNS やニュースアプリが広まる中で、新聞にしか担えない役割は何だと思いますか？
- ・情報の収入源はどこからなのか？
- ・どうやってネタを探していますか？
- ・今まで取材したことのある人で一番有名な人は誰ですか？
- ・勘違いをしたままの(事実ではない)情報を世の中に発信したことはありますか？
- ・今までの 1 番のやらかしエピソードは？
- ・新聞を作るのにどれぐらいの人が携わりますか？
- ・取材する時に 1 番難しいことはなんですか？
- ・どういう話題が一番人気ですか？
- ・原稿の記述が締め切り時刻を超えてしまった事がありましたか？
- ・ネタが退勤時刻ギリギリに送られて来た事がありましたか？(あった場合、それは記述しましたか？それとも記述せずに退勤しましたか？)
- ・見出しはどのように考えていますか？
- ・記者としていちばん印象に残っている取材はありますか？
- ・インタビューしている時に話している内容を分かりやすくまとめるコツとかありますか？
- ・上層部の人たちによって揉み消されるような記事はありましたか？
- ・インタビューした中で一番興味深かったり面白いと思った内容はありますか？



事前にお送りした質問に対しては「中学生からこんな核心を突く質問が来るとは思わなかった」といった感想もいただきました。

その場で質問した生徒からは「質問に対してのお答えを聞き、新たな疑問も生まれ、もっと質問してみたかったです！この授業をきっかけに、新聞に対する興味が今まで以上にわいてきたように思います。」との感想もあり、充実した濃厚な時間でした。

変容の分析

事後アンケートでは、「ネットの速報よりも、新聞の方が情報の裏付けに時間をかけていることがわかった」「反対意見を読むことで、自分の考えが未熟だったことに気づけた」という記述が多くありました。

生徒たちは情報の嵐を受動的に浴びるのではなく、情報の質を吟味し、その背景にある意図を推察する必要性への気づきが生まれ、理解が深まったようです。



5 考察と今後の課題

成果のまとめ

新聞の一覧性と記者との直接対話により、生徒の関心は「自己の周辺」から「社会全体の構造」へと広がり始めたようです。特に「多様な意見の存在」を肯定的に捉える姿勢が育まれたことは、本実践の大きな成果です。また、語彙の獲得だけでなく、論理的な構成を学ぶ場としても NIE は有効であると考えます。

課題と展望

今後は「読書の時間」という枠を超え、国語科や社会科、さらには「総合的な探究の時間」における課題設定やリサーチの基盤として、NIE を学校全体のカリキュラムに活かしていく必要があります。また、家庭での新聞購読率が減少していく現状において、学校図書館や教室がいかにして「質の高い情報へのアクセス拠点」としての機能を維持し、デジタル版も含めたハイブリッドな情報活用能力を育てていくかが次なる挑戦となります。

6 おわりに

NIE は、単なる教科知識の習得を目指すものではありません。それは、変化の激しい、先行き不透明な社会を生き抜くための「羅針盤」を与え、民主主義を支える知的な市民を育てる教育活動だと、改めて認識できました。今回の実践を通じて、生徒たちが自分の周辺のみでなく、社会へと視線を向け、主体的に関わろうとする確かな胎動を感じることができました。

本実践を支えてくださった各新聞社、ならびに多忙な中、真摯にご講演いただいた中塚久美子記者に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

【 高 等 学 校 】

「はがき新聞」の活用実践

～高等学校における効果的な「はがき新聞」活用法について～

兵庫県立伊川谷高等学校 校長 小川 卓也
主幹教諭 福田 浩三

1 実践の背景・目的

生徒全員へのタブレット導入など、書くことによる学びが減っている現在において、「紙に書いて思考力を養う」という学習は、その機会を生徒に与えることが今後の教育活動において重要であると考えます。そこで、新入生に対して「限られた紙面に伝えたい内容を効果的にまとめる」ことを目的に、自己紹介文を「はがき新聞」にて作成し、廊下へ掲示することで、相互共有を促した（図1）。



図1 「はがき新聞」の相互評価の様子

「はがき新聞」とは、児童生徒がはがきサイズを主とする制約ある大きさの紙面に読み手意識をもって新聞形式で要点をまとめ、表現する取り組みであり、様々な実践例がウェブや書籍等にて紹介されている。しかし、その実践例は小中学校の児童生徒のものが多数を占め、高校における実践例は限られている。兵庫県立伊川谷高等学校では2018年度から2025年度までの7年間、公益財団法人理想教育財団より助成を受けるとともに、2022年度から2025年度までの4年間、一般社団法人日本新聞協会のNIE実践指定校としてNIE実践を行ってきた。その中でも「は

がき新聞」を用いた複数の実践について、生徒の作品を含め報告する。

2 「はがき新聞」の実践

実践対象は兵庫県立伊川谷高等学校にて筆者が当時担当した2020年入学生および2023年入学生と学校設定科目「コミュニケーション基礎」を受講した30名である。該当生徒は入学時に図2に示す自己紹介はがき新聞課題を与えられ、以後も学校行事の度に感想を「はがき新聞」にまとめることで、教師の特別な指導がなくとも生徒が当たり前のように「はがき新聞」で感想を書く状態を作り出した。また、授業や特別活動等で他の教員も自由に「はがき新聞」を活用できるよう、複数のサイズ、形式の「はがき新聞」用紙をあらかじめ用意、保管した。

はがき課題 自己紹介をしよう！

マス目が小さいので、1マス1文字でなくて構いません。文字の大きさは自由。

左側の『これからの抱負』は名前をイニシャルに替えて学年適度に載るかも？

本家大元の新聞を思い出して書いてみると良いかも

これから3年間、こんな感じで『はがき新聞』をたくさん書いてもらいます。

一番上の枠a、bは外枠のすぐ上に、他の内容は用紙外枠内に収まる様に書く。

完成した作品は、毎度各教室の廊下側窓に掲示して誰もが見られる状態にするので、常に「人に見られる」事を意識して書いて下さい。

図2 「はがき新聞」の説明プリント

2.1 行事の感想「はがき新聞」作成

遠足や文化祭、体育大会などの学校行事ごとに感想「はがき新聞」を作成し（図3）、教室の廊下側壁に掲示して生徒間で共有した。また、クラスや授業によっては、行事以外でも担任や授業担当者が自由に「はがき新聞」用紙を活用して、

- ・推薦図書紹介（LHRにて）
- ・進路の説明を受けて感想（LHRにて）
- ・七夕の願い事（LHRにて）
- ・6月のありがとう・7月の目標（課題）
- ・修学旅行の英語感想（英語コミュニケーション）

などの「はがき新聞」を作成していた。一つの学年で3年間「はがき新聞」の実践を継続することで、様々な表現を用いた「はがき新聞」の感想が作成されることとなった。

【実践データ】

【対象】
2020年入学生3年間
全5クラス201名
2023年入学生3年間
全5クラス201名

【時数】
LHR・課題等
1時間

【使用サイズ】
はがきサイズ

図3 行事感想での活用



2.2 SDGs レポートの作成

近年、生活の場面でよく見られるSDGsについて、その内容を理解すると共に、個人も世界と繋がっているということを意識した行動を生徒に促すため、SDGsの全体学習の後、生徒が各自でSDGsに関する課題を設定し、A5用紙の「はがき新聞」を作成した（図4）。作品は廊下に掲示することで、生徒間の共有および相互評価をした。クラスによっては、掲示された「はがき新聞」にコメントを記した透明付箋を貼り合うなど、評価方法の工夫も見られた。

【実践データ】

【対象】
2020年入学生1年次
全5クラス198名

【時数】
総合的な探究の時間
計4時間

【使用サイズ】
A5サイズ



図4 SDGs 学習での活用

2.3 18歳成人レポートの作成

2020年入学生は、成年年齢が18歳に引き下げられる対象となる最初の学年であったため、総合的な探究の時間を活用して「18歳成人」の理解を深める目的で、5名の外部講師（弁護士・税理士・司法書士）がクラス単位で5つの内容の人権講座を実施した。以後クラスをローテーションして計5回、同内容の講座を実施することで、すべての講座について生徒がクラス単位で学習した。その後、生徒は人権に関するテーマを一つ決めて、その内容を「はがき新聞」にまとめ、学年全体で共有した（図5）。

- ※5つの講座の内容は、
①少年事件、少年犯罪【弁護士】
②税金・投資・保険等、社会生活にまつわるおカネの話【税理士】
③契約上のトラブル事例について【司法書士】
④インターネット・SNSにまつわる諸問題と近時の裁判例について【司法書士】
⑤就職・労働に関する基礎知識【司法書士】

【実践データ】

【対象】
2020年入学生3年次
全5クラス194名

【時数】
総合的な探究の時間
計8時間

【使用サイズ】
A5サイズ



図5 18歳成人レポートでの活用

2.4 「やさしい日本語」新聞書き換え講座

生徒が新聞記事を「やさしい日本語」を用いて「はがき新聞」にまとめ直す（図6）ことにより、母語である日本語についての理解を深めるとともに、多文化共生社会における情報伝達手段としての文章表現について考えた。生徒は

- ・どのような文章にすれば、読んだ人に伝えた内容がよりよく伝わるか
- ・伝えたい内容の要点をどのようにすればまとめられるか
- ・興味関心が高まる紙面レイアウトにするにはどうすればよいか

等を踏まえながら、話し合いやICTの活用により、興味を持って書き換えに取り組んだ。

【実践データ】

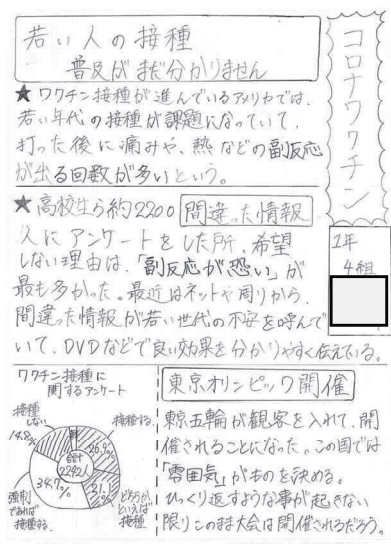
【対象】

コミュニケーション類型1年次
2021年入学生30名
2022年入学生30名
2023年入学生29名
2024年入学生28名

【時数】

コミュニケーション基礎
計5時間

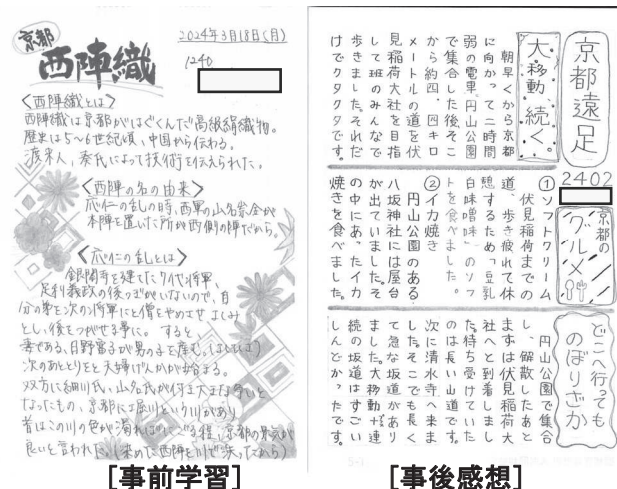
図6 新聞記事の書き換え例



2.5 校外学習の事前事後での活用

GIGAスクール構想により進んだ教育のデジタル化やSNSの発展の中、はがきを書いて実際に投函するといった旧来の文化は今後、教育の過程における体験により守られる重要な要素になると筆者は考えた。そこで今回、本校の2年生が実施する京都遠足を題材に、高校生に「はがきを書いて投函する」経験を持たせると同時に、事前学習および事後の振り返りにおける「はがき新聞」の活用（図7）、学年通信における特集記事の掲載により、研修先である京都への興味・関心・探究心を深めると共に自己表現力を高める試みを行った。

本実践を行った学年は、入学時から繰り返し「はがき新聞」の作成を行っているため、見出しの付け方や図・イラストの入れ方など、生徒の表現力が高まっている。しかし、京都調べ学習においては情報の出所や引用先を明らかにしていない作品も多くあり、これらを明記に対する指導の必要性を感じた。また図8に示すように、はがきを出す習慣のない生徒への指導の要点（敬称の付け方、必着の意味など）が明らかとなった。これら以前は生活の中で得られた知識についても、学習の機会を持つ必要があると考える。



【事前学習】

【事後感想】

【実践データ】

【対象】2023年入学生2年次・3年次 全5クラス189名
【時数】家庭学習とLHR 計2時間
【使用サイズ】はがきサイズ

図7 行事感想「はがき新聞」

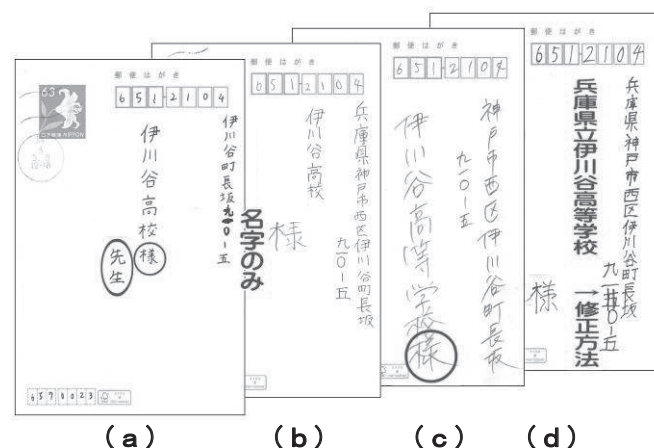


図8 指導を要する表書きの例

2.6 オープンキャンパスの生徒間共有

2年次の夏季休業前に進路別ガイダンスを実施し、生徒はそれを受けて夏季休業中に大学・

専門学校等のオープンキャンパスに参加し、内容を生徒間で共有することを目的に、報告書を「はがき新聞」にて作成する課題を課した。結果、生徒間で共有できるレベルの提出作品が少なく、廊下に掲示して生徒が互いに内容を共有するまでには至らなかったが、提出作品の中には「他者が見る」ことを念頭に分かりやすくまとめられたものも多数あり、生徒の進路に対する意識の違いを知る例ともなった（図9）。

【実践データ】

【対象】
2023年入学生2年次
全5クラス198名

【時数】
夏季休業中課題

【使用サイズ】
A5サイズ

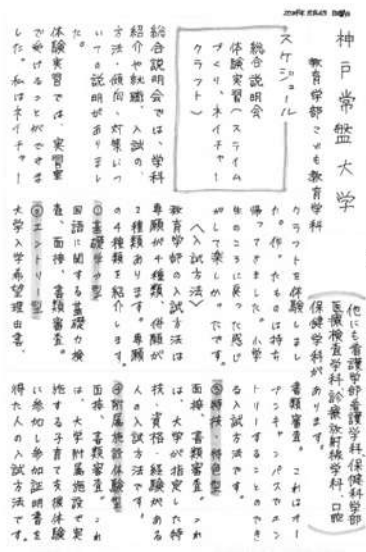


図9 行事感想「はがき新聞」

3 まとめ

「はがき新聞」の活用は、高校においてもまとめる能力や表現力の学習に活用できることが実践の過程およびその成果物から示された。「はがき新聞」の大きな特徴である「読み手を意識」した作成が、

- ・何を伝えたいか
- ・どうしたらよく伝わるか

を常に考えながらの作成に繋がったものと考ええる。また、上記のことを行うために、生徒は紙面に表す内容を事前に頭の中で推敲し、他者の表現法も取り入れることで、「はがき新聞」の質が向上していく過程を見て取ることができた。

高校における「はがき新聞」の活用は、書き方等の説明を最低限に留めることが、生徒の自由な発想を促し、様々な様式の作品作成に繋がったものと考ええる。さらに、作品は廊下に掲示することで簡単に生徒間共有することができる

ため、他者に見られるという意識が作品の向上にも寄与したものとする。

日常的な「はがき新聞」の活用は、生徒だけでなく教員の「はがき新聞」に対する活用の関値を下げることに繋がった。「はがき新聞」の予備用紙を多数保管し、教員が自由に活用できるようにしたことで、教員が様々な場面で独自の使い方を行うようになった。

体験するという面においては、「はがき新聞」の活用から実際にはがきを書いて投函するという経験までを生徒に行わせることができた。また本文中では触れていないが、活用するはがき（63円の官製はがき）について、投函の実践時に郵便料金が85円に変更されていたことから、生徒は22円切手を貼るという経験も得ることができた。SNSでのコミュニケーションが中心となった現在、切手の貼り方も「日々の生活の中で学ぶ」から「教育活動の一環として教える」必要があることが、生徒の切手の貼り方を通して筆者は考えた。

最後に、「はがき新聞」の活用は、日本語教育や多文化共生の分野でも活用されると筆者は考える。その活用法として考えられるのは、

- ・「はがき新聞」の作成に「やさしい日本語」を用い、外国人との交流を図る。
- ・日本語を学習する外国人が、「はがき新聞」を作成することで、日本語の学習とともに、日本独特の縦書き横書きが混在する紙面文化を学ぶ
- ・日本の生徒が多文化共生を意識しながら英語で「はがき新聞」を作成する。

などである。「はがき新聞」は、NIEの3要素「新聞を活用する」「新聞をつくる」「新聞の機能を知る」のうち、「新聞をつくる」に該当するが、当然のことながら「新聞の機能を知る」にも繋がる大切なNIE活用実践である。

探究活動に向けた新聞活用

～多角的俯瞰的視点を得るために～

兵庫県立有馬高等学校 校長 小川 秀雄
教諭 宮田 和昌

1 はじめに

本校は三田市の中心部に位置する緑豊かな学校であり、県下で4番目に歴史と伝統を有している。全日制の「人と自然科」と「総合学科」及び定時制を配置し、さまざまな進路目標を持つ生徒に向けて幅広い教育を行っている。

2023年度NIE実践指定校になり、3年目になる。これまで「総合的な探究の時間」である「ARIMA探究Ⅰ」において、情報収集を行うなどして主に活用してきた。また、「私の推し記事コンクール」や「いっしょに読もう！新聞コンクール」にも多数の生徒が作品を提出し、優秀賞を受賞した生徒もいた。2025年度も1年次「産業社会と人間」の授業の中でも新聞の活用について取り組んだ。（詳細後述）

2 新聞配布の方法

下表のように、新聞は8月を除く毎月、2～3紙ずつ提供していただいた。6紙を年度内で4回配当できるよう組み合わせを考えた。

月 新聞	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2
朝日		○		○	○				○	
毎日	○		○			○		○		
読売		○	○		○		○			
日経			○		○		○			○
産経		○				○		○		○
神戸	○			○			○		○	

それらを、総合学科2年次の5クラスに順番に配布する形式をとった。職員室前のクラ

ス配布ボックスに入れられたものを日直やクラス担任が教室に持っていき、所定の箱に入れて生徒が自由に閲覧できるようにした。箱の中にいっぱいになった新聞は、職員室前および閲覧場所で保管し、バックナンバーとして全校生徒が自由に閲覧できるようにした。



3 一年間の取り組みについて

(1) 「ARIMA探究Ⅰ」

探究活動の原点である「リサーチクエスチョン」、すなわち問いを立てるところから1年間の学習はスタートした。各クラスに置かれた新聞の中から生徒はそれぞれ気になったキーワードを抜き出し、それをもとに問いを立てていった。新聞を普段から読む生徒は非常に少ないが、教室に設置することで身近なものに感じる事ができたようである。



なお、「ARIMA 探究 I」では探究への導入として「わたしの推し記事コンテスト」の参加を課題として出し、その際に新聞を活用させた。コンテスト出品後、問いに向けて探究活動をしていく際にも、新聞を利用することを促すためであり、生徒は身近な内容から国際的諸課題に至るまで、たくさんの観点から記事を取り上げていたことが印象的であった。

また、夏課題として「第 16 回 いっしょに読もう！新聞コンクール」への参加も募った。春の「推し記事コンテスト」以降、新聞への親しみ方、読み取り方などの傾向を俯瞰的にくみ取り、多角的視点から自分の意見を組み立てられるかなどの変化を、生徒と教員双方が把握できる機会となった。インターネットでの情報収集が主になるのは時代の流れからやむを得ない部分もあるが、その情報を鵜呑みにするのではなく、別のサイトや新聞、本など複数の情報源から真実、根拠を探し出すように指導した。

(2) 「産業社会と人間」

① 記者派遣事業



2026 年 2 月 6 日(金)の 5、6 限に、読売新聞三田支局の渡部哲也支局長に來校いただき「その情報、信じられますか？」の題で 1 年生約 200 人に講演していただいた。

渡部支局長は生成 AI（人工知能）で作成された動画を生徒たちに見せた後、「これは AI と分かって見ているが、示されていないからどうか」と投げかけた。また、SNS では

真偽不明の情報も流れ、自分の興味のある意見だけが集まりやすいという特徴を指摘した。

「見たまま聞いたままを鵜呑みにするのではなく、多角的俯瞰的に情報を精査したうえで意見を立て、発信する。その際、新聞は有用なツールである」ことをお話しいただいた。

また、同日の新聞から集めた見出しを並べ、生徒たちに掲載されたページを探してもらい、「政治や経済、海外、スポーツなど多様なページがある。興味があるものだけでなく、様々な情報に触れられる」ということが伝えられた。合わせて『正しい情報を読み解く』ことが大切な時である」という点が強調された。

新聞の特徴として①一覧性、②網羅性、③信頼性、④保存性の 4 点を挙げており、SNS での情報収集や発信が盛んな現代においても、これらの点において新聞の優位性は揺るがないだろうとのことであった。

<講義を聞いた生徒の感想>

- ・ AI による偽情報の危険性を知り、ネットの情報をすぐに信じず、発信元や他の意見を確認して判断する力が大切だと感じた。
- ・ 発信元の大切さと、他のメディアと比較することが大切だなと思った。
- ・ 現代は情報量が多いため、特に情報の真偽については自分自身が試されることになるなと思った。

(3) 新聞コンクールへの応募

「わたしの推し記事コンクール」

2025 年 3 月～4 月の春休みに、総合学科の新 2・3 年生全員が兵庫県 NIE 推進協議会主催の第 3 回「わたしの推し記事コンクール」に、夏には「第 16 回 いっしょに読もう！新聞コンクール」に応募した。多角的な視点から取り上げられた応募作品から、新聞から得られる情報の深さを感じられた生徒は多かったのではないと思われる。

4 成果と今後の課題

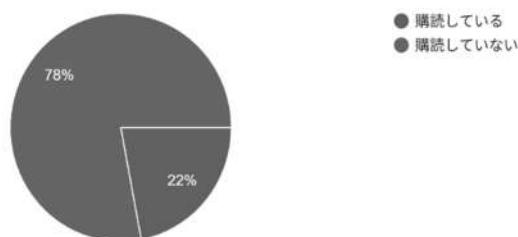
(1) アンケート結果と分析

(1)-1 アンケート結果より

アンケートより、①生徒と新聞との関わり、②新聞に触れたことで生徒の意識が変化したかの2点に特化して分析した。

(1)-1-1 新聞購読と閲覧の現状について

グラフ1 自宅での購読率

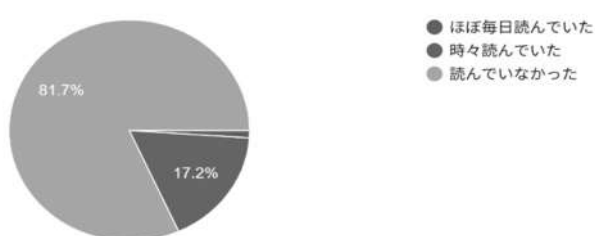


グラフ2 購読家庭生徒の新聞閲覧状況



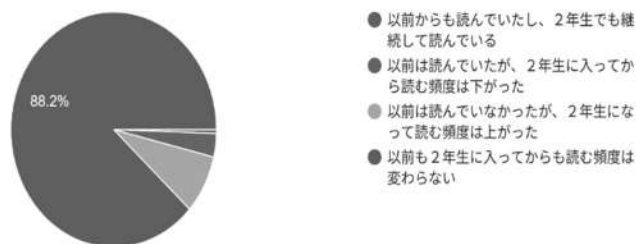
グラフ1の示す通り、自宅での購読率は、22%が「購読している」と回答した。また、グラフ2が示すように、自宅で購読している生徒のうち、約半数（48.9%）は「読まない」と回答しており、日常的に読む習慣がある生徒は限られている様子が見える。

(1)-1-2 NIE活動以前の新聞購読頻度



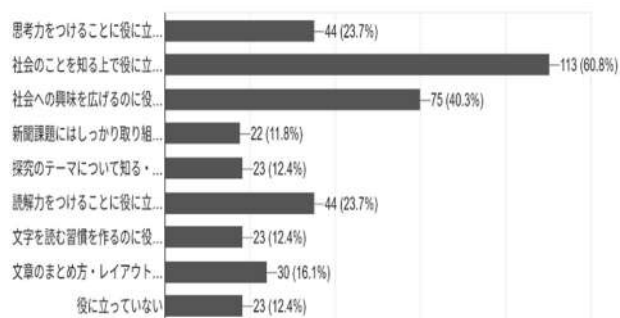
2年生で新聞課題が出る前は、81.7%の生徒が新聞を「読んでいなかった」と回答していることから、新聞への意識が必ずしも高いといえなかった現状が見て取れる。

(1)-1-3 探究を通じての新聞購読への変化



探究活動を通じても、88.2%の生徒は「以前も2年生に入ってから読む頻度は変わらない」と回答している。「課題があったから新聞を読んでみた」という外発的動機付けの要素が大きかったということが分かる。

(1)-2 新聞を読むことの有用性



新聞を読む活動が役に立ったと感じる点については、以下の回答が多く見られた。

1. 社会のことを知る上で役に立った:

60.8% (113名)

2. 社会への興味を広げるのに役に立った:

40.3% (75名)

3. 思考力をつける / 読解力をつける:

各23.7% (44名)

「社会へのことを知る上で役立つ」、「社会への興味を広げるのに役立つ」と回答する生徒が多く、社会問題についての新しい情報などに触れられ、問題への解決や見方など、様々な意見があることが発見だったように感じられる。思考力・読解力については、生徒の日常ではあまり使うことのない表現や用語があり、理解のために調べることでプレゼンテーションに役立った生徒もいると推測される。

多くの生徒が社会情報の習得において一定のメリットを感じていることが窺える。

(2) 分析

(2)-1 探究テーマとの切り離し

「推し記事」課題のトピック選定において、自分の進路や探究テーマを「考えなかった」生徒が 45.7%と最多であった。また、手に取った新聞から即決している生徒が6割を占め、記事選びも多角的視点で選ぶのではなく、新聞の読み比べによる有用性が思ったほど浸透していない傾向も見取れる。

探究活動を進めるにあたり、以下の方法で新聞を活用することで両者のリンクを深められるのではないかと考える。

・「記事の背後にある構造」を読み解く活動

① 新聞記事を読み、背景要因（経済・文化・制度）の因果関係を考える。

② 「問いの再設計」

記事を読み、「事実→解釈→主張」を分けて整理し、自分の問いを再構築する。

・複数紙比較でバイアスを学ぶ

同じニュースでも論調が違うことを体験する。多角的、俯瞰的に事象を把握できる資質を育成できるのではないかと。

(2)-2 「社会への窓口」としての有用性

習慣化は難しい一方、アンケート結果(1)-2にあるように、活動そのものについてはポジティブな評価が見られる。「習慣化や自発的な深い探究には至っていないものの、課題を通じて社会情勢に触れることには一定の意義を感じている」といえる。

(3) 課題

2024年度、本校では森澤教諭による NIE 実践授業を実施した。授業では新聞の読解や活動への活用の際に、以下の観点に注目し、指導していた。

- ・主張（何を一番訴えたいのか）
- ・根拠（根拠、データは示されているか）
- ・トーン（肯定的、批判的、中立的など）
- ・自分の意見（どちらが自分の意見に近いのか）

これらの視点は、新聞を教材として活用しつつ、他メディアとも関連付け、多角的に物事を捉える姿勢を育てることを意図していた。

しかし、2025年度のアンケート結果を振り返ると、一つの新聞の主張のみに基づいて自身の意見を構築する生徒が見られるなど、「新聞活用を通じて多面的思考を促し探究活動へつなげる」という意図が十分に伝わっていなかった可能性が窺える。

2026年度から始まる「ARIMA 探究 I」でのリサーチクエスションの設定や情報収集においても、「多角的かつ俯瞰的に物事を見る姿勢をもとに論を進めていくこと」は重要である。

今回のアンケート結果は、2024年度の実践で得られた重要な教訓をフィードバックし、2026年度以降の探究活動では、これらの視点を学校全体で共有し、「継続的な学びの伝統」として確立する必要性をあらためて考えさせるものであった。

(4) 今後の活動への方向性を考える

(3)の課題を改善するために、今後取り組めば…と思われる活動についても考えてみた。

①「推し記事」ポスターセッション

自分が選んだベスト記事と、それに対する自分の意見をまとめたものを教室に掲示し、プレゼンテーションをする。また付箋でコメントし合う「記事総選挙」を実施してみるのも一法ではなかろうか。様々な観点の記事を読み意見を述べることにより、多様な考えを得るきっかけになるのではないと思われる。

②新聞意見欄または「記者への質問」投稿

単に読むだけでなく、「この記事の続きが知りたい」「なぜこの写真を使ったのか」など、新聞記者への質問を考えさせる活動を加えたり、新聞にある意見欄に、自らの社会への思いや意見を投稿したりすることで社会を知り、多様な観点から物事を見ることの重要性を知ることができるのではないだろうか。

新聞を活用して社会の諸問題について考える

兵庫県立西宮高等学校 校長 谷口 聡
教諭 三木 美穂

1 実践の概要

(1) はじめに

本校は、美しく連なる六甲の山並みを背に丸くそびえる甲山を望む閑静な文教地区に所在し、教育環境に大変恵まれている。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置し、全校生徒数約 1,000 名の大規模校である。長い伝統で培ってきた教育目標を継承しつつ、スクールポリシーに基づいて、教育内容の刷新に努めている。

(2) 研究テーマ

N I E 推進事業としての取り組みは2020年度より継続しており、「新聞を活用することで、社会問題への関心を高め、記事や社説などの論説をもとに意見交換や発表等の活動を行うことで批判的思考力の育成を図る」ことを研究テーマとしている。新聞記事にある社会課題がSDGsのどの目標と関連しているかを発見し、新聞ポスターにまとめて発表する過程で、社会の諸問題について多様な側面から考える学習を行っている。

(3) 学習計画

本校の「総合的な探究の時間」では、スクールポリシーの一つである「多様な視点から物事を捉え、新たな課題を発見し、解決に向けて主体的に行動できる生徒を育成する」ことを実践した授業を展開している。

新聞を活用した取り組みは、1年次の「総

合的な探究の時間」の前期「社会を知る」というテーマの中で「新聞ポスター」の時間に設定している。新聞ポスターの作成を通して社会の諸問題について考える時間としている。

<授業のねらい>

- ◆新聞記事の中から、自分が興味・関心を持ったテーマの記事を探し出す目を養う。
- ◆記事のいろいろなつながりや課題の広がりを見つける。
- ◆新聞記事を読解し、要旨をまとめ、他者に発信する力を身につける。
- ◆他者の発表から新たな考え方や視点を知る。その際、World Café 形式を取り入れ、小グループで席替えを繰り返しながら話し合うことで、多様な価値観を共有する。

<授業展開>

日付	テーマ	内容
5/14	社会を知る1	SDGsについて考える
5/21	社会を知る2	新聞読み方講座(講演)
6/4	社会を知る3	新聞ポスター①導入
6/11	社会を知る4	新聞ポスター②テーマ決め
6/25	社会を知る5	企業のSDGsへの取り組み(講演)
7/16	社会を知る6	新聞ポスター③作成
9/10	社会を知る7	新聞ポスター④発表

2 新聞の置き場と整理

新聞を活用する授業は6月からの実施となるため、4月、5月の2か月間、新聞6社から朝刊夕刊それぞれ2部ずつ配達して

もらい、「総合的な探究の時間」で使う資料が置かれている小教室にまとめて保管した。

新聞ポスターの授業が始まる前に、生徒一人当たり2部いきわたるよう均等かつランダムにクラスごとに分配し、授業が始まってからは分配した新聞を各教室に保管して、生徒はいつでも手に取ることができるようにした。

3 実践の内容

(1)「新聞ポスター」の作成

SDGsの17分野の社会課題を学び、気になる課題を新聞記事から探し、社会の動きを確認した後、新聞を切り抜いて新聞ポスターを個人で制作する。ポスターには記事を選んだ理由、記事から考えたこと、意見文の3つの観点を記入する。出来上がったポスターは、班ごとに発表と意見交換を行い、班のメンバーを3回替えることでより多くのメンバーと意見交換をする。

社会に目を向けることが少ない高校生が意識して新聞を読む経験となり、1年次後期から行う地域活性化の授業や2年次より始まる「課題研究」の研究テーマを見つける活動につながっている。

【SDGsについて考える】

新聞ポスター作成に入る前にSDGsについての考えを理解し、自分の解決すべき目標の優先順位を考え、意見を共有し、一つにまとめる練習をする。



【新聞読み方講座】(新聞記者派遣授業)

記者派遣事業で神戸新聞社 NIE・NIB 推進部三好正文シニアアドバイザーにお越しいただき、新聞の役割、新聞紙面の構成、新聞の読み方や活用方法についてお話しいただいた。



【新聞ポスター】

①新聞ポスター導入

- ・新聞を一人2紙以上配付し、新聞から得られる情報を分類、分析する。新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に触れる。
- ・記事の中から自分が興味を持ったものを選び、「SDGs」17分野のどれにあてはまるか確認する。



②新聞ポスターテーマ決め

- ・「SDGs」の17分野から、興味関心あるテーマの新聞記事を選んで切り取る。
- ・新聞ポスターのタイトルを決定する。
(例:「コロナで動く経済新聞」)

- ・ A 3 × 2 枚のレイアウトを考える。意見文やイラスト等も含めてレイアウトを考える。



③新聞ポスター作成

- ・ 意見文を下書きする。
- ・ 意見文では、切り取った新聞記事に対する考えを述べる。そして、社会で起きていることは地域でも起きていると考え、地域における問題提起に繋げる。
- ・ 意見文を清書し、記事とともにポスターに貼り付ける。
- ・ 次時に発表する内容を考える。発表の留意点は、意見文を読むのではなく、自分の言葉でプレゼンテーションをすることである。

- 1 なぜこのテーマを選んだか。
- 2 どのような記事を集めたか。
- 3 それはSDGsのどの分野か。
- 4 自分はどのように考えたか。
- 5 今後、研究したいことは何か。



④新聞ポスター発表

1人2分程度で、班内で発表を行い、意見を交換する。また班のメンバーを変え、3回発表をすることで、より多くの意見交換の場を確保する。



【企業のSDGsへの取り組み（講演）】



企業が社会課題に対してどのように取り組んでいるか、SDGsの観点でお話しいただいた。

（2）他教科、科目での取り組み

新聞ポスターでの経験は、その後の授業でも活かされている。特に公共や政治経済

といった公民科の授業内容は、現代社会とのつながりが意識しやすいためその効果が顕著である。例えば新聞ポスター作成の際にジェンダー平等や性的マイノリティなど社会的弱者の人権について調べた生徒の場合、「基本的人権の尊重」の分野で登場する平等権や新しい人権などの項目に対して学習意欲の向上が見られたり、内容理解がより深まったりするなどの効果が見られる。

また、新聞ポスター作成のときに、新聞記事を探し各自でテーマを設定する作業は、自分自身が持つ興味関心の新たな発見につながることもある。神戸新聞社主催の「新聞感想文コンクール」で、自分の関心ある新聞記事を選ぶ際、新聞ポスター作成のときに関心を持っていた記事内容と親和性の高い記事を選んだという生徒もいた。ちなみに上記の生徒は、障がい者に関する記事を取り上げ、感想文を書いていた。



さらには、新聞記事を探す作業は、新聞を読むことへのハードルを下げ、情報源としての新聞の有意性を知る契機ともなった。

2年次の後期から取り組む「課題研究」でも、話題や根拠などを新聞に求めようとする姿勢が見られるようになった。紙面だけでなく、新聞各社のデジタルデータなども活用することで、考察の幅が広がったケースもある。

以上のような新聞を活用する効果は、決して高校での取り組みだけにとどまらず、大学等の進学後も必要なリテラシーを生徒たちに身につけてもらうことにもつながる。

4 成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力や常識的に物事を考える力を持っており、ほとんどの生徒が熱心に新聞を読み込み、社会的課題について真剣に考えようとしている。新聞を手にした生徒たちは、気になる記事に対して意見を交換したり、新聞を開かなければ気づかなかった出来事や考えに感嘆したり、教室内で視野の広がりを感じている。社会を知るために必要となる情報を得る際、高い信頼性、深い背景分析と解説、ジャンルの多様性、地域情報の充実性といった、多くの利点を備えた新聞の有用性を多くの生徒が体験できている。

今後も新聞ポスター作成を出発点として、社会の現状を把握し、課題を発見し、自ら解決していく力をつけることを目標に社会と身の回りの出来事に目を向けさせたいと考えている。また、探究活動に活かせるよう新聞を活用する機会をさらに増やし、活動を深化していくとともに、より多くの教科で活用、実践していけるよう働きかけたい。そのためにも全国紙だけでなく、地方紙なども校内で閲覧できるよう整備をすすめて、生徒が気軽に新聞に触れることができるよう工夫を重ねたい。

新聞を共通言語とする学習共同体の形成

～ NIE を起点とした対話と探 Cue の設計～

兵庫県立神戸甲北高等学校 校長 檀 千種
教諭 久保 淳平

1 はじめに

本校は「自主 協調 創造」の理念のもと、確かな学力と主体的な課題解決能力、豊かな人間性を備え、グローバル社会で主体的・創造的に未来を切り拓き、活躍できる人材を育てることをミッションとして、教育活動を展開している。

新聞を教育に活用することは、そのための基盤的实践であり、思考力・判断力・表現力に加え、メディアリテラシー・対話力・公共性の涵養を目的に据えて展開している。

2025 年度は、発展的統合に伴い、県立北神戸総合高等学校と同一校地で学校生活を送る体制の下、

- ・北神戸総合高校 1 年次
(新しい学習文化の共通基盤づくり)
- ・神戸甲北高校 2・3 年次
(既存実践の深化と横断的展開)

の二層構造で NIE を計画的に実施した。

本稿では、新聞を共通言語かつ共通媒体と位置づけた高等学校 NIE の実装を通して、1 年次（基盤形成）と 2・3 年次（深化・展開）からなる二層構造下で、対話・批判的読解・再表現の作法を制度化し、探究の起点やきっかけ（Cue）として設計した教育実践の効果と課題を報告する。

2 実践の背景とねらい

本校が位置する神戸市北区は、急激な高齢化が進んでいる。「神戸市町丁別の統計 住民基本台帳に基づく人口（町丁目別 年齢別）」によると、2023 年 3 月末時点において、本校近隣の高齢化率は 29%～46% に及ぶ。

町丁名	高齢化率
大脇台	29%
惣山町	46%
若葉台	36%
甲栄台	41%
山田町小部	40%
泉台	42%

▲ 本校近隣の高齢化率(2023 年 3 月末時点)

こうした状況において、地域の未来を担う若者が社会について考え、関心を持つことは、地域社会の持続可能性に直結すると考える。新聞記事を通じて社会の動向を知り、それを自身の未来や地域との関わりに結びつけることで、「課題を発見する力」「問いを立てる力」「他者と協働して思考を深める力」を育成し、キャリア形成・地域課題解決につなげる学びを設計することを目的とした。

また、現代の高校生は SNS や動画、ニュースアプリ等を通じて多量の情報に手軽に接することができる一方で、出典・文脈・相対化の視点が希薄になりやすい。新聞は、

- ① 編集というフィルターを通じた情報の整理と比較可能性
- ② 事実・意見・論説の峻別
- ③ 多角的視点の提示と紙面設計による構造化

を備えており、探究学習の「テキスト」として適性が高いと考えている。

上記を踏まえ、2025 年度は年間目標として、

- ① 全員参加型の導入・定着
 - ▶ 新聞への心理的ハードルを下げ、「読

む→話す→書く」の循環を日常化する。

② 対話的・批判的読解の深化

- ▶ 立場や価値観の差異を資源として活用し、合意形成・論点整理の技法を学ぶ。

③ 横断的展開（公民・日本語・多文化）

- ▶ 主権者教育、日本語教育、多文化理解とNIEを接続し、教科横断で学びを拡張する。

以上の3点を掲げ、実践を進めた。

3 具体的な実践内容

2025年度は、1年次（北神戸総合）における基盤形成と、2・3年次（神戸甲北）における深化・展開の二層構造でNIEを実施した。前者では「読む-話す-書く」の循環と対話の作法を制度化し、後者では主権者教育・日本語教育・多文化理解の横断的学びへと発展させた。以下に、具体的な実践内容を紹介する。

(1)1年次全員による「まわし読み新聞」の実施

1年次の入校時教育に位置付け、新聞を共通教材として協働の作法と対話の基礎を短期間で共有した。複数分野の記事束を用い、見出し・写真・リードに着目した短時間把握の後、驚き・疑問・行動提案に分けてメモ化・回覧した。他者メモを手掛かりに再読することで、個別の関心から他者視点を踏まえた読み直しへ移行した。

班ごとに発見や記事に対する疑問点を記入しながら「まわし読み新聞」を制作した。どの



▲ 全生徒によるまわし読み新聞の実施
「この記事、なんでこの視点なん？」

メモが自分の思考を変えたか、次に確かめたい事実は何かを短文で記述させるよう工夫したことで、読解速度や日本語運用に差がある生徒であっても、可視的な痕跡としてのメモを通じて議論に参加することが可能となり、相互承認の雰囲気が早期に形成された。また、全生徒が通行するフロアに新設した閲覧コーナーの利用が当該活動以降に増加し、登校直後や休憩時間に記事へ触れる機会が拡大したことが観察された。



▲ 新設された閲覧コーナーでの様子

(2)1年次全員による「押し記事コンクール」の実施

1年次の学校設定科目「産業社会と人間」において、生徒が新聞記事の中から自分が最も関心をもった記事を1本選び、その理由を文章でまとめて発表する「押し記事コンクール」を実施した。



▲ 自分の押し記事を探す生徒の様子

記事の選定理由を言語化し、仲間と共有することで、視点の多様性に気づき、社会の出来事と自己との接点を再確認する機会にすることができた。生徒相互のコメントを通じて、他者の読み取りに触れる対話的な学びも展開され、協働的な学びの素地が育まれた。根拠の明確さ、自己との接続の妥当性、問いの具体性と

いった達成度について所定の観点から評価を行った。

(3)1年次全員による「いっしょに読もう新聞コンクール」の実施

1年次の「産業社会と人間」において、同一テキストの多面的読解を経験させることを目的として「いっしょに読もう新聞コンクール」を実施した。

読んだ記事に対する感想を「事実→考察→自己の立場」という構成でまとめることを意識させた。生徒は単なる感想ではなく、社会との関係を踏まえて自らの意見を論理的に表現する力を求められ、批判的思考力と文章構成力の両方を鍛える貴重な機会となった。

友人とのコミュニケーションによって、同一の記事から異なる結論が導かれ得ることを体験的に理解することができた。これにより、反論の論拠の所在を明らかにし、提案の実現可能性を具体化する姿勢が涵養された。

(4)「記者になりきって、新聞にツッコミ」

1年次の総合的な探究で、記事を分解→検討し「ツッコミ新聞」を制作した。見出し差し替え・引用再配置・別立場での再執筆まで行う班もあり、「疑う-調べる-言い換える」の循環が形成された。得られた問いは第30回NIE全国大会の公開授業で共有し、探究活動へ接続した。

(5)NIE 全国大会公開授業の実施

第30回NIE全国大会神戸大会において、1年次の公開授業「新聞に“ツッコミ”を！～デジタル世代の『読む・問う・つなぐ』力～」を実施した。

探究のプロセスと新聞づくり・発信活動との類似性に着目し、探究的な学びの準備段階として位置づけた。OECDが提唱する「AARサイクル」に照らしても、有効な学習経験を提供していると考えている。自ら見通しを持った

問いを立て、他者をつなぎ、行動を起こす「つなぐ」態度を涵養できたと考えている。



▲ NIE 全国大会公開授業の様子

(6)3年次「神戸の研究」における記者講演

学校設定科目「神戸の研究」は、「地域から学び 地域で学び 地域と学ぶ」を基本テーマに、地域のまちづくりに携わる方々の協力を得て、実際の地域活性化に挑戦する授業である。本授業の一環として、2025年11月21日(金)、共同通信社 神戸支局 支局長 大熊慶洋氏をお迎えし、「選挙報道とメディア＝参院選、神戸市長選などを通して」と題する記者講演を実施した。2025年10月の神戸市長選挙を主たる題材に、まちづくりの中核である選挙と、それを取り巻くメディアの役割・報じ方を、具体事例と取材実務に即して学んだ。

有権者への判断材料の提示、情勢・結果の迅速な伝達の二点を中心として、ご講演をいただいた。



▲ 「神戸の研究」の授業の様子

成果として、神戸市の具体的課題(空港の国際化、人口減、タワーマンション規制、部活動の地域移行〔コベカツ〕等)を新聞情報で根拠付けて語る力、立場の異なる住民・主体の論点を要約・接続して合意案の素地を示す力が向

上したと考えている。生徒が地域課題を自分事として捉え、提案づくりや対話の場へと展開しようとする力を高めることができた。

(7)外国人にかかわる特別枠選抜による入学生による「押し記事コンクール」の実施

外国人にかかわる特別枠選抜による入学生を対象として、日本語における要約・意見表明・再表現の基礎的能力を、新聞記事を教材として育成することを目的に実施した。対象の言語背景に応じて語彙支援資料を配布し、読みの負荷を段階的に調整した。

生徒は各自で記事の一つ選定し、日本語要約、選定理由、自己の経験や自国・将来の関連、当事者・行政・市民等の立場差に基づく受け止めの相違を整理した。90秒の口頭発表後は質疑応答を行い、質問に対して言い換え・具体例を用いた再表現を行った。

比較文化の観点で得られた知見を北神戸総合高校「ダイバーシティ&インクルージョン系列」に接続させたい。



▲ 押し記事を探す外国人生徒の様子

4 2025年度の成果

2025年度のNIE実践は、新聞を共通の学習媒体として機能させることに一定の成果を得た。1年次段階で形成した「読む-話す-書く」の循環は、総合的な探究の時間や学校設定科目における学習に滑らかに接続し、建設的な懷疑と根拠志向が学年を問わず共有される文化の醸成につながる。特に、総合的な探究の時間やNIE全国大会における「ツッコミ」イベ

ントは、批判的読解にとどまらず代替案の提示へ踏み込む実践として、出典の明示や引用の正確性に対する意識を高めた。記者講演を核とする上級年次の取組は、主権者教育の観点から、報道の役割と限界を具体的に捉えさせ、公共的な言説に参加するための基礎を強化した。以上の成果は、年度末の集計により定量的指標として整理していきたい。

5 課題と今後の展望

2025年度の実践においては、授業内での学習循環は確立したものの、家庭や地域を含む授業外での継続性には更なる工夫の余地がある。今後は、週末に見出しを持ち寄る家庭連携の仕組みや、学校内に質問ポストを設置して記事への疑問を継続的に収集し、授業へ還流させる体制を整えたい。また、紙面と電子版を組み合わせたハイブリッドな学習環境を整備し、クリッピング、比較、引用に至る一連の学習過程を効率化する。

6 おわりに

2025年度のNIE実践は、学校環境の変化という条件の下にあっても、新聞を学びの共通言語として機能させ、対話と探究の文化を可視化することに資した。生徒は、社会の出来事を読み解き、問いを立て、他者と協働して考えを洗練させ、公共的な観点から自己の言葉で表現する経験を重ねた。これらの経験は、不確実性の高い時代において社会の一員として責任をもって行動するための基礎となる。今後も、新聞を通じた学びの可能性を広げ、生徒一人ひとりが「探究時代」を生き抜く力を育みながら、学びを地域社会や自らのキャリアへとつなげていく環境を構築していく。

本実践を支えてくださった新聞社、地域の皆様、保護者の皆様に深く感謝申し上げたい。また、新聞を活用した教育の意義を理解し、主体的に取り組んだ生徒たちにも、心から敬意を表したい。

新聞・地図・数字・生成 AI を活用して、NIE の未来を開く

兵庫県立網干高等学校（全日制）

校長

岩田 一雄

教諭

佐々木 浩二

1 はじめに(本校の現状と課題)

本校は、全日制普通科の高校であり、2・3年生8クラス、約300名の生徒が学んでいる。県内唯一の通信制課程と全日制課程を併設する高校である。

令和7年度（2025年度）より、姫路南、家島と発展的統合により「姫路海稜高等学校」が姫路南高校の校地に開校し、**2027年3月に全日制課程が閉課程し、通信制課程のみが存続する。**

生徒の中には、文字、地図、数字を読み解く能力が不足している生徒が見受けられ、情報の「受け手」としての分析能力向上が急務である。

この課題を克服するために、知識をインプットするだけでなく、知識を活用して定期的に週末課題、春・夏・冬課題（アウトプット）、授業ノートの添削を通じた習慣化するための取り組みを継続している。**継続的な読解の習慣化を図り、独自の「3軸学習法・3軸思考法」を用いてNIE実践を継続している。**

3軸学習法・3軸思考法とは、空間軸・因果軸・時間軸・立場軸の変化をさせることで学習法・思考法を育成する。

空間軸・・・「兵庫・日本・世界」というスケールで視野を広げる。

因果軸・・・「原因・出来事・結果」という因果関係をたどる。

時間軸・・・「過去・現在・未来」の比較からトレンドを把握する。

視点移動・・・「鳥の目(全体俯瞰)・虫の目(細部注視)・魚の目(時代の流れ)」による視点を変化させる。

立場軸・・・「主権者・消費者、経営者、市町村長、都道府県知事、内閣総理大臣、他国の大統領、国連事務総長などの立場」に立って考える。多様な立場で物事を捉え直す。

IF 思考・HOW 思考・・・「もしも〇〇だったら、△△になる」や「どのようにしたら〇〇ができるようになるか？」という「仮説」を立てることで考える。

2 NIE 実践で設定したゴール(目標)

NIE 実践を継続して考えていることは、情報の真偽の見極めである。ネットや生成 AI の情報には嘘が含まれる可能性があるため、フェイクニュースや詐欺を例に挙げ、複数の方法で裏付けを取ることの重要性を強調している。

多種多様な「情報」に触れながら、その時々で多くの判断・決断が的確にできるようになることが最終目標である。

3年間の一貫した方針による授業（公共・地理総合・政治経済・地理探究・総合的探究の時間）を通じて、「3軸学習法・3軸思考法」という「技術」を習得して、卒業後も生涯活用できる NIE 実践を目標にしている。

3つの軸で学習法・思考法を深めさせることで、情報を「点」から「線」、「面」で捉え、「立体」として捉える NIE 実践を行った。

3 本校の NIE 実践(2年目の取り組み)

①子ども食堂ボランティア参加



2025 年
5 月 14 日

②「地理総合」の研究授業(3月実施)

NIE 実践の肝は、授業の質である。新聞記事を扱う授業の質が悪ければ、生徒のここには届かない。授業者の授業力を学校全体で底上げするためには、研究授業の実施や教科研修会の質を上げる必要がある。

この研究授業では、過去(約100年前)の変遷を「教科書・資料集・地図帳」から学び、気候・地形という不変の制約条件を踏まえ、事前の週末課題「未来志向で都市を考える」で取り組んだ「最新技術や巨大なプロジェクト、都市開発」に関するネット情報・新聞記事・雑誌、書籍で集めた資料を活用し、研究授業を実施した。**過去の先人が、「なぜ、その場所に都市を築いたのか？」という「過去」を地図から解読し、未来の技術を実装した未来(約100年後)の都市を設計する。「過去思考」と「未来思考」の両方を用いることで、「情報」を無批判に受け取るだけでなく、「主権者・旅行者・消費者・住民」「国家権力者・都道府県知事・市町村長」の立場に分かれて、様々な立場で考える班別活動を取り入れ、「未来に、どんな都市にしたいのか？」を「持続可能な社会」の実現のためにSDGsの視点も取り入れて構想した。「知識」と生きた「知恵」の両方を、論理的思考力を通じて育成することを意図した。**

あまりにも壮大な都市計画だと生徒の興味関心が下がり、意識も離れてしまうため、「もし、自宅の前に最新の〇〇(週末課題の新聞記事)があつたら？」という、**半径1メートルの身近な出来事として積み上げていくと、都市開発が「自分事化」になる。**

都市開発を「自分事化」するために行った研究授業をきっかけに、新聞記事の中にある「半径1メートル」の範囲にある新聞記事を自分事化する習慣を継続させ、世界に通じる出来事や人・モノが他にもあることに気付かせる。

「自分事化」する発想法や思考法ができるのが、NIEの最大のメリットである。**(神戸新聞 2026年3月9日掲載)**

写真 研究授業の様子



③ 5～10分間の「NIE教科研修会」の実施

5～10分間研修会や教員相互の情報交換や共有を実施することができた。

今年度の地歴公民科の教員構成は、ベテラン2名、20代の3名の若手教員で構成されており、お互い短時間での研修会や授業見学、情報交換を相互に行った。私は取材活動やフィールドワークで得た情報を「地理歴史公民科通信」としてまとめ、生徒や若手教員と共有した。お互いの得意分野を見せ合うことによる教材研究の質が高まっていった。教師による情報発信の取り組みが相乗効果を生み出す結果になった。

④ 総合的な探究の時間(3年生)

2024年度の総合的な探究の時間での活動「地域防災と小高連携」について、8月のNIE全国大会神戸大会で生徒とともに発表した。生徒にとっては「地域防災・小高連携」をテーマにしたNIE実践を論文やレポート、スライド資料としてまとめた。

小学生と高校生が「共助」をテーマに議論をした経験を生徒が神戸大会で発表できたことは、プレゼン能力が向上し、3年生の進路意識の向上、総合型選抜などの多様な入試にも対応し、進路実現にも活かされた。

⑤ 人権研修会の企画・運営(教員研修会)

人権推進委員会のリーダーとして、新聞記事を活用した人権研修会の取り組みを実施した。

2025年度は、災害などの混乱期には、弱者へ

の人権侵害（女性や子どもへの性暴力等）が顕在化・深刻化することを書籍やレポート・新聞資料で示しながら、全国で多発する教員による生徒への人権侵害事例を紹介し、教職員一人ひとりが「立場の弱い者に何が起きているか」を教師自身の責任として考える機会を設けた。

⑥ 工場見学の企画・運営(教員研修会)

新聞記事に掲載された地元企業に依頼し、今年度は教員向けの工場見学を2回実施した。

ダイセル(姫路市)・・・液晶パネル用保護フィルム原料、自動車用エアバッグのインフレーター、タバコ用フィルター、酢酸など生産。

地歴公民科の教員だけでなく理科の教員も参加し生産現場（化学・生物・物理の生産現場）を見学できた。

日東社(姫路市)・・・地場産業・マッチ工場として、創業100年以上になるマッチ生産の老舗。かつて日本最大のマッチメーカーであったが、国内生産量は1973年の約80万マッチトンから2024年には約7千マッチトンまで激減。多角化経営（テニススクールの運営など）、異業種への展開と若手社員が中心となり、2024年8月に新ブランド「ブルーラベルマッチ」を立ち上げ高付加価値帯マッチでアロマ・癒やしをテーマにしたマッチの活用へと変化した。薄利多売の業務用から、「高付加価値商品」へシフトすることを取材できた。

授業で国際化する日本経済について説明するが、**経営者の声、従業員の方への取材から得た「生きた情報」は、授業での生徒への説明に説得力が増す効果がある。偶然にも、テレビ東京の取材を受けることにもなった。**

⑦ IF・HOW 思考で考える週末課題の実践

旅行者の視点で考える・・・「もし私が姫路から東京に旅行した場合」という仮定で、目的に応じてルート検索、訪問先を選定するプロセスを考え、新聞記事や旅行パンフレットを活用する課題を設定した。

(例) アニメ・サブカルチャーの場合・・・東京都内の町の特徴を理解した上で、娯楽が好き

なら「秋葉原」「中野」などを目的地に選ぶ。

ファッション・美容の場合・・・原宿・渋谷：若者向けのファッションやコンテンツが揃うエリアを選ぶ。**都市名・地名を暗記する対象から、「自分事化」することで、「思考の深化」を図り、学ぶ過程を体験させる。**

また、立場を変えて旅行会社で企画・営業する社員の立場に変化させると、何度も訪問している旅行者に飽きさせない企画をたてる必要がある。どのように飽きさせない企画をたてるかで、さらに深く考える必要がある。自分の立場を変えて、目的地を再考することで、計画の質が向上し、立場軸・視点軸の移動が有効になる体験をさせることができる。**教師によって「与えられた答え」でなく、「自らが導き出した答えや解法方法」は、生徒の記憶に刻まれる。**

⑧ 生成 AI と NIE 実践の進化

私自身の現在の活用状況は単なる「検索ツール」としてではなく、「思考の伴走者（共創パートナー）」として活用している。具体的には以下のような領域で活用している。

授業アイデアの具体化と構造化・・・「IF 思考」や「3軸学習法・3軸思考法」を活用して、具体的なワークシートや授業の展開案を考えている。

多角的な視点の生成に活用・・・地理教育における「視点移動」を助けるために、異なる立場（市民、統治者、国際社会など）からの意見をシミュレーションすることに利用している。

業務効率化とストック化・・・日々の実践記録や書籍化に向けたアイデアを整理し、デジタルデータとして蓄積・再構成するデータベース的な利用が可能になる。能力を100%引き出し、仕事をサポートさせる道具として考えている。

生成 AI の能力をさらに引き出し、良きパートナー（道具）として「使いこなす」ためには、以下の生成 AI リテラシーを意識することを勧める。未来を生きる生徒にとって、社会を生き抜くための最強の武器になり、生徒自身に教師自身が具体例を示しながら授業し、週末課題や長期休業中の課題設定も再考する必要がある。

4 成果と今後の課題

思考の持久力の育成・・・瞬発的な判断だけでなく、時間をかけて情報を分析する「思考の持久力」が向上した。

継続性の必要性・・・担当者が変わっても NIE の取り組みを学校全体、あるいは小中高の連携として継続していく体制づくり（研修体制の構築）が必要である。

教員の教材研究・・・教員の努力不足や研究不足が生徒の学びを阻害しないよう、常に最新のニュース（新聞資料）を人権・防災・キャリア指導の視点で分析し、**授業実践力（ティーチング・コーチング）**を高めていく必要がある。

5 多様な生徒との出会いで気付いた個別最適な教科指導を目指した NIE 実践

生徒の「認知特性」に注目した NIE 実践へと発展させる必要がある。個別最適な学びを設計するためには一人の教員だけではできない、生成 AI を活用して、情報の受け取り方が多様である生徒の学びをサポートする必要がある。

生徒の学び方（認知特性）の特徴は、**視覚・言語・聴覚の 3 つの認知特性の観点から、それぞれ得意・不得意を見つける対応**が必要がある。NIE 実践と生成 AI を掛け合わせていけば実現可能であると考えている。「地図（視覚）」「新聞・読書（言語）」「音声対話（聴覚）」をパズルのように組み合わせることで、「置いてけぼりにならない授業」が成立できるのではないかと考えている。

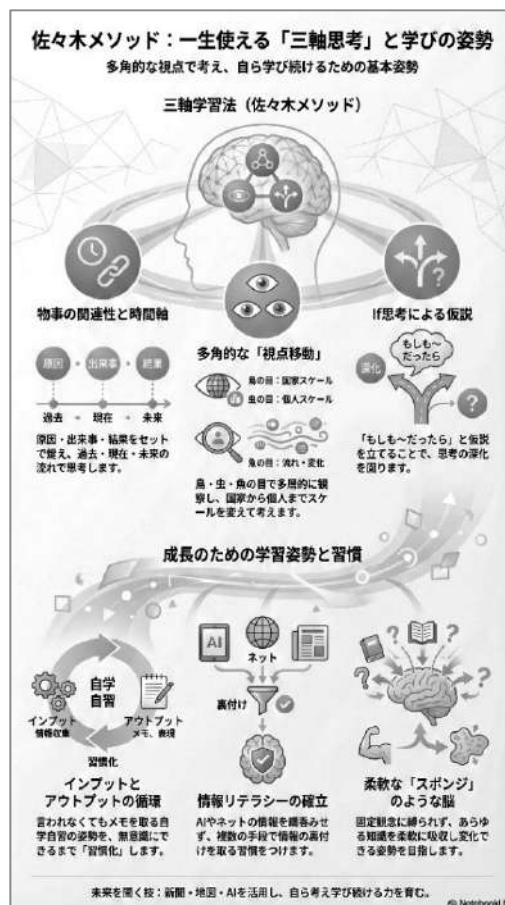
視覚優位・・・図、写真、地図の活用

聴覚優位・・・音、リズム、対話の活用

言語優位・・・文字、文章、新聞記事の活用

生徒の認知特性を活かした「情報の多重提示」、同じ内容を、異なる入り口（目・耳・手などの五感）で学ばせる NIE 実践へと進化させたい。

資料 生成 AI「グーグル ジェミニ×ノートブック LM」のグラフィック機能活用の資料



姫路

今回の授業は、地歴総合の二週で、生徒らは姫路市や姫路市、たつの市など、それぞれが手分けして、姫路市の約100年前と現在のまちの地図を比較し、まちづくりの歴史や、まちづくりの意義を学び、まちづくりについて考えた。

今回の授業は、地歴総合の二週で、生徒らは姫路市や姫路市、たつの市など、それぞれが手分けして、姫路市の約100年前と現在のまちの地図を比較し、まちづくりの歴史や、まちづくりの意義を学び、まちづくりについて考えた。

今回の授業は、地歴総合の二週で、生徒らは姫路市や姫路市、たつの市など、それぞれが手分けして、姫路市の約100年前と現在のまちの地図を比較し、まちづくりの歴史や、まちづくりの意義を学び、まちづくりについて考えた。

まちづくり、今昔の地図から考察

新聞記事なども参考
網千高2年生30人授業



昔と今の地図を見比べながら、まちづくりについて考える生徒たち一姫路市網千高2年生、網千高校

新聞で広げる視野と自ら考える力の獲得へ

兵庫県立山崎高等学校 校長 塚本 師仁
司書教諭 赤木 富美子

1 はじめに

本校は、緑豊かな宍粟市の中心部山崎町にあり、市内最多の生徒数を抱える地域の中心校である。近年は入学者が定員に満たず、学習に困難を示す生徒も増加しており、基本的な読み書きの力をつける必要性を痛感している。

実践指定校としては2年目となる。前年度は図書館教育の一環として図書館の資源である新聞を生徒の身近なものにし、意欲的に読む環境を作りたいという司書としての願いから始まった。

2025年度は探究推進部が新たに創設され、探究の過程で新聞を活用する道筋がついた。SNSからの極めて偏った情報に触れることが多い生徒が、新聞を活用することで視野を広げ、自分の興味関心を知る。その自己探究の過程に新聞は有効であると位置づけることができた。

2 実践内容

(1) 記者派遣事業

1年生 総合的な探究の時間

【目的】

地域探究を進めるにあたり、地域の方々から話を聞くうえでのインタビュー術と、得た情報のまとめ方や効果的な伝え方を学ぶ。

【講師】

兵庫県 NIE 推進協議会事務局長

網 麻子 氏

【内容】「情報の整理・まとめ方」

1年生が地域探究の成果をまとめる直前に、タイムリーなテーマで講義をしていただいた。5W1Hという文章を書く上での基本的な型

ですら生徒にとっては新鮮だったようで、非常に有意義な時間となった。



(2) 各教科の取り組み

① 【国語】2年 学校設定科目「読書と表現」

本科目は、生徒の図書館の利用が少ないという問題意識から、図書館を拠点として展開する授業があってもよいのではないかと考え開講した国語科の科目である。

図書館の主な資源「本」と「新聞」を活用し、読んだことをもとに、自己の意見や思いを言葉にする、さまざまな言語活動を行った。学年末には「表現力を高める個人探究」として、各自で5分程度の発表ができる探究的な取り組みをした。小説を書いた生徒もいたが、新聞活用に慣れた生徒は新聞を深掘りしポスターを作成した。

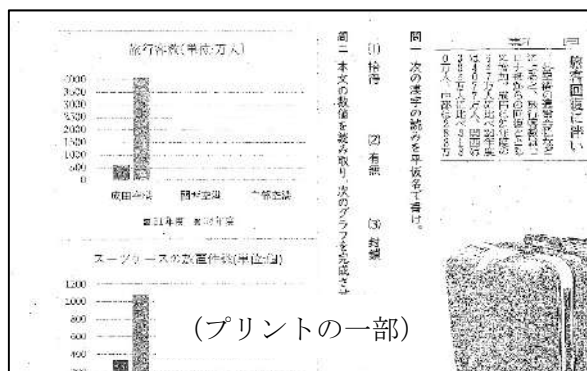
生徒の成果物



② 【国語】 1 年 現代の国語

週末課題として

- ・新聞コラムの書き写しや要約・感想記述。
- ・時事問題で読解問題を作成し実施。解答を授業内で行った。



記事内の数値を読み取りグラフ化したり、計算させたりした。単純に数字を拾うだけでよいが、正答率が悪かった。文章の中の数字はイメージが湧きにくく、視覚化の重要性を感じた。

③ 【英語】 3 年 学校設定科目 英語探究Ⅱ

時事問題を英語で読む

不定期に「News English 300 words」(読売中高生新聞)の記事を授業内で読んだ。学校の外の世界に目を向けて考えるよい機会になった。社会で起きていることが簡潔な英文になっているため、知らない単語が多くあっても意欲的に読むことができた。

④ 【総合的な探究の時間】 1・2 年 普通科

新聞記事の紹介

生徒各々が気になる新聞記事を選んで要約し、なぜその記事が気になったのかを他者に説明した。

〈経緯〉

探究推進部が発足して、学校全体として探究の流れを暫定的に作成し、1年生で地域探究、2年生で個人の興味関心に従った班別探究を行ってきた。

しかし、そもそもの興味関心が狭い生徒に、探究のテーマ設定を自由にさせること自体が非常に難しく、二転三転してテーマが決まら

ないという事態も見受けられた。

そこで広く社会で起きている事柄に目を向け、知見を広げるために、また自分の問題意識がどこにあるのかを探るために、新聞を用いることにした。



それぞれがまとめたことを共有。

⑤ 【総合的な探究の時間】 3 年 普通科

新聞で社会探究

3年生では、1年を通して新聞記事を素材とした教材を作成し、社会で起きていることを自分事とし、社会に参加する姿勢を確立する授業を行った。

《目標》

- ・多様な情報の中から必要な情報を取捨選択し、要点をつかむ。
- ・新聞記事から得た情報をふまえて、自分の考えを論理的に表現する。
- ・他者が選んだ新聞記事に触れて視野を広げ、自分の生活につながる問題として意見を持つ。

《授業の展開》

1. 新聞記事及び添付資料の読み取り
2. 記事の内容をふまえた意見の記述
3. 記述した意見の共有・交流

《内容》

毎回テーマを決めて記事を読み解いたうえで、自分の問題として考えるワークを行った。総仕上げとして各々が自分の問題意識に向き合って新聞記事を一つ選び、それを深掘りして他者に紹介する時間を持った。各回のテーマと使用した記事は以下の通り。

1 学期

第1回 宍粟市の選挙をもとに自分の考えを整理して表現する

(神戸新聞) 新病院、市政継続に信任
宍粟市長選 福元氏4選

第2回 賃上げの記事から給与明細の見方を知る

(日本経済新聞) 賃上げ率横ばい5.49%

第3回 大阪・関西万博について知ろう
～大阪・関西万博にはなぜ批判的な声上がるのか?～

(神戸新聞) 万博集客と流入なお課題

第4回 主権者としての自覚を共有し、参議院議員選挙を自分事として考える

〈朝日新聞〉「議員に」立ち上がる女性たち

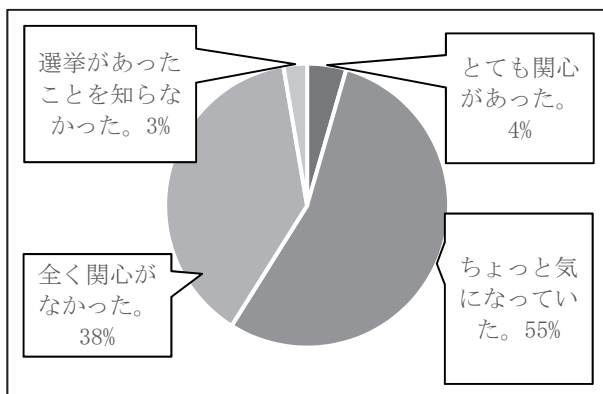
《第1・4回振り返り》

高校3年生が選挙権を得る年度初めに、宍粟総合病院の新築移転の是非が問われる宍粟市長選、市議会議員選が行われた。選挙後にはなったが、選挙への関心を問うアンケートを行ったうえで、問題を自分事として捉え、多くの資料から争点を整理する授業を行った。

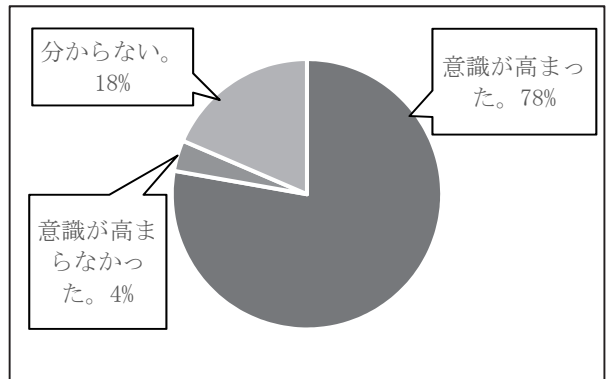
第4回の授業では、5月時点でのアンケート結果を共有し、他者の政治への意識を自分と比べつつ、参議院議員選挙への意欲を高める機会とした。

最初は地域問題が争点の選挙にも全く関心がない生徒が約40%いたが、全授業終了後のアンケートでは、約80%の生徒が主権者としての意識が高まったと答えた。

市長選・市議選に関心があったか(5月)



主権者としての意識は高まったか(1月)



2 学期

第5回 同調圧力に逆らえますか?

〈神戸新聞〉子どもも大人も同調圧力、抜け出す難しさ

第6回 社会人となる自分にできること

〈神戸新聞〉高校生奔走教室実現 琴丘高の塩谷さん、ヴィクトリーナに直談判

第7回 AIとの結婚どう思う?

～これからのAIとの付き合い方～

〈朝日新聞〉「AI実態なくても『幸せ』」

第8回 自分の問題意識と向き合う

各生徒が選んだ記事を紹介するポスターを作成して共有。



《第8回 振り返り》

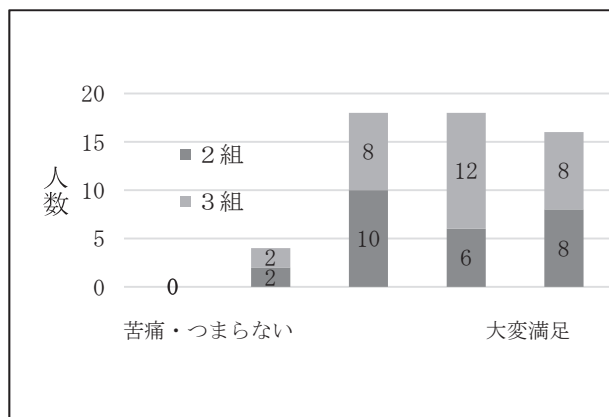
集大成ともいえる、「自分の問題意識と向き合う」の活動は、4回約1か月をかけて、じっくり記事を選び、タブレットを用いて背景や関連事項を調べつつ、自分の意見を形成した。共有の時間では、調べたことや自分の問題意識を各自が自信を持って発表し、充実した時間となった。授業後すぐのアンケートでは、満足度を尺度で表してもらったが、多くの生徒が高い満足感を示した。



生徒が選んだ記事の例

- ・全住民「スマホ2時間まで」
- ・火星に古代生物の痕跡？
- ・高市内閣発足 初の女性首相 自維政権
- ・抑圧政策女性見殺し「異性触れてはならぬ」
- ・トマトもキュウリも上手に冷凍保存

新聞紹介タイム 生徒満足度（尺度1～5）



〈生徒の主な感想〉

- ・普段知りえないであろう情報をたくさん知れてよかった。
- ・興味があることを調べられてよかった。
- ・自分の意見を伝えられて有意義だった。
- ・発表に個性があり聞いていて楽しかった。

《3年「新聞で社会探究」生徒感想》

- ・他の国の現状を知れて自分とは違う境遇の子や違う見方などがあり勉強になった。
- ・宍粟総合病院の記事やAIの記事を学習したりして、新聞には一つの事柄において様々な情報がたくさんあって自身の考えを深めることができました。

- ・新聞を読むと自分の知らない社会問題や事件などが思ったよりも多くてもっと社会を知る必要があると思いました。
- ・とても楽しかった。自分が今まで興味のなかった問題について詳しく知る機会ができてよかった。

3 所感と今後の課題

2025年度は生徒が自ら気になる新聞記事を選び、他者に紹介する活動を全学年で実施したところ、生徒の反応は極めて良好であった。多くの時事問題に触れ、自らの「世間知らず」を自覚すること自体が、学びの一步前進であるという実感を生徒自身が得ていると感じる。

一方で、教員側が読ませたい記事に関しては、生徒の文章読解に対する苦手意識が課題となった。教員には平易に感じられる記事でも、生徒にとっては難解な場合がある。このギャップを埋めるための教材の工夫や、教員による丁寧な解説といった努力が今後も不可欠である。

近年、ショート動画などの流動的な情報に慣れた生徒たちは、情報を鵜呑みにしがちである。偽情報に惑わされないよう、情報の真偽を吟味し、批判的に思考する力を養う機会を設け、それを習慣化していく必要がある。

情報の真偽が担保されている新聞の活用は、「正しい情報に触れる」という第一段階において極めて有効である。また、「他者を批判してはいけない」と萎縮する傾向にある生徒には、共有の場を設けることで、他者との価値観の違いを知り、多様な価値観の中で生きていることを実感させることができる。

今後は、意見の相違があったとき、自分の考えを筋道立てて論理的に説明する力を養う活動にも注力していきたい。



地域デザイン類型と NIE 活動の取り組み

兵庫県立播磨南高等学校 校長 黒岩 寛
臨時講師 矢野 聖人

1 はじめに

本校は、1984 年 4 月、加印地区第 9 番目の全日制普通科高校として設立された。その開校にあたっては、設立の 5 年前から播磨町に県立高校を設立して欲しいという地域の皆さまの熱い思いの上に設立され、42 年目を迎えた。

開校当初はひと学年 8 学級でスタート、現在は 4 学級まで減少したが、素直で元気な学校風土は引き継がれている。過去には、英語コース、グローバル情報コミュニケーションコース、芸術類型、芸術保育類型へと改編され、現在は地域デザイン類型がある。地域デザイン類型では、播磨町と連携協定を結び、播磨町役場の全面的支援を受けて、生徒たちが地域を学び、地域課題を考え、課題解決に取り組む探究活動を行っている。また播磨町での様々なイベントに参加するボランティア活動は、地域の皆さまから感謝の意をいただけるだけでなく、普段の学校生活とは違う生徒の表情が見られ様々な可能性を創造させられる。地域探究活動とボランティア活動は、本校の特色ある教育活動である。



2 地域デザイン類型に NIE を活用

地域デザイン類型は 2022 年度に設置され、2025 年度で全学年が新類型に移行した。学校設定科目「HariMAP I」・「HariMAP II」・「プレゼンテーション演習」を通して、地域の課題を考え、調べて、解決に向けた提案をする探究活動を行っている。この活動には、播磨町や兵庫大学の全面的な支援があり、播磨町役場、議会、兵庫大学の教授、その他関係機関の皆さんと協働した取り組みを行っている。

2025 年度から、地域デザイン類型専用の教室を整備し、日常的に調べ学習や発表の練習ができる環境を整えた。



探究活動を通して、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力、チームで協働して活動する力、地域の多様な方々との連携に必要なコミュニケーション力を育成することで、進学・就職の進路実現を目指す。学校設定科目のほか、「総合的な探究の時間」を活用して、1 年生では調査の手順や発表方法など、調査研究の基礎になる知識・技能を学ぶ。2 年生では各自で課題を設定し、実際にフィールドワークをしながら探究活動を行う。3 年生では調査研究の成果をまとめ

る活動を行っている。

地域デザイン類型の1期生である、39回生が2年生の時に授業を開始したが、担当者の手探りの中、様々な課題が見えてきた。

本校生徒の特徴として、思っていることややりたいことを秘めているが、自ら表現することが不得意で、教員が深く対話しないとその思いが出てこない生徒が多くいる。これは、高校卒業後の進路についても同じである。小中学校の成功体験が乏しく、自分は何もできないと思って入学してくる生徒が多い。その結果、探究活動で課題設定をする際に、どうしてもやり切る自信がなくなかなか課題設定ができない現状がある。

また、近年 SNS の普及により、目にする情報は自分にとって興味・関心のあるものに偏り、社会で何が起こっているのかを知らない生徒が多くいる。特に、本校の生徒については「自分さえよければよい。」という考えを持っている生徒が多いため、社会のニュースには無関心である。



このような現状から、NIEを活用して、高校生が地域の課題を解決したニュースや、取り組みを調べさせ、同じ年代の高校生が活躍していることを知り、「自分たちでもできる」ということを理解してもらう必要があると考えた。また、新聞を広げて記事を読むことにより、普段目にしないニュースに触れさせ、興味・関心の幅を広げる必要があると感じた。インターネットでの情報収集は非常に簡単で、大量の情報を取得

することができる一方、検索のキーワードによっては情報が偏るため、その問題をクリアするためには、新聞記事というメディアは万能であると考えた。

地域デザイン類型の教室に新聞を設置し、いつでも、だれでも自分の好きなタイミングで新聞が閲覧できるように配置している。



3 実践の内容

①通常授業での活用

・2025年4月～6月中旬

年度当初から2か月半程度は、授業内で新聞を活用する時間を設け、「今、社会で何が起こっているのか」、「地域のニュースで最近何があったのか」、「高校生が活躍した記事はないか」と、じっくり調べて考える力を養った。

(生徒の感想)

- ・知らないことばかりだった。
- ・新聞には、非常に多くの情報が載っていてびっくりした。
- ・思っていた以上に、地域のニュースがたくさん載っていたので、気になった。

②兵庫大学・松本教授による講義

・毎月1回程度

本校では、2018年9月より、兵庫大学との連携協定を結び、様々な取り組みを行っている。この地域デザイン類型の授業には、月に1回程度現代ビジネス学部長の松本茂樹教授による講義を受けアドバイスをいただいている。専門は

地域創生 SDGs で地域ビジネス、地域の活性化等様々な活動に取り組まれている。松本教授からも、新聞記事の探し方や活用の仕方について、アドバイスをいただいた。

(生徒の感想)

- ・新聞を隅々まで読むことは、たいへんだと思っていたが、新聞の見出しを中心に全体を見ることから始め、目に留まったものから読む手法を教わり、興味のある記事をしっかりと読み込むことができるようになった。



③記者派遣

・2025 年 11 月 21 日(金)13:20～14:10



地域デザイン類型の生徒 22 名が毎日新聞記者の入江直樹様の講義を受講した。見出しの付け方・取材の仕方・メディアリテラシーについて講義をいただいた。受講者は 2025 年度のポスターセッションへ向けての見出しの付け方、次年度以降、フィールドワークでの取材する力を身に着ける、絶好の機会となった。

(生徒の感想)

- ・見出しはたくさんの役割があり、読者に一目で内容が伝わるようにすることがすごく重要だとわかりました。
- ・記事は、見出しで読者の「見たい！」が決まると思った。5W1Hが使われ、その中でも2つに絞り見出しを書くことでわかりやすくなると感じた。
- ・大量の記事から、興味あるものを選びやすくすることも、見出しが重要な役割を果たしていることがわかった。



④播磨町議会議員への提言会

・2026 年 1 月 9 日(金)13:20～14:10

年に 1 回、播磨町議会の議員さんにご協力いただき、播磨町の課題を研究した結果を提言として聞いていただきました。提言を聞いていただくと同時に、自分たちでできそうなことも併せて話し合い、意見交換を行った。



(生徒の感想)

- ・自分たちの調べたことを聞いていただいて、共感してもらえた部分もあってうれしかった。
- ・行政で行うことはなかなか難しいと言われた。行政で無理なら、企業等に協力を依頼する手段があるというアドバイスもらった。
- ・現在、播磨町で取り組んでいるより詳しい内容を教えてもらった。今後の研究に役立てていきたい。

⑤地域デザイン類型発表会

- ・2026年1月30日(金)13:20~14:10

1年間、各グループで研究してきた成果を発表する機会として、ポスターセッションによる発表会を行った。新聞記事から集めて、学習した内容から、自分たちの意見を踏まえながら、1枚のポスターに仕上げて発表した。聴取者としては、保護者、播磨町役場、播磨町議会、兵庫大学、近隣中学校の教員、全学年の生徒と、多くの方に聞いていただいた。



(生徒の感想)

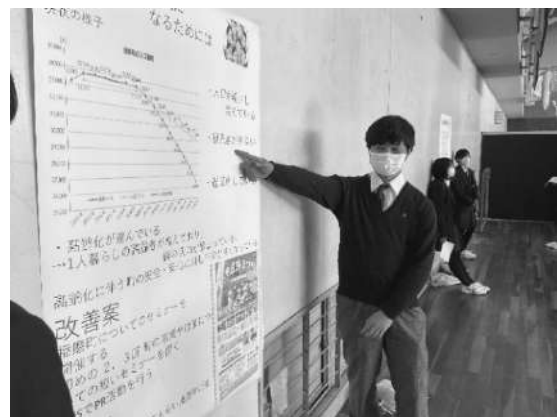
- ・はじめは緊張して、うまく話せなかったが回を重ねるごとに少し慣れていき、最後はうまく話せた。
- ・1年生の子に、新たな意見を提案されて、来年その意見も入れてみようと思った。
- ・面白いことを考えている班があって、ぜひ実現してほしいと思った。(参加した1年生)
- ・播磨町のことを考えてくれるのは本当にうれしく思うのですが、町外在住の生徒が多いので東播磨などもう少し広げた方が考えやすい

問題もあるのではないかと感じた。いずれにしても若者の考えを聞けて参考になりました。

(外部からの参加者)

4 成果と今後の課題

2025年度実施した結果、こちらが考えていた課題は解決できた。生徒は、自分たちもやればできると実感し、興味・関心の幅を広げ、課題設定をしながら調査・研究、発表まで進めることができた。NIE活動の成果であると考え、この結果を振り返り、次年度はいよいよ実際に行動し、実行に移すこととなる。さらなる成果が出るよう見守ってきたい。



今後の課題として、今回 NIE 活動に取り組んだ3年生が、研究テーマの実行まで移すことができたので、引き続き、生徒一人一人が主体的に学びに向かう力を育て、自らが課題設定をしながら調査・研究、発表へと進めていきたい。

毎年、同じ繰り返しとなるが、指導を進めていく中で絶対に欠かすことのできない取り組みであると考え。



新聞を活用した異世代・異文化交流

兵庫県立洲本高等学校 校長 下條 謙一郎
教諭 大石 昇平

1 本校の概要

(1) 本校の状況

本校は、2026年に創立129年目を迎える淡路島にある普通科高校である。

2025年度は全学年6クラスの構成となっており、各学年には特色選抜で入学してきた「総合探究類型」の生徒が最大24名在籍している。それらの生徒は、通常の授業に加え、大学や研究機関と連携して探究活動を行っている。

また、2024年度からは、HYOGO グローバルリーダー育成プロジェクトにおける「ひょうごリーダーハイスクール」に指定され、これまで以上に大学・地域・関係機関等と連携し、先進的・創造的な探究活動を行っている。

本校でのNIE活動は、この「ひょうごリーダーハイスクール」としての取り組みも兼ねており、本年はNIE実践指定校としての2年間の取り組みの内の2年目にあたる年である。

(2) 本校生徒の現状

2024年からの調査を見ても、本校生の新聞とのかかわりは非常に少ない。毎日新聞を読んでいる生徒は全体の1%ほどで、日常的に新聞に触れている生徒はごくわずかである。

一方で、本校生徒の進学意識は強く、多くの生徒が大学進学を選択している。昨年に引き続き、生徒が新聞記事に触れることで読解力の向上や、時事問題に対する問題意識や自分の考えをまとめる機会を持つことができるのではないかと期待した。

そして、2年目の取り組みとして、新聞を通じた生徒と学校外の方々との交流を計画した。一つの記事をめぐって異なる価値観や考え方に触れることで、生徒自身の見方に変化が起

こらないか。国際交流のきっかけに新聞を使うことはできないか。

このような昨年度からの問題意識と新しい期待を抱いて、2年目のNIE実践に取り組んでいった。

2 実践指定校としての取り組み

(1) NIE コーナーの設置

昨年度から引き続き、職員室前に写真のようなNIEコーナーを設置し、生徒が新聞を閲覧できるスペースを設けた。



また、学校図書館ではバックナンバーを新聞ごとに分類して保管してもらい、生徒が新聞に触れやすい環境を作った。

教科からの工夫で生徒が新聞に触れる機会も設定した。例えば、2学期には「政治・経済」の担当教員が、生徒に当番制で為替や日経平均株価を調べてくるよう課題を出していた。

(2) 「洲高かわら版」

長期的な読解力等の向上を目指すための取り組みとして、2024年度に引き続き洲本高校版NIEタイムとして「洲高かわら版」を実施した。本校では1時間目が始まる前の10分間をいわゆる「朝読」の時間としており、その内の1日(木曜日)だけ、全校生が新聞を読む時

間をもうけるようにした。「ロイロノート」を通じて全校生に新聞記事のワークシートをデジタル配信し、1年間で合計25回実施した。

(3) 読売新聞販売局とのミニコミ

「NEW すもと」発行

本校には1953(昭和28)年から発行されている「洲高新聞」という学校新聞がある。かつては年に3回発行されていた「洲高新聞」も、現在は年に1回となっている。

そんなほそぼそと活動が続けていた新聞部に、読売新聞販売局の読売センター洲本様から、「洲本高校新聞部と連携したミニコミを作れないだろうか」というお話をいただいた。

読売センター洲本様のご協力で読売新聞を購読しているご家庭にも配送していただけることにはなった。しかし、生徒たちだけでは不安なことも多く、取材方法や記事のまとめ方については、読売新聞洲本支局長様にご協力をいただき、新聞づくりのレクチャーを受けながら進めていくこととなった。



第1回のテーマに選んだのは、自分たちが普段何気なく過ごしている街の地名だった。自分たちで街を歩いて、目についたものから“不思議”を見つけ出し、A3用紙裏表にまとめていった。



(4) 新聞 de コミュニケーション

この交流会は、本校の文化祭(6月12日)に地域の高齢者の方をお招きし、新聞記事を読んで意見交換を行ったものである。時事問題を通じて、生徒が普段交流のない高齢者の方と意見交換することで、自分とは異なる価値観や考えに触れることを目的として計画した。

この交流会には本校生徒20名と、近隣の老人会“みどり会”の11名の方にご参加いただいた。



交流材料の記事として、生徒が予め選んだ次のような3つの記事を用意した。

①コメ問題、②少子化問題、③戦争体験

①コメ問題については、年齢は違っても同時代に生きる者としてコメの値上がりに悩む点で共感が生まれた。③戦争問題については、“みどり会”の方の戦争体験に聞き入る場面や、世代を超えた戦争への忌避意識が見られた。



その一方で、②少子化問題については世代の差といえるような考え方の違いが見られた。ある班の“みどり会”の女性から少子化に対して「皆さん高校生の世代が大人になったら、

たくさん子どもを産んでね」と期待を込めて語りかけた。

それに対して、女子生徒が「私は自分の時間やお金を大事にしたいから、将来子どもを欲しいとは思わない」と答えた。さらに男子生徒が「子ども育てる自信がないし、責任を負う覚悟がない」と答えた。

テーブルが一気に張り詰めた空気で覆われたが、別の“みどり会”の女性が「今の日本では若い人たちがそう思うのも仕方ないようにも思う…」と呟いて話し合いは終了した。

世代が違うから異なる意見と、世代が違って共通する意見、生徒はその両方に出会い、普段の同世代とは異なる価値観に触れることができた。

～生徒感想抜粋～

- ・最初は歳が離れた人達と話すことができるかとても不安でしたが、実際に話して見るととても楽しかったです。またお話したいです。
- ・普段新聞をあまり読まないのので、読んでみたら面白いなと感じた。昔の話を聞いて、私達高校生が見ている現代の話と比較しながら交流することができて楽しかった。

～みどり会の方感想抜粋～

- ・来て良かったです。若い人との話はすごくさわやかになります。
- ・若い人たちから元気をもらいました。



(5) 新聞 de コミュニケーション

with ヒロ高校生

“みどり会”の方との交流会に続き、10月3日には、洲本市の姉妹都市であるハワイのヒロ高校生が来校するタイミングに合わせ、ハワイと日本の新聞を介して両国の現状を理解し、両国の関係を考察する授業を計画した。なお、この授業はNIE実践指定校の公開授業として行った。

今回の授業のねらいとして、①新聞を紹介した立場の異なる人々との交流、②両国の新聞の違いに気づく、③新聞から両国の現状を知る、④他国の新聞に登場する自国の情報を比較し合うことで、両国の関係性を考察するという4点を設定していた。

特に重視したのは、④の関係性に関する考察である。他国の新聞は、自国のどのニュースをどれくらい報道しているのか？他国の新聞を通じて自国を客観視すると共に、相手国にとって自国がどのような存在であるのかを生徒に考えてもらうため、この問いを設定した。

授業では、洲本高校生3～5人の班にヒロ高校生1～2人の班を作り、グループワークの形をとった。ヒロ高校生はほとんど日本語を喋ることができないため、生徒も授業者も英語でコミュニケーションをとりながら授業を進めた。また、事前にヒロ高校生にはハワイの新聞を持参してもらうよう依頼しており、当日の教材として使用した。

【授業計画】

- I 自己紹介
- II 両国の新聞から最大数を探そう
- III 新聞を使って“Hot News”
(話題のニュース)を紹介しよう
- IV 「アメリカの新聞に出てくる日本」・
「日本の新聞に出てくるアメリカを
探そう」

IIについては、生徒の緊張を解くために、10秒間で紙面から最大数を探すゲームを設定した。言語の壁があっても、数字を判断すること

は可能であると考え、生徒に取り組んでもらった。その際に「ベストスクープ！」の使用を検討したが準備に間に合わず、代わりにガラス製のおはじきを用意して、見つけた数字のマークとして使用した。



Ⅲの“Hot News”紹介では、洲本高校生からは万博に関するニュースや、ヒロ高校生からはアメリカ政府の一部閉鎖に向かう動きなどが紹介された。

Ⅳの両国の新聞から関係性を考えるワークでは、日本の新聞にはアメリカの記事がたくさん見つかったが、アメリカの新聞からはほとんど日本に関する記事を見つけることができなかった。このようなワークを通して生徒のまとめには、「日本へのアメリカの影響の大きさを感じる」、「アメリカの存在感が大きい」、「日本の片思い（アメリカへの）」といった内容が並んだ。



言語の壁がありながらも、生徒同士の交流ができ、日米間の新聞比較から考察できたことで、主なねらいは達成できたと感じた。

洲本高校生徒のアンケートからは、授業への興味・理解ともにポジティブな回答をえることができた。また、何より、「世の中を知る

ことへの意識が高まりましたか？」という問いについては80%以上、「新聞を読むことへの意識は高まりましたか？」という問いについては、70%以上の生徒が肯定的に答えた。ヒロ高校生にも同様のアンケートをとったところ、同様の結果となった。

アンケート結果から、洲本高校生とヒロ高校生との交流を通じて、互いに新聞を読むこと、世の中を知ることについての意識が高まったということがわかった。



3 成果と課題

2025年度の取り組みを通じて、生徒が日常的に新聞を手にとることを習慣化できていないのが現状である。新聞を読むことによって得られる読解力の向上といった課題は達成されていないと言わざるを得ない。

しかしながら、2025年度新たな取り組みとして行った新聞を介した交流は、生徒へ新たな刺激を提供し、生徒の時事問題や新聞への興味関心を高めるきっかけとなった。

今回、他者とつながるツールとしての新聞の活用方法を見出すことができた。現物の新聞（記事）を一緒に読みながら交流することで、異なる世代や文化の壁も乗り越えられるのではないだろうか。

引き続き、生徒の世界を広げられる新聞の活用方法を模索しながら実践していきたい。

定時制高校での NIE 活動

兵庫県立湊川高等学校 校長 岡 昌秀
教諭 住本 拓自

1 はじめに

本校は神戸市にある 1 学年 2 クラス（4 学年のみ 1 クラス）で生徒数約 90 名の定時制高校です。経済的な理由から、昼間アルバイト等を行い家計を支えたり、中学校時代に不登校を経験していたり、基礎学力面で課題があるといったような様々な困難を抱えている生徒が数多くいます。

そういった現状を踏まえて、2025 年度、大きく 4 点のことに重点的に取り組んでいます。

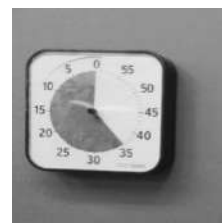
一つ目は、昨年度から副担任制を導入し、担任と副担任がクラスを担当することで、生徒に手厚い支援ができるような体制をつくっています。

二つ目は、すべての生徒にわかりやすい授業を目指し、ユニバーサルデザインの考えに基づいた授業を行うとともに、「タイムタイマー」をすべての授業教室に設置することで、時間の管理が行いやすいような環境を整備しています。

三つ目は、一人一人の状況や希望に応じて、学習や生活における困難の改善や克服を目的とした通級指導の実施、生活する上で日本語に不安がある生徒に対しての日本語指導の実施など、生徒の困りごとを解消できるような指導を行っています。

四つ目は、新聞の活用です。多くの生徒は新聞に馴染みがない状況ではありますが、2024、2025 年度に実践校指定をいただき、新聞を教育活動に用いた授業改善、授業力向上を目指して、学校全体で魅力ある授業づくりに取り組みました。

各教室に設置している
タイムタイマー
(右写真)



2 実践の内容

(1) NIE 推進プロジェクトチームの結成

NIE の活動を学校全体で行うため、2024 年度 4 月にプロジェクトチームが立ち上げられ、委員として校長、教頭、および 4 名の教員が委員を務めることになりました。

(2) 事前アンケートから見る現状

- (1) 家庭(かいてい)で新聞(しんぶん)を購入(かう)していますか？(複数回答可)
☐購入している ☐購入していない ☐わからない
- (2) (1)で「購入している」と答えた人のみ答えてください。どこの新聞を購入していますか？(複数回答可)
☐朝日新聞(あさひしんぶん) ☐毎日新聞(まいにちしんぶん)
☐読売新聞(よみうりしんぶん) ☐産経新聞(さんけいしんぶん)
☐日本経済新聞(にほんけいざいしんぶん) ☐神戸新聞(こうべしんぶん)
☐その他 ☐わからない
- (3) これまで、新聞(しんぶん)を読(よ)む機会(きかい)はありましたか？
☐現在、ほとんど毎日(まいにち)読んでいる ☐現在、時々(ときどき)読んでいる
☐現在、全く(まった)く読んでいない ☐今まで一度も読んだことがない
- (4) (3)で読むと答えた人のみ答えてください。どんな内容(りよう)の記事(きじ)を中心に読みますか？(複数回答可)
☐事件(じけん) ☐政治(せいじ) ☐地域(ちいき) ☐テレビ欄(らん)
☐その他
- (5) 新聞(しんぶん)に対して、どのようなイメージを持っていますか？
- (6) 時事(じじ)ニュース(=世(よ)の中(なか)の情(けい)報(ほう))は、週(しゅう)にどのくらいのペースで読(よ)みますか？
※例(れい):「テレビのニュース番組(ばんぐみ)」、「ネットニュース」など
☐ほぼ毎日(まいにち)読(よ)んでいる(週(しゅう)に 6 日以上)
☐よく読(よ)んでいる(週(しゅう)に 5 日以上)
☐時々(ときどき)読(よ)んでいる(週(しゅう)に 3 日以上)
☐たまに読(よ)んでいる(週(しゅう)に 1 日以上)
☐全く(まった)く読(よ)んでいない
- (7) 時事(じじ)ニュースの情(けい)報(ほう)は、何(なん)で見(み)ますか？(複数回答可)
☐スマホ ☐パソコン ☐テレビ ☐ラジオ
☐その他(雑誌(ざっし)、人(ひと)から聞(き)いたなど)
- (8) (7)で「スマホ」、「パソコン」と答えた人(ひと)のみ答えてください。その中でも、特(とく)に何(なん)を使(つか)って、時事(じじ)ニュースの情(けい)報(ほう)を見(み)ますか？
☐SNS ☐ネットニュース ☐ネット新聞 ☐その他
- (9) 得(え)た情(けい)報(ほう)について、誰(たれ)かと話(わ)をする機(き)会(かい)はありますか？(複数回答可)
☐友人(ゆうじん) ☐家族(かぞ)・家庭(かてい) ☐アルバイト先(せん) ☐その他(人(ひと)あまり話(わ)さない)

上記の事前アンケートを 2024 年度 4 月 19 日の 4 時間目の LHR にて全校生徒を対象に実施しました。その結果をまとめると、大きく 4

点の現状、課題が見えてきました。

- ① 8割近くの生徒が、新聞が家にない環境にあり、なじみがない
- ② 新聞に対するマイナスイメージとして、「文字がたくさんあって読みにくい」、「堅苦しい」といった回答が複数あった
- ③ 時事ニュースを確認する頻度について、半数以上が週1回以下しか確認していない
- ④ 時事ニュースを確認する方法は、生徒の7割近くがスマホで、SNSから情報を得ている

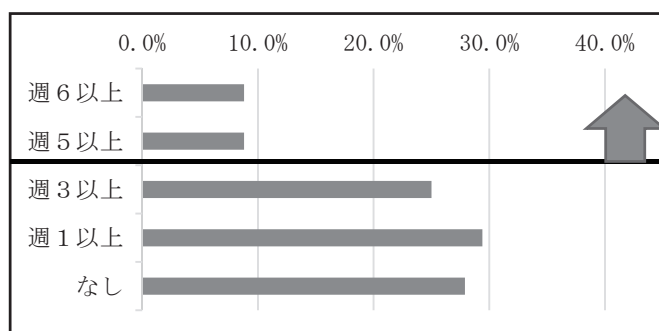
以上の内容を踏まえて、下記のような目標を設定しました。

目標

新聞を通して、世の中の出来事や様々な課題、多様な考え方に触れることで、新たな「気づき」を自分の中に発見し、主体的に考え表現自ら発信する能力を育成する。

数値目標

事前アンケートの質問（6）の質問で、「週に5日以上確認している」の割合を、2年間で50%以上にする



そして、この目標を実現するために、プロジェクトチーム内で相談し、3点のことに取り組みることになりました。

- ① LHR やコグトレで活用できる新聞を活用した教材をプロジェクトチームで作成し、教員間で共有する
→新聞記事に触れる機会を作ること、

読み方を習得し、新聞を活用できる力を身に着ける

- ② 職員室前の掲示板に、月に1回ペースで新聞記事にコメントをつけて掲示する
→時事ニュースへの興味関心を高める
- ③ 新聞を活用した授業を、必要に応じて各教科で実施する
→世の中の出来事や課題にふれる機会をもつ



(3) コグトレ用教材の作成例(「タイトル」)

- ・「@SNS コメの問題」(内容理解、自分の意見)
- ・「AI の法律」(内容理解)
- ・「スマホによる斜視」(内容理解、想像力)
- ・「ノーベル化学賞」(内容理解、想像力)
- ・「春闘」(自分の意見)
- ・「少子化」(内容理解、自分の意見)
- ・「性教育」(内容理解、自分の意見)
- ・「大阪万博クイズで知る今」(興味関心を高める)



(4) 学年、教科での取り組み例

2 学年

・3年生の Google Classroom には NHK 1 分間ニュースの URL を毎日貼り付けています。

地歴公民科

・「公共」の授業で、時事問題として（ロシアとウクライナ、台湾有事、アメリカによるベネズエラ侵攻、物価高など）定期的に、新聞やニュースの内容を取り上げました。

理科

・「科学と人間生活」の授業において、プリントで「アルミ缶の再生について」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補いました。「化学基礎」の授業において「温度のセ氏とカ氏って何」の新聞記事を提示し、記事の内容について各自が問いに答えることで授業内容を補いました。

保健体育科

・「保健」の時間で、道路交通法改正で、自転車が飲酒運転の罰則対象になることや、自転車のながらスマホ運転も罰則対象になることを説明する際に取り上げました。

国語科

・「現代の国語」の時間で、授業中に取り上げた「万博」や「ろう者理解に向けてのカフェ」に関する新聞記事の内容を、考査問題としても取り上げました。

(5) 記者派遣事業

2025 年 9 月 5 日、神戸新聞 NIE・NIB 推進部 シニアアドバイザーの三好正文様と、神戸新聞報道部記者の津谷治英様にお越しいただき、3 年生沖縄修学旅行の事前学習として、3 年生 20 名を対象に LHR の時間に出前授業を実施しました。

内容は、修学旅行の行先の一つである「旧海軍司令壕」に関連した、沖縄戦の話を中心に、沖縄（琉球王国）の歴史や兵庫との関わりについてお話しいただきました。三好様からは、動画、スライドを示しながら、琉球王国からの沖

縄の歴史の概要や沖縄戦で多くの兵庫県出身者が戦火に散り、戦前・戦後を通じて沖縄県と兵庫県には深いつながりがあるということをお伝えいただきました。津谷様からは、島田勲知事のエピソードを、新聞記事をもとに説明していただきました。

特に、死を覚悟して赴任し、生命保護に尽力する話は、生徒の心に大きく残ったようで、沖縄県と兵庫県にそのような歴史があったことを初めて知る生徒がほとんどで、修学旅行に向けて、意識を高めることができました。

生徒の感想(一部抜粋)

・今の自分が快適に住めて、生きられていることに感謝しなければいけないと感じた。

・沖縄への修学旅行を、ただの観光地巡りとして楽しむだけではなく、戦争に関する跡地やサトウキビ畑を見ることで、悲しい過去にも触れながら過ごしたいと思えました。

・兵庫県と沖縄県には、こんなつながりがあったと初めて知りました。

・戦争の歴史について、詳しく知ることができたのと同時に、観光名所や琉球ガラスなどの文化についても学ぶことができました。

・また自分で、戦争のことについて調べてみようかなと思いました。



3 今後の課題と展望

(1) 事後アンケートから見る現状

(1) 今年度(4月)になってからの、ニュース(テレビやスマホも含めて)や新聞(しんぶん)に触(ふ)れる機会(きかい)は増えましたか?
☐とても増えた ☐少し増えた ☐変わらない ☐少し減った ☐とても減った

(2) (1)で「とても増えた」、「少し増えた」と答えた人のみ答えてください。どんな内容の記事を中心に読みますか?(複数回答可)
☐事件(じけん) ☐政治(せいじ) ☐地域(ちいき) ☐テレビ欄(らん) ☐その他

(3) 今年度(4月)になってからの、ニュースや新聞(しんぶん)に触(ふ)れる機会(きかい)は具体的に(ぐたいてき)にどのぐらいでしたか?
☐現在(げんざい)、ほとんど毎日(まいにち)読んでいる ☐現在、時々(ときどき)読んでいる
☐現在、全(まった)く読んでいない ☐今まで一度(いちど)も読んでいない

(4) 新聞に對(たい)して、現在どのようなイメージを持っていますか?

(5) 時事(じじ)ニュース(=世(よ)の中(なか)の情報(じょうほう))は、週(しゅう)にどのくらいのペースで確認(かくにん)していますか?
 ※例(れい):「テレビのニュース番組(ばんぐみ)」、「ネットニュース」など
☐ほぼ毎日(まいにち)確認(かくにん)している(週(しゅう)に6日以上)
☐よく確認(かくにん)している(週(しゅう)に5日以上)
☐時々(ときどき)確認(かくにん)している(週(しゅう)に3日以上)
☐たまに確認(かくにん)している(週(しゅう)に1日以上)
☐全(まった)く確認(かくにん)していない

(6) 時事(じじ)ニュースは、何(なに)で見ますか?(複数回答可)
☐スマホ ☐パソコン ☐テレビ ☐新聞 ☐ラジオ
☐その他(雑誌(ざっし)、人(ひと)から聞いたなど)

(7) (6)で「スマホ」、「パソコン」と答えた人(ひと)のみ答えてください。その中でも、特に何(なに)を使って、時事(じじ)ニュースの情報を確認(かくにん)していますか?
☐SNS ☐ネットニュース(Yahoo!ニュース、スマートニュースなど)
☐ネット新聞(読売新聞オンライン、朝日新聞デジタルなど) ☐その他

(8) 得た情報(じょうほう)について、誰(たれ)かと話(わ)せる機会(きかい)はありますか?(複数回答可)
☐友人(ゆうじん) ☐家族(かぞ)・家庭(かてい) ☐アルバイト先(せん) ☐その他の人(ひと)達(たち) ☐あまり話(わ)さない

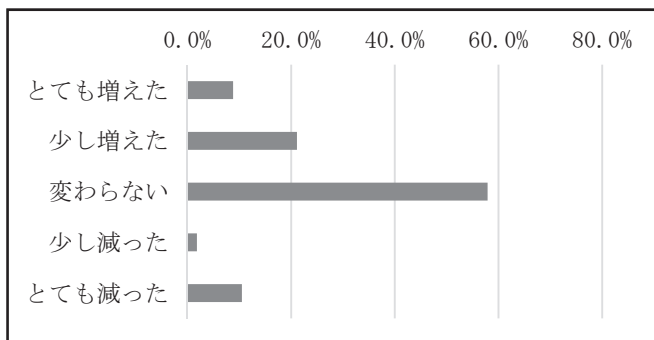
(9) 現在、どんな内容(ないよう)のニュースに興味(きょうみ)がありますか?

上記のような事後アンケートを2026年1月16日の4時間目のLHRにて全校生徒を対象に実施しました。

《分析の一部》

事後アンケート(1)の質問について

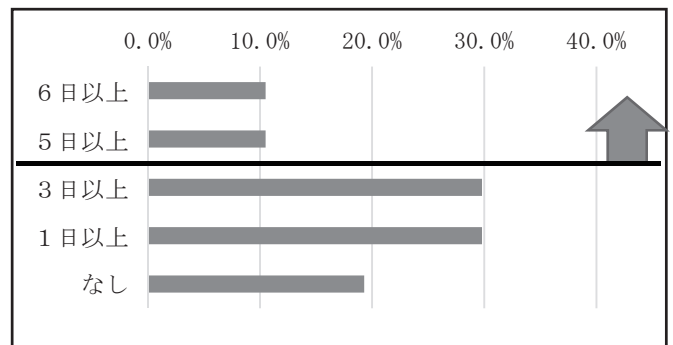
4月の時と比べて、約30%の生徒が「とても増えた」、「少し増えた」を選択しているという点で、成果がありました。その一方、残りの約60%の生徒には変化がない、減少している生徒も少なからずいるという点で、今後の課題がみえました。



事後アンケート(5)の質問(数値目標)について

数値目標について、事前アンケートでは「週に5日以上確認している」の割合が17.6%でした。今回の事後アンケートの結果、その割合が21%に上がっており、成果が見られました。

しかし、目標の50%には届かなかったことは、今後の課題です。今後も様々な場面で、時事ニュースを取り入れた活動を継続する必要があります。また、「全く確認していない」の割合が27.5%から19.3%に減少したことも大きな成果でした。これまでの2年間で継続的に活動してきた結果だと考えられるため、今後に向けての励みにしていきたいです。



(2) 今後に向けて

事後アンケートの結果を受けて、引き続き以下の2点に重点を置いて、活動を行っていきたいと考えています。

- ①これまで作成してきたコグトレ教材を、引き続き活用し、新聞に触れる機会を設ける。
- ②各授業で、新聞などを積極的に活用し、時事ニュースの確認を促す指導を継続する。

新聞を多くの人に読んでもらうために

クラーク記念国際高等学校クラークスマート芦屋 校長 加藤 寛之
教諭 山千代 智也

1 はじめに

本校は、全国各地にキャンパスを持つ広域通信制高校である「クラーク記念国際高等学校」の芦屋キャンパスである「クラークスマート芦屋」といい、全校生徒約 180 名いる学校である。オンライン授業と対面授業の中から登校日数を自由に選択し、なりたい自分に必要な知識やスキルを身につけ、自分らしい人生を描ける＝「ジブンデザイン」を教育理念とし、自律的学習者の育成を目指している。

今までは全日型コースである「専修学校クラーク高等学院芦屋校」で取り組みを行っていたが今回から、毎日通わない生徒に対して「どのように新聞に触れることができるか」をテーマに設定し、月曜日 1 時間目・2 時間目の「キャリア探究Ⅲ」の中で取り組みを実施した。

2 実践の内容

(1) 閲覧コーナーの設置

5 月・6 月と 10 月・11 月に、朝日新聞・毎日新聞・日本経済新聞・産経新聞・神戸新聞の 5 紙にプラスして新たに英字新聞として THE JAPAN NEWS を入れた 6 紙を提供していただいた。校舎の玄関前に毎日設置し、新聞を手にとって読んでもらう機会を作るとともに、授業等で活用できるような環境整備をおこなった。

特に英字新聞に関してはなかなか触れる機会もなく、生徒にも新鮮に映り、記事に書かれている英語を一生懸命に読んでいる様子が見受けられた。しかし最初は物珍しさに新聞を手にする生徒がいたものの、日を迫うごとに活用する生徒が減っていった。玄関横ということでなかなか素通りしてしまうことが多く、

多くの人に読んでもらうといった当初のテーマから少し距離が遠くなっているように感じた。そこで授業を受講している生徒から代表 4 人を選出した。選出した 4 人が中心となり、はじめにどの程度現在新聞が読まれているかをテーマに学校の一大行事である「文化祭」と全国各地にキャンパスを構えているスケールメリットを生かし、文化祭の来場者と全国のクラークの生徒を対象にアンケートを実施した。

(2) アンケートから分かる調査結果

文化祭の来場者と全国のクラークの生徒 91 名を対象にアンケートを実施した。以下がそのアンケート結果である。(全 9 問)

図 1

あなたの年齢層を教えてください。
91 件の回答

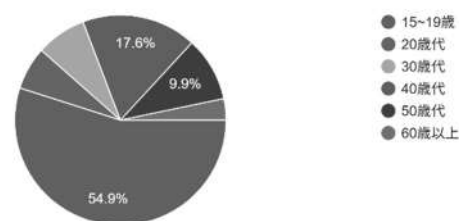


図 2

日頃、国内や国外の様々な情報（ニュース）をどのような方法で入手していますか？
91 件の回答

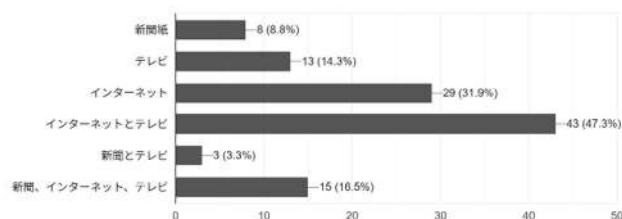


図 3

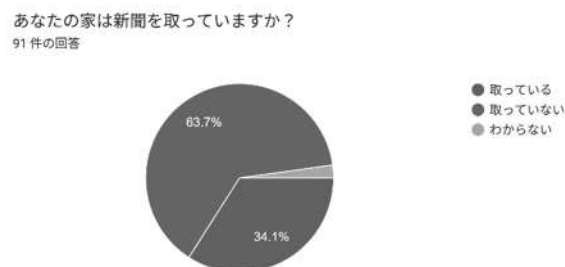
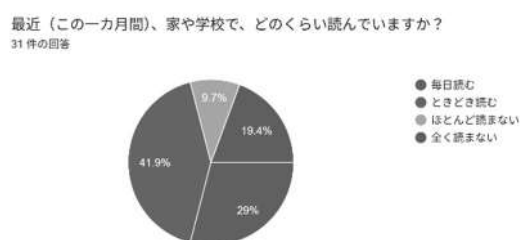


図 1～図 3 は対象者 91 名についてのアンケートの回答結果である。特に図 2 では「日頃、国内や国外の様々な情報（ニュース）をどのような方法で入手していますか？」といった回答に対して何かしらの形で新聞を利用している割合は 26 人と全体で 28.5% の割合にとどまった。その一方で新聞を家ですべて取っている割合は 63.7% になっている。インターネットなどで手軽にニュースが手にとることができる世の中になっている中でまだ 6 割以上の家庭で新聞をとっているということが明らかになった。

図 4 では新聞を取っている家庭の中で 1 か月間どのくらい新聞を読んでいるかといったものである。新聞を読む人の割合は 7 割であり、多くの家庭が新聞を読んでいるといったことがこの調査からわかった。

図 4



その一方で新聞をとっていない人からどうすれば新聞を読んでもらえるかといった回答を募ったところ、以下のような回答があった。

（抜粋）

- ・サイズを片面が A 4 サイズくらいに小さくする
- ・若者の感心する内容を多くする

- ・ネット新聞をもっと普及させる

以上のような回答からも興味をもっと引くべきといった内容があるのと、ネット新聞の普及が回答としてあった。紙面の中に若者が関心と呼ぶような内容ということは特に高校生に多く寄せられた。

このアンケート結果から改めて新聞の有用性や効果を高校生に知ってもらうべく、記者を派遣した講演会をしたいという声が生徒からあがった。そこで「メディアリテラシーとファクトチェック」をテーマに兵庫県 NIE 推進協議会事務局長網麻子氏を講師として学校行事を行った。

（3）記者派遣

学校行事として、「メディアリテラシーとファクトチェック」をテーマに生徒 21 名を対象に授業を行った。

実際の授業では新聞を使ったワークを行い、新聞やテレビなど複数の情報源を持つことの大切さや、新聞が「記者らがその時点でできる限り事実確認した正確なニュースを載せている」ということをお話しされた。



以下は授業を行った生徒の感想である。

- ・私は、フェイクニュースに出会い、自分自身が被害にあったケースはありませんが、今後フェイクニュースに自分が巻き込まれてしまう可能性があるかもしれません。その際、今日学んだ「発信源を確認する」「根拠を確認する」「関連情報を確認する」というのを意識して日々生活していこうと思いました。
- ・情報のファクトチェックが必要だったり、ファクトチェックをファクトチェックすることが必要になってきていたりするのではないかと感じる。
- ・新聞ができるまでの過程や、新聞と SNS の信頼度の違いについて詳しく知れて面白かった。

(4) 生徒によるまとめ・探究活動へ

「キャリア探究Ⅲ」の授業の総まとめとして、今回テーマとして設定した「新聞を多くの人に読んでもらうために」について生徒自身が探究し、その成果をパワーポイントにまとめるといった作業を最後に授業として行った。

(2) で紹介した文化祭で実施したアンケートをもとに、生徒自らが問いを設定し、その問いから考えられる結論を生徒自身の手で導き出した。



今回の探究では新聞の購読率が低下しており、近年進行している新聞購読率の低下、特に若年層における「活字離れ」という課題に着目し、その背景と影響について分析し、年代別のデータから、新聞購読率が年々減少している現状が示されており、これが教育面にも影響を及ぼしている可能性が指摘されている。そ

の上で、新聞を教育に活用する取り組みである NIE (Newspaper in Education) に注目し、新聞が読解力・表現力・思考力といった基礎的な学力の向上に寄与することが示されている。実際に、新聞を読む生徒と読まない生徒との間で学力差が見られる点も強調されている。

さらに、新聞の価値を再評価する観点から、①購読形態の柔軟化 (サブスクリプション化)、②教育的価値の再定義 (教材としての活用)、③アーカイブとしての価値 (情報の保存性・信頼性) の 3 点を改善策として提案する形をとっている。

- ① 購読形態の柔軟化についてでは、従来の紙媒体中心の定期購読は、費用面や利用習慣の観点から、特に若年層にとってハードルが高いという課題がある。この課題に対しては、月額数百円程度で利用可能な学割サブスクリプションの導入や、必要な記事のみを閲覧できる記事単位課金 (マイクロペイメント) の仕組みが有効であると考えられる。また、学校単位で新聞社と契約し、生徒が無料でデジタル版を利用できる環境を整備することも重要である。さらに、LINE や専用アプリを活用したニュース配信により、日常的にニュースに触れる機会を創出することや、紙媒体とデジタル版を組み合わせたハイブリッド型の購読形態を導入することで、多様なニーズに対応することが求められる。
- ② 教育的価値の再定義についてでは、新聞は単なる情報媒体としてではなく、読解力や表現力、思考力を育成する教材としての価値を有している。この価値を最大限に活用するためには、授業内での活用を日常化することが重要である。例えば、「朝の 5 分新聞」として記事の要約と簡単な意見記述を行う活動や、新聞記事を基に社会問題を探究する学習活動が考えられる。また、同一テーマについて複数

の新聞記事を比較し、視点や論調の違いを分析することで、批判的思考力を養うことができる。さらに、記事をもとに要約や意見、反論を記述する活動は、記述力の向上にも寄与する。加えて、新聞記事を通して職業や企業、社会課題に触れることで、キャリア教育との接続も可能となる。

最後に、③アーカイブとしての価値についてである。インターネット上の情報は容易に更新・削除が可能であり、情報の信頼性という点で課題がある。一方で、新聞は紙媒体として情報が保存されるため、長期的に安定した情報源としての価値を持つ。この特性を活かし、授業においてはインターネット記事と新聞記事を比較し、情報の信頼性や根拠の違いを分析する活動が有効である。また、生徒が特定のテーマに関する新聞記事を収集・整理するスクラップ学習や、社会問題を長期的に追跡する学習活動を通して、情報の変遷を理解することができる。さらに、学校内で記事を蓄積し共有することで、独自のアーカイブを構築することも考えられる。これらの取り組みは、フェイクニュースへの対応力を含めた情報リテラシーの育成にもつながる。

3 成果と今後の課題

年間を通して、「新聞を多くの人に読んでもらうために」というテーマのもと、生徒自身が新聞の現状や課題、今後の可能性について考える探究活動を行ってきた。本活動においては、新聞購読率の低下や若年層の活字離れといった社会的課題に着目しながら、新聞の持つ価値や役割について、生徒が主体的に調査し、意見をまとめ、発表する姿が見られた。特に、本テーマに対して意欲的に取り組み、最後まで探究活動を進めてくれた4名の生徒には、改めて感謝の意を表したい。限られた活動時間の中でも、自分たちなりの視点を持ち、新聞の価値を再検討しようとする姿勢は非常に意

義深いものであった。

また、本実践は生徒にとっての学びだけでなく、教員にとっても多くの示唆を得る機会となった。本校は通信制高校であり、生徒が通学日数を選択するというコースの特性上、全員に対して同じタイミング・同じ密度で働きかけることが難しい。そのため、「新聞の有用性をどのように伝えるか」「新聞を読む意義や意味をどのように実感させるか」という点について、改めて考え直す契機となった。日常的に新聞に触れる習慣が薄れている生徒に対して、単に新聞を読むよう促すだけではなく、なぜそれが必要なのか、どのような力につながるのかを、より具体的に示していく必要があると感じた。

今後の継続課題としては、まずこの「教育的価値」と「アーカイブとしての価値」という二つの観点を、どのように授業や探究活動の中に具体的に取り入れていくかを検討していく必要がある。単発的に新聞を扱うのではなく、継続的な活動の中で位置づけ、生徒がその有用性を実感できるような工夫が求められる。また、生徒自身にとって意義のある探究活動とするためには、テーマ設定の段階から十分に精査を行うことも重要である。生徒の実態や関心、学習環境に応じて、無理なく取り組むことができ、かつ社会的意義や学習効果のあるテーマを設定することが、探究の質を左右すると感じている。

今回の実践を通して、新聞という題材は、現代社会の課題と教育の課題の両方を考えることができる有効なテーマであると改めて実感した。2026年度に向けては、2025年度の成果と課題を踏まえながら、生徒がより主体的に取り組み、学びの深まりを実感できるような探究活動へと発展させていきたい。そのためには、新聞の価値を生徒にどう伝えるか、どのような活動設計であれば学びにつながるかを意識しながら、引き続き実践を重ねていきたい。

【兵庫県 NIE 推進協議会独自認定校】

ライフデザインをすることができる

～新聞記事を調べて、これから起こることを予想する・備える～

神戸大学附属中等教育学校 校長 高木 勝久
教諭 金田 理子

1 はじめに

本校は、2024 年度より NIE 実践指定校として活動を開始した。神戸市の中でも、周りを緑に囲まれた自然豊かな高台に校舎があり、グラウンドや校舎から神戸の街を一望できる環境にある。生徒は、1 年（中学 1 年）～6 年（高校 3 年）までの 6 学年がいる 6 年間の一貫教育を行っている中等教育学校である。生徒は個性あふれる人材が多く、【見つける、調べる、まとめる、発表する】学習を 6 年間継続して、KP (Kobe プロジェクト) の実践を行っていて、卒業時には 18000 字に及ぶ論文を完成させることになっている。毎年、新しい課題を設定する生徒もいれば、複数年の間、同じ課題設定をする生徒もいる。よって、課題となるテーマを見つかる、調べる、まとめる、発表することには学年が上がることに慣れている作業ではある。しかし、今回授業実践を行った 3 年生は個人研究にまだまだ慣れていないこともあって、新聞のみならず、しっかりと資料を使った調べ学習の経験が少ないため、どのように新聞を読むことを授業に取り入れて、実践を進めていこうか悩んだ。

今回の授業実践をする前に、これまでの 2 年間で個々に作成した新聞をもとに発表を行ってきた。担当者として、新聞を作成するだけでなくさらに卒業生の協力を得て、現役アナウンサーから話し方、発表のしかたを学ばせた。それ以前は神戸新聞 NIE・NIB 推進部の三好正文シニアアドバイザーの講義を聞いて、課題の見つけ方、調べ方、新聞形式のまとめ方について学習を行った。

2 実践の内容

(1) この単元を実践するきっかけ

1・2 年生の 2 年間、課題の見つけ方、調べ方、まとめ方、発表のしかた、について学習してきたので、3 年生としての集大成として、何ができるか考えた。新聞記事をどのように使うかを考えた。家庭科という教科での取り組みで、少ない学習時間でのカリキュラムを大きく変更することは難しく、現状の家庭科での取り組みで新聞記事をどのように扱うか考えた。

(2) 本校のカリキュラムの中での実践

本校では、例年中学校 3 年の家庭科で、学習のまとめとして、“自分のライフデザインを考える”という単元を行っている。これは、高校の家庭基礎の範囲である、これまでの自分を振り返り、これからの自分はどうかになりたいかを考える学習である。その学習の中で、自分にかかけられたお金、進路や就職をするときの選択、大人になるにつれていろいろなトラブルに巻き込まれた時はどうするのか、など様々なライフイベントについて学ぶのである。生徒はこれからの人生について、中等教育学校を卒業した後は・・・ぐらいのところまでも考える機会が少なく、ましてや就職、結婚、親になること、自分の親の介護などずっとずっと先の未来を真面目に考えたことがほぼない。その事実を知ったときに、“ここで新聞記事から知る、調べる、理解する”を使おうと考えた。出会ったことがないこと、経験したことがないことを新聞記事で“知る、調べる、理解することができる”と思ったからである。

最初は遠い未来のことを考えることはなかなか難しかったようだ。しかし、こんな人になりたい、こんな仕事がしたい、こんな老後が送りたい、などどんどん自分の気持ちを書くうちに小集団ごとに話し合えたりすることで、夢や希望を書き表せるようになった。次に、もしこの夢や希望がかなわない時はどう立ち直るのか？これであきらめて良いのか？という質問を投げかけてみた。阪神・淡路大震災から立ち直った街・人たちのニュースを調べ始めると生徒がいた。東日本大震災からどのようにして人は人や復興していこうとしているのか、調べると生徒が出てきた。『その時に使える保険があるのか』、『立ち直るにはお金が必要だね』など生徒たちから口々にいろいろな考えや意見が出てきた。ここからは、こちらが心配することなく、『こんな時にはどうしているのか』、『海外ではどうなってるのか』、『今まで知らなかったことをどんどん新聞記事で調べている』という生徒が増えた。新聞記事は、記者の方の個性がでることがメリットにもデメリットにもなるが、生徒にとっては『記事は端的に事実がまとめられていてわかりやすい』と評判だった。それも手伝ってか、調べ学習がどんどん進んだ。また、そこからどう立ち直っていくのかという『解決策』のようなものがある記事、自分はどうのようにトラブルや困難に立ち向かい、解決できるか、立ち直れるかのヒントが書いてある記事を探すようになり

[illegible]

『生徒のワークシート ①』

自分の生き方や考え方に影響を与えるような記事を探すようになった。

※ライフデザインをする、一つ一つの枠に
細かく予想した生徒もいれば、ざっくりと未
来を考えた生徒がいる。

『生徒のワークシート ②』

わだしのライフデザイン		自己		年齢別						
	29	30	40	50	60	70	80	90	100	
学業・仕事	大学1年生 理学 大2(物理学) 物理1(神・天学) 立止って見上げる状況	物理学専攻 札幌								
家族・生活	一人暮らし	引っ越し(新居)	海外旅行		退職金パート 新・四半期決算の準備の準備		介護施設に入る			
その他	初志・復讐劇場 読者参加型書	研究はたまたまな	読者参加型 読者参加型	趣味への参加 と読者参加		半歩				
もしも...	読者参加型に転じる		読者参加型に転じる			半歩				

※3つの時代に区切ってリスク（起こってほしくないこと、起こったらお金がかかる、痛みや苦しみを伴う）を考えさせた

『生徒のワー』『生徒のワークシート ③』

調べた 記事	https://www.bbc.com/japanese/health-56100106 https://www.who.int/news-room/feature-stories/detail/covid-19-what-we-know-and-what-we-dont-know 2023年8月16日(金) 日本経済新聞	https://www.npr.com/sections/health/2023/08/16/1208114820/covid-19-what-we-know-and-what-we-dont-know 2023年12月28日(木) 日本経済新聞
どう 思う かを 書く。	感染経路は不明だが、 経済活動などは保身人になってももう大丈夫なときとつづ自分も懸念。 学業中は長閑な学校の授業が楽だ。	感染経路は受け入れる、想定しており、 感染経路は健康な状態も受ける、 感染経路は不明だが、 経済活動は保身人。
わかったこと 人によって大抵にたいに感染の輪によって差があり、それに合わせて対策	感染・関心を持つこと 世と今の感染生活のあり方など。	

※生徒が予想したリスクについて新聞記事を使って調べた。リスクの詳しい内容と、その時にどんなことに困るか、どのように立ち直ることができるのか、どのような備えをしておけば良いかを理解することができた。

(4)発表に向けて



『クラス発表前に、小集団ごとに発表 ①』



『クラス発表前に、小集団ごとに発表 ②』



『クラス発表前に、小集団ごとに発表 ③』



『クラス発表前に、小集団ごとに発表 ④』

上の写真からもわかるように、本校では、4人で1グループの小集団活動が様々な学習に

取り入れられている。クラスで発表する前のリハーサルを兼ねて、クラスでの発表に向けて修正を行う生徒もいる。小集団内での発表時に、互いにアドバイスをしてクラス内発表でさらに良い発表になるようにする、また、大勢の前で発言がしにくい生徒も、少人数での発表を先に行うことでグループ内での意見やアドバイスを受けて、自信をもってクラス内での発表を行うことができるというメリットがある。

(5)クラスでの発表

クラス内の発表は、本来ならば小集団の代表だけが行い、10グループで10人の発表にとどまるのであるが、今回の“ライフデザインをすることができる”～新聞記事を調べて、これから起こることを予想する・備える～の単元では、短時間でも一人一人の発表をクラス内でした方が良いと考え、少し時間がかかったが全員発表を行った。時間短縮のために事前に提出させたシートをスクリーンに映して、生徒は発表に集中できるようにした。必ず質問か感想を言わせるようにした。



(6)生徒の感想

○いざこれからの自分の人生をどう生きかと言われるとペンが止まったが、あと数年で成人になり、選択の連続であることが身に染みました。よく考えて人生設計するのは自分と向き合う時間になってとても楽しかった。
○どんどんAIとかが出てきて、逆にこれまでの人生設計でよいのか、とも思った。

『ライフデザインの発表振り返りシート』

わたしのライフデザインを発表しよう！！ ()組 ()番 名前()

名前	リスクに対する考えなど	(いいね！)と思うところ	質問・メモ
自分の小集団			

振り返り

わかったこと	興味・関心をもったこと
疑問に思ったこと	振り返り

※まずは、小集団で発表を行う。その後、クラス内で発表を行う。振り返りは4つの観点で書かせている。

生徒の感想続き

○正直、自分の将来をこんなに考えたことがなかったので楽しかった。でも、うまくいかないこともあると思うので、リスク管理についてもしっかり考えておきたいと思った。

○まだ、自分の将来のことが考えられなかったが、取り組んでいるうちにしたいことや向かうべき方向が少しずつ見えてきた。自分の生き方はこれから変わっていくと思うけど、その都度自分に向き合っていきたいと思った。

○仲間の夢や希望を知ることができて、楽しかった。

○新聞記事にはいろいろなことが端的にまとめて書いてあるので、欲しい情報が手に入りやすかった。

○失敗した人のコメントなども知ることができて、メンタル面での備えについても考える

ことができた。

○詐欺にあったり、トラブルに巻き込まれた人を助けるための仕組みが国や地方に備わっているの、自分に予期せぬことが起きたら焦らずに周りに相談しようと思った。

○同じような記事を調べたときに、いろいろな記者さん(新聞社さん)が、それぞれの視点で記事を書いているので、いろいろな意見や考えを参考にすることができた。

○幼稚園や小学校で語った夢をこんなに現実的に詳細に考えられたことが楽しかったです。リスクを考えているだけでなく、リスクからの立ち直り方が重要であるという考えを大切にしたい。

3 成果と今後の課題

生徒にとって、ライフデザインをするということは、未来、近い未来はこれまでに考えたことがあった。しかし、家庭科の授業で行うライフデザインとは、進学、就職で終わらずに、その後のことまで考えるということである。結婚や、親になること、そして親が病気になったら、家を建てたら、南海トラフのような大きな地震や災害が起こったら、自分が病気になったら、という遠い未来のことまで考えたことがなかったので、最初は大変戸惑ったと思われる。しかし、楽しいことや自夢や希望をどんどん書いていくにつれ、楽しくなってきたのだろう、いろいろな年代でやりたいことや夢を記入できるようになった。

また、感想にもあるようにリスクという予想がつかないことを新聞で調べることは生徒たちの知りたい、理解したいという気持ちをよりいっそう強めることができた。また、同じ記事でもいろいろな記者の方の考えを知ることができて、仲間同士で意見交換できていることが深い学びにつながった。

課題としては、調べ学習や発表に時間がかかるので、計画をしっかりとて準備しておかないといけないことがわかった。

2025 年度 兵庫県 NIE(教育に新聞を) 実践発表会



目 的:新聞記事を使った授業実践発表を聞き、実践例について話し合い、研修・研鑽を深める。

日 時:2026 年2月5日(木)13時30分～16時 (受付13時)

会 場:神戸新聞本社 14 階 神戸市中央区東川崎町1-5-7

JR 神戸線「神戸駅」から南へ徒歩約 6 分「高速神戸駅」から南へ徒歩約 10 分

プログラム

- 開会挨拶 竹内 弘明 兵庫県 NIE 推進協議会会長
- 記者講演 「中東取材で見えてきたもの 世界で今何が起きているのか」
朝日新聞神戸総局 新屋 絵理 記者
- 実践発表①「新聞が当たり前にある風景を創る～全校での継続した歩みと、ICT・委員会活動への広がり～」
姫路市立豊富小中学校 川村 かおり教諭
- 実践発表②「だれもが気軽に取り組むことができる新聞の活用法」
神戸市立雲雀丘中学校 加治 譲二教諭
- 実践発表③「定時制高校での NIE 活動」
兵庫県立湊川高等学校 住本 拓自教諭
- 講 評 兵庫県教育委員会事務局高校教育課指導主事
神戸市教育委員会事務局学びの推進課指導主事

[主 催] 兵庫県 NIE 推進協議会

[後 援] 兵庫県教育委員会 神戸市教育委員会 兵庫県立学校長協会

兵庫県中学校長会 兵庫県小学校長会 兵庫県私立中学高等学校連合会

朝日新聞神戸総局 神戸新聞社 産経新聞社神戸総局 日本経済新聞社

毎日新聞神戸支局 読売新聞神戸総局 共同通信社神戸支局 時事通信社

*お問い合わせ 兵庫県 NIE 推進協議会 Newspaper in Education(教育に新聞を)

〒650-8571 神戸市中央区東川崎町 1-5-7 神戸新聞社内

TEL:078-362-7054 FAX:078-362-7424 メール: hyogo-nie@kobe-np.co.jp



Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2025 年度
『兵庫県N I E実践報告書』

－2026 年 5 月発行－

兵庫県N I E推進協議会 編

〒650－8571

神戸市中央区東川崎町 1－5－7

神戸新聞社内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <https://www8.kobe-np.co.jp/nie/>

「教育に新聞を」実践 小・中学校等編

◇「新聞が当たり前にある風景」のその先へ (姫路市立豊富小中学校)

◇小中一貫として取り組むNIE教育

(南あわじ市立沼島小学校・南あわじ市立沼島中学校)

「教育に新聞を」実践 小・中・高等学校編

◇新聞を通して伝え合う平和 (愛徳学園小・中・高等学校)

「教育に新聞を」実践 高等学校編

◇「はがき新聞」の活用実践 (兵庫県立伊川谷高等学校)

◇探究活動に向けた新聞活用 (兵庫県立有馬高等学校)

◇新聞を活用して社会の諸問題について考える (兵庫県立西宮高等学校)

◇新聞を共通言語とする学習共同体の形成 (兵庫県立神戸甲北高等学校)

◇新聞・地図・数字・生成AIを活用して、NIEの未来を開く

(兵庫県立網干高等学校)

◇新聞で広げる視野と自ら考える力の獲得へ (兵庫県立山崎高等学校)

◇地域デザイン類型とNIE活動の取り組み (兵庫県立播磨南高等学校)

◇新聞を活用した異世代・異文化交流 (兵庫県立洲本高等学校)

◇定時制高校でのNIE活動 (兵庫県立湊川高等学校)

◇新聞を多くの人に読んでもらうために

(クラーク記念国際高等学校クラークスマート芦屋)

兵庫県NIE推進協議会独自認定校

◇ライフデザインをすることができる (神戸大学附属中等教育学校)